

---

# そら色ワルツ

高月翡翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そら色ワルツ

### 【Nコード】

N7295V

### 【作者名】

高月翡翠

### 【あらすじ】

中学二年の三月、白石蔵ノ介は気絶している少女を助けた。

その少女は外国人で、日本語が流暢で病弱だという。

彼女と出会ったことで白石は自分の知る世界の裏側を

見ることとなった……が、基本は日常話。

少女の四天寺寺での日々がメイン。オリキャラが多々出てきます。

設定は色々混ざって解釈されてたり。

## 壊れた時計 前編（前書き）

オリキャラ出ていたりする話と言つか関西弁は偽物だったり、復活との設定クロスがありますが、余り表だつては出てこないはずで、

独自設定あります。

## 壊れた時計 前編

そら色ワルツ 第一話 壊れた時計 前編

白石蔵ノ介と彼女との出会いが起きたのは、彼が中学二年生から、三年生に進級する間の春休みのことだ。

昼頃に自転車を走らせて、まだ櫻が咲いていない櫻並木道を通っている時、少女が倒れていたのだ。

側にはスーツケースが一つと、それよりも小さな濃い茶色のトランクが一つ、落ちていた。

「しっかり！」

少女は外人だった。

外見は十代前半で真っ白いゴシッククロリータの服を着ている。服は少し少女には大きい。

規則正しい呼吸をしているが、時折、苦しそうに呻く。

救急車を呼ぶべきかと白石が携帯電話を出そうとしたが、それよりも、友人の家がしている医院が近いことに気付く。

「Io sono duro……」

「どこの言葉やる。英語やないみたいやけど」

英語は学校で習ったが、それとは何かが違う。

呟いた少女の言葉を気にしながらも、白石は自転車を置いて少女を背負い、荷物は自転車の側に置いた。スーツケースは運べないがトランク一つならば運べるだろうと白石はトランクも片手で運ぶ。

自転車の鍵をかけておくと、このまま医院まで担いでいく。自転

車で少女を運ぶことは出来なかったからだ。

『忍足医院』の立て札が着いている建物まで彼女を運んだ。

「白石？　この子、誰や？」

「謙也。お前のおとんに診てもらって欲しい。彼女、倒れとってん。俺は彼女の荷物と自転車また持って来るから」

「浪速のスピードスターに任せとき！」

買い出しに行こうとしていた忍足謙也と鉢合わせして、白石は彼女を謙也に託した。

謙也は彼女を白石から受け取ると、すぐに家の中に入っていく。白石は道を戻ると自転車とスーツケースを回収した。

スーツケースは真新しい。

『忍足医院』は一軒家を改築した医院であり、白石も何度か診察を受けたことがある。

診察室のベッドでは彼女が目を閉じたままだ。診察室に居る患者は彼女だけだ。今日は診察に来る人が少ないらしい。

「おとんが言うには、貧血らしいわ」

「貧血か。弱々しそうな子やよな」

「旅行者か……荷物、大きいやん」

ベッドの傍らにトランクとスーツケースを置いた。白石と謙也が話していると、少女が身じろぎした。

「……Dove？」

「外国語話したぞ！ 白石！！」

「この子、外人っぽいから」

「イタリア人だけど、ここは、何処なの？」

「日本語喋った。しかもぺらぺらや！！」

少女は最初はイタリア語を話していたが、謙也の言葉を聞いてすぐに日本語に切り替えた。日本語の発音は完璧である。標準語だ。身体を起こした少女は目眩が起きたのか、頭を抑えていた。

「キミ、櫻の並木道のところで気絶しとったんや」

白石が経緯を話すと彼女は瞬きをした。

「貴方が運んでくれたの？ ありがとう」

口元に微笑を浮かべて少女が礼を言う。それから少女が大きく息を吐いていると謙也の母親であり看護師をしている忍足万里子が来た。腕にはカルテを挟んだクリップボードを持っていて、ナース服を着ている。

「起きたみたいやね。貴方、名前言える？」

「私はルシエラ・ガートルード・ジンガレットィ。大阪には旅行で来ました」

流暢な日本語を話したことを万里子も驚いていた。

付け足すようにルシエラは自分のことを話し始める。

実家で勉強をしていたのだが、見聞を広めるために大阪に旅行に  
来たらしい。

身体の方が弱いため、学校には通っていなかったがこのところは  
丈夫になってきたと言う。日本語も実家で習ったようだ。

「でも、倒れたやん」

「アクシデントがあって……」

謙也のツツコミにルシエラは力無く微笑む。

「この子は病人なんやから。体調が回復するまで入院して貰うこと  
になるけど」

「パスポートとか必要なものはトランクの中にありますから、後で  
出します」

体調が悪そうにしながらもルシエラははっきりと話す。ルシエラ  
はベッドから上半身を起こすだけでもきつく立ち上がることが出来  
そうにないというのは誰の目にも明らかだった。

「俺は忍足謙也、こっちは白石蔵ノ介。アンタ、名前が長いな」

「外国だと人によってはこれぐらいはあるわ……」

疲れが取れていないのかルシエラは一息つくと、事情を話し始め  
た。

イタリアに帰ろうとはしたのだが体調が悪くなり、回復するまで  
休みたいとルシエラは言ってきた。

万里子もそれが良いと言っていた。

先の予定はイタリアに帰る以外には決まっていけないので、休めるだけ休むらしい。

「アンタ達。この子は眠らないといけないから」

「おかん、出とるから……白石、行こうや」

「ゆっくり養生しいや。ルシエラちゃん」

万里子の言葉に謙也が白石を促す。白石の言葉にルシエラは微笑と右手を軽く挙げることで返事とした。診療所を出て外に出る。

「外人さんもあんなに日本語上手く喋られるんやな」

「俺、サプリメント買わな……」

「お前、サプリメント好きやな。効くんか？」

「効くで。ほなな」

白石は謙也と別れ、自転車のペダルを漕いだ。

謙也が言っていたようにルシエラは日本語が非常に得意であった。

一人で大阪に旅行に来たと言うが、身なりからして金持ちである印象を受けたが、仮に、病弱だったり、重度の貧血持ちならば一人で旅行に来るべきではない。

サプリメントを薬局で買いながらも白石はルシエラのことを気にしていた。



春休みになっても部活は通常通りにある。

ルシエラが入院をしてから数日が経過した。彼女についての話は謙也から聞いた。謙也もテニス部である。

「翔太とよお話しとるわ。アイツ、日本語を話せると想たら、読むのも出来てな。新聞とか読んどったわ」

「起きあがれるようになったんか？」

「身体の方は回復してきたらしいわ。おとん曰く、疲労の貧血やかで」

「先輩等、何の話をしてるんっすか」

今日の部活を終えて部室で白石は謙也からルシエラの容態について聞いていた。

彼女は日本語を話せるだけではなく、読みも出来るようだ。恐らくは書くことも出来るはずである。

二人が話していると、会話に割って入ってきたのは一年生の財前光だ。

「白石が倒れとった外人の女の子を助けてな。容態を聞かれとったんや」

「まあ、紳士ね。蔵リン！」

「オレも小春が倒れとったら助けるで！」

会話に加わったのは二年生の金色小春と一氏ユウジだ。仲良く肩

を組んでいる。

「大阪は他と比べて治安悪いところっすけど、最近はホテルの爆破事件とかあるし、物騒っすわ」

「爆破事件……？」

「最近起きた事件ね。夜中にホテルが爆発したって言うわ」

財前が大阪で起きた事件について言う。

ホテルの爆破事件というのは、夜中に高級ホテルが入ったビルが半壊したという事件だ。

死傷者が十人を超えたらしい。外国のテログループの戦いだとか言われていたらしいが、情報が曖昧なところがあるようだ。

大阪は掻っ払いやすリなどが他県に比べて多いのもあるが、テロ事件があったと言われると物騒だと想う。

「このところの大阪はラブ&ピースが足らんよな」

「ラブは足りてるわ」

「そうよね」

「……先輩等、うざったい」

謙也が握り拳を作って力説し、ユウジが否定し小春がユウジの意見に賛同する。べたべたしている二人に財前が、鬱陶しそうに視線を送った。

全員が着替え終わって、部室から出るのを確認してからテニス部部長として部室の戸締まりをする。

「あの子の見舞い、行こうかな」

「行ってやると喜ぶと想うわ。アイツ、心細いやろっし」

白石はルシエラの見舞いへと行くことに決めた。

謙也と共に忍足医院まで自転車を走らせる。ルシエラは別の病室へと移動していた。

忍足医院の病室は個室が何部屋かあるだけだ。日当たりのいい部屋に彼女は居た。

ベッドの上で上半身を起こして新聞を読んでいる。

「白石さん」

ニュース覧を眺めていたルシエラは白石の気配に気がつき、微笑する。話ながら彼女は新聞を折りたたんでいた。

「体調、良くなったみたいやな」

「先生が、もう二、三日あれば、イタリアに帰られるぐらいの体力は戻るって。無事に帰りたいかな……倒れたのは、予定外だし」

「倒れたりしたら大変やから、体調がちゃんと治ってからの方がエエで」

先生というのは謙也の父親のことだ。イタリアから日本までは飛行機を使うにしろ船を使うにしろ長旅だ。

「今日は午後から出かけるつもりなの。治療費とか準備しないとい

けないし」

「入院費とかかかりそうやしな……」

白石も話には聞いたことがあるが、海外の者が日本で治療を受けると大分高額になるらしかった。

保険のシステムなども国によって違う。ルシエラを病院に運んだのは白石ではあるが……複雑そうにする白石にルシエラは気遣いの微笑を浮かべる。

「手元にそんなないだけで、お金はあるから。貴方が助けてくれたお陰で、休めたわ」

「銀行の位置とか解るんか」

「地図は謙也に持って来て貰って、さっき見たし、用事に付き合ってくれてるって言うていたから」

サイドテーブルにはこの辺りの地図が置かれていた。新聞を読む前に地図も読んでしまっていたらしい。

地図を読んだとはいえ、土地勘は無いも同然なので案内人が居るのだろう。

二人が話していると、高速の足音が聞こえた。

「すまん。ルシエラ。お前を案内するつもりやったんやが、陸上部の助っ人に呼ばれてこれから行ってくるわ」

「陸上部……？」

「お前、助っ人に呼ばれることよくあるよな」

ルシエラを案内すると言っていた謙也だったが、陸上部の助っ人に今から行くらしく、案内が出来なくなったらしい。

謙也は足が非常に速く、”浪速のスピードスター”の異名を持っている。

テニス部に所属をしている謙也だがそのスピードで他の部活を助けることもあった。

「他校の奴が速いらしくてな、泣きつかれたんやて」

「頼られているなら、助けてきた方が良いわ。私は一人でも行けるし」

そう言うルシエラではあるが彼女は病み上がりである。

「ルシエラちゃんを俺が案内するわ」

「白石、頼むわ。ルシエラは病人で、治りかけやからな」

「ありがとうございます。白石さん……準備があるから、一時間後ぐらいで、良いですか？」

「俺も着替えてくる」

白石が言うと謙也が安心した様にルシエラが少し困ったように微笑んでいた。白石は学生服のままだったので、着替えるために一度自宅に戻った。

一時間後、準備をして戻るとルシエラが忍足医院の前で待っていた。始めて白石と会ったときに着ていた

白色のゴシッククロリータに濃い茶色のトランク、白い日傘と地図

を持っていた。

「案内、お願いします」

「その服なんか。目立つな」

「着慣れているものが良くて」

着慣れていると言うがサイズはやや大きめであり、レースやフリルがふんだんに使われている。

ルシエラが地図を見せる。行かなければいけない銀行は忍足医院から電車に乗って一駅分離れたところにあつた。

春の日差しが今日は強い。

「旅行に来たんやろう。大阪、どんなところを見て回ったん？」

「……大阪城とか……通天閣とか」

「観光地やな」

話ながら白石とルシエラは電車に乗る。白石の真似をしてルシエラは切符を買っていた。

一駅分だけ電車に乗ると降りた。

着いたところは繁華街だ。

「日本は電車の方が早く着けるのね」

「イタリアやと違うんか」

「車の方が速くて。大都市の移動だと、電車の方が速いんだけど」

ルシエラはイタリア出身であるとは本人が話していた。イタリアというと白石のイメージとしては長靴の形をしていて、パスタやトマトを食べていて、陽気で明るいと言った感じだ。

「大都市というところとか……フィレンツェとか、ナポリとか、シチリア？」

「そうね。イタリアは南北に長いから、都市の違いとか大きいの」

「後はトマトとパスタを食っとる感じがするな」

「……ナポリタンは食べないわよ？」

「それは知っとるわ」

若干ではあるがルシエラの声が低くなる。トマトとパスタが気に障ったらしい。

「イタリア人やからナポリタン食うやろで知らないとか答えたらイタリア人なのにとか言っていたし……翔太が間に入ってくれたけど、イタリア人だって色々居るのよ」

どうやら、謙也と話していたときにナポリタンの話題になったようだ。ナポリタンは日本発祥のパスタであり、イタリアにナポリタンは存在しない。ルシエラの機嫌が悪くなっていた。

「ルシエラちゃんはイタリアの……どの辺に住んどったんや」

「北の方よ。ベルガモって都市」

白石は話題を変えるとルシエラが答えてくれた。ベルガモといわれてもどんな都市なのか白石は知らない。

話ながら銀行へと行き、中に入る。ルシエラは器用にトランクを開けると中から銀行のカードを取り出していた。機械に入れて番号を押して暗証番号を入れてお金を降ろしていたが、

(……かなり分厚い諭吉さんやったような……あれ諭吉さんやよな)

日本円の最高紙幣、一万円をルシエラは三十枚以上は降ろしていた。金持ちだと聞いているが、一気に落とすすぎである気がした。

三十万もあれば一ヶ月は一家族が暮らせる。

「お金、降ろしたんだけど」

「量が多くないか？」

「入院費とか全額支払ったりするとこれぐらいはいるから」

ルシエラは降ろした資金の一部を取り出した財布に入れて、もういくらかを封筒に入れてトランクに入れていた。

それから携帯電話を取り出す。

「携帯、持つとるんやな」

「イタリアに連絡をするときにいるし」

携帯電話の画面をルシエラは眺めていた。ルシエラが持つ携帯電



話は黒く、画面が大きめである。  
無骨な形をしていた。

「身内は、心配しとらんかったか」

「してみたい……用事は終わったのだけれど、必要なものを揃えないと」

「買い物は付き合っよ。服とか買わなあかんやろ」

「そうね。揃えなきゃ……本とか欲しいかな」

資金を下ろすと言う目的が終わってしまっていたが、買い物が残っていた。白石はルシエラの買い物に付き合うことにする。

彼が気になるのはルシエラの服だった。真っ白いゴシッククロリータは注目を集めている。

ゴシッククロリータを着ている者は珍しくはないのだが、外人のルシエラが着ていると目立っていた。

時間は午後二時を過ぎたところだ。

ルシエラが本が欲しいと言ったので白石は大きめの書展に案内した。一階建ての書店ではあるがフロアは学校の教室が二つ分ほどに広い。

「植物図鑑の良さそうなのが出とるわ」

「……好きなの？」

「毒草とか好きやな。日本三大毒草とか……」

「トリカブト、ドクウツギ、ドクゼリだったわね」

分厚い植物図鑑を白石は手に取る。

白石は幼い頃から植物図鑑を読んできた。美しいが毒を持っている毒草が好みである。

このことを言う周囲は引く。

ルシエラはすぐに日本三大毒草を答えていた。

「詳しいな」

「病室で暇なときに本を色々借りて読んでいたの」

本屋には一時間程居た。

ルシエラは様々な本を手にとっては、立ち読みをしていたり、手に取ったりしていた。

購入した本にブックカバーが付くのを彼女は珍しそうに眺めていた。イタリアでは本にはブックカバーは付かないらしい。

その後で服を買ったりしていた。ルシエラはゴシッククロリータの服を欲しがっていたようだがこの辺りにはゴシッククロリータの服を売っている店は無く、量販店で何着か彼女は服を購入していた。

「四時になったな」

「買い物、付き合ってくれてありがとう。白石さん、助かったわ」

「そろそろ帰ろうか。病院まで送っていくわ」

ルシエラはトランクの中に荷物を押し込んでいた。白石が携帯電話で時刻を確認した。用事が終わったなら、早めに帰っておくべきだ。夕方になってきたせいか、人も増えてきている。

「蔵リン！」

「白石」

「小春にユウジ」

帰ろうとした白石に小春とユウジが呼びかけてきた。二人は私服に着替えていて、買い物をしていたのだろう、紙袋やスーパーのビニール袋を手に持っている。お笑いライブが近いのでそのための買い出しらしい。

「今度のお笑いライブのネタのために買いだし来たんやけど」

「ユウ君は手先が器用だから小道具とか作るのが上手いのよね」

「お笑いライブ、期待しとるわ。でも、部活もしっかりやってや」

「解つとるで。お笑いもテニスも手は抜かん」

「ところで蔵リンは一人で買い物？」

「俺は」

小春に聞かれ、白石は答えを返そうとして、戸惑う。

一人で買い物に来たと頷きそうになった。が、頷いてはいけない。何故ならば、自分が買い物に来たのは……。

慌てて周囲を見回すが、白石の側には小春とユウジしか居ない。

「……ルシエラちゃん、何処に行った？」

「ルシエラ……？ 謙也の病院に入院しとるって言っ」

「居らんかったか」

「……誰も居なかったけど……そもそも蔵リンは一人で……」

聞いてみるがユウジも小春も白石が一人で買い物に来たと思っ  
ている。おかしいと白石は感じた。

一言も言わずに彼女が白石を置き去りにして帰るなど考えられな  
い。それに彼女は病み上がりなのだ。

「二人ともまた今度な。ルシエラちゃんを探すわ」

離れてまだそんなに時間は経っていない。近くにいるはずだと白  
石はルシエラを探しに小春とユウジを置いて街中を走っていった。

壊れた時計 前編（後書き）

後半に纏めて書きます。

壊れた時計 後編(前書き)

後半部分です。

戦闘描写とか血なまぐさいとか、テニスはしてません。

## 壊れた時計 後編

【そら色ワルツ 第一話 壊れた時計 後編】

ルシエラは街中を歩いていて。

この辺りの地図は憶えてしまっている。歩きながら肌を感じるのは自分を追ってくる気配だ。複数に増えている。

白石ではない。同級生らしい二人と会ったときに撒いてきたし、記憶も操作しておいた。

襲ってこないのはここが街中であることとルシエラの実力を知っているからだ。追われる振りをしながら、

再開発地区に誘い込む。買い物しながら情報を集めたが、再開発と言っておきながらも数年間、放置されている

廃ビルが建ち並ぶ場所へと向かう。

「ようやく来たのか。アドラストエア」

「……ミレーディ……じゃ、無いわね」

開けた場所へと出る。廃ビルに囲まれていた。ルシエラの前に居たのはすみれ色のワンピースを着たうす桃色の髪をした

二十代に入ったばかりの女性だ。取り巻きの様に何人も黒服の男達が居る。

最初の判断をルシエラはすぐに打ち消した。

ミレーディと彼女が呼んだ女性は笑う。

「解るか。お前が殺した私の娘の身体を借りた」

娘、と聞いてルシエラは彼女の正体を察する。

「借りたじゃなくて奪ったが正しいでしょう。ドン・ファルソ。エストラーネオファミリーの憑依弾かしら？ それとも、エヴォカトーレファミリーの秘術？ 貴方も私が焼き殺したはずよ」

驚く様子もなく、ルシエラは言う。

裏社会は場合によっては他の肉体に転移するなど造作もない者も居る。エストラーネオファミリーもエヴォカトーレファミリーもその手の秘術を所持しているマフィアの一派だ。

「我がファルソファミリーを滅ぼしにかかるとはな。やられたよ。イタリアの基盤も全て消されている」

「大変だったの。ボンゴレを動かしたりとか、知り合いに頼んだりとか」

「アドラスティア、お前は殺す。私はまだ終わっていない。ファルソファミリーもだ」

質問に向こうは答えなかったが答えは期待していなかった。

ファルソファミリーは一週間もあれば、完全に終わってしまう。

各地の基盤はボンゴレファミリーを上手に動かして、潰しておいた。

ミレーディの声と共に周囲に黒服のファルソファミリーの構成員が現れた。十人はいる。

ルシエラはトランクを左手に、白い日傘を右手に持った状態のまま改めてミレーディを見据えた。

「いま、あなたの終りが来た。わたしはわが怒りをあなたに漏らし、あなたの行いに従って、



あなたをさばき、あなたのもろもろの憎むべき物のためにあなたを罰する……と、言っておくわ」

かつて彼女が目標としていた人物のように聖書の一節を口にした。黒服の男二人がルシエラに拳銃を向けて来たが、ルシエラは日傘の柄を操作してから地面に突き刺し、トランクを薄く開けて中身を取り出すと、わずかに蓋を開けてから投擲した。

投擲したのは液体の入った長方形のボトルで、真ん中から上が細くなっていてそこから中身が出せるようになっていて。

液体は爆発し、男二人の射撃を止めて、血まみれにした。

日傘を地面から抜き取ると、三人目の男のナイフを持っている右手首に尖らせた日傘の柄を突き刺すと蹴る。

四人目がPDWを撃ってきたが日傘を広げて防御した。何十発もの弾もルシエラの白い日傘を通さずに弾かれて落ちる。

パーソナルディフェンススウェポン、短機関銃とアサルトライフルの中間に位置するその銃器は投げられたボトルを撃ってしまった。また爆発する。

「あのホテルの戦いで深手を負いながらもこれだけの戦いを……」

「……面倒だわ……」

五人目がナイフを投擲してきたが、指先で刃先を受け止めて逆に投げ返して喉に突き刺した。

ミレーデイは離れた場所に居る。ボトルも数が少ないので乱用したくはない。残りの半分を認識しながらルシエラは自分の血に呼びかけた。

「一斉に攻撃すれば」

リーダー格らしい黒服の男が言おうとしたとき、身体が熱くなっていた。足下が、自分の腕が火に包まれている。

「自前の液体火薬よ」

五人が燃えていく。炎に囲まれながらルシエラは日傘を閉じて、ミレーディに向かって真っ直ぐに投げた。

ミレーディの心臓に尖った白い日傘が突き刺さる。さしたる抵抗もなく、ミレーディは倒れた。

呆気ないとルシエラは想う。

「ル、ルシエラちゃん……」

「……白石さん……？ どうして？」

「どうしてって、それはこっちの台詞や。いきなり居らんくなったから、探しとって……これ、何や。ルシエラちゃん……人を……」

振り返ると、置いてきたはずの白石蔵ノ介が居た。驚いている。それは無理もない。彼の前では傘が突き刺さって

死んでいる女と焼死している男が何人もいる。殺したのは自分だ。記憶を消しておいたしここに来た時点で領域を操作し、この辺りは隠しておいたのに白石は発見している。

（ここまで力が落ちているなんて……）

縮んだことと言い、血が退化していることと言い、厄介なことだらけだ。液体火薬を作ってみたが死体が残っているのも

駄目だ。昔は死体なんて残さずに焼いていた。あえて残していた時もあるが今回は残さないように焼いたはずなのに焦げた匂いと匂いの元がある。

白石が困惑しているの………と言うか困惑しない方が歪んでいるのだ例えは自分みたいに………どう処理するか悩んだ。

彼はルシエラの前に来ている。

喋ろうとしていたルシエラだったがそれよりも先に右手で白石を思いきり押していた。

ルシエラを探すために白石は街中を走り回っていたが、手がかりらしいものがなかった。

そんな時に女子高生二人組が白いゴシッククロリータの女の子が向こうの方に歩いていったと言うことを話題にしていたので、向かってみた。そうすると空間が微妙に歪んでいる気がしたのだが構わずに通り返けた。

そこが再開発地区であり、広々とした場所であることは白石も話しに聞いていたが、そこで人が何人も燃えていた。

更に、ルシエラがそこにおいて日傘を閉じて女に向かって投げつけて突き刺していた。

テレビや映画の撮影ではない。暑かったし、人のうめき声だっけ聞こえたが、やがて途切れた。

何事もなかったようにしているルシエラに白石は話しかけたが、すぐ後で突き飛ばされた。

後方に飛ばされた白石が見たのはルシエラの右胸にレーザービームが真っ直ぐに突き刺さったところだ。

「……………」

「容赦など無いな……アドラスティア……お陰で条件が満たせたわけだが……」

「……生きとる……?」

ルシエラが倒れる。傘が刺さった女は喋りながら、左手で白い日傘を抜くと地面に落とした。

心臓に日傘は刺さっていたはずだ。生き返った状況に白石は混乱していたが、倒れているルシエラに目をやった。

「……ミレーディは……普通の人間だったはず……」

「ルシエラちゃん!? ゾンビ……?」

「ゾンビじゃないわよ……丈夫なだけ……」

右胸をレーザーに貫かれたはずのルシエラは起き上がっていた。起き上がることなど、普通は出来ない。

白いゴシッククロリータの右胸は穴が開いていたが、じわじわと治ってきている。

状況を理解しようにも脳が追いつかない。

「娘を私のスペアにするときに奴から力を譲って貰ったのだ。イスカリオテの獣の力を……十三番目の血、最強の狂気の血の力が……私の中にはある」

「十三番目の血……レグナムは貴方に力を分けていたの……条件が重ならないと行けなかったから、あの時は気づけなかったのね」

冷静に喋っているルシエラではあるが声には若干の焦りが出てい

た。ミレーディとルシエラが呼んだ女性が夕日に照らされている。

「影が……」

「十三番目の血……厄介な」

ミレーディの足下に黒い影が広がった。影から黒く丸い玉が出てくる。

黒く丸い玉からいくつもの小型の球体が発射されるが、ルシエラに届く前に四散した。球体に瓦礫の破片が集まる。

「警察に……」

「呼んでどうするのよ。殺されるわよ……レグナム……殺したというのに死んでからも私に手間をかけされる」

殺した、とルシエラは苦々しく口にしていた。ミレーディを躊躇無く殺したことと言い、彼女は殺すことについては何も想わならしい。白石としてはこれは夢だと想いたかった。白い日傘がルシエラの方に転がってくる。

風もないのにまるで元の居場所に戻るかの如く、ルシエラの足下に来た。白石はまず浮かんだことをとにかく

ルシエラに話してみることにした。一種の現実逃避だ。

「レグナムって誰や」

「……ファルソが雇った殺し屋よ……イスカリオテの獣を宿した……十二番目の血の他に四番目と五番目も取り込んでるわね。何処まで力を持つてるかしら」

殺し屋と言うと白石的には金を貰って誰かを殺すドラマや漫画の中でしか居ない職業ではあったが、本当にいたらしい。

ルシエラもそうなのだろうか……致命傷を受けていたはずなのに起き上がっているし、対応も冷静すぎた。

こんな人外な出来事に慣れきっている。ミレーディの身体が影のような闇に包まれていつていた。

「これが狂気の血……もつとだ。アドラスティアを殺すほどの……全てを滅ぼすほどの力を……！」

影が濃密になっていき、空気が重苦しくなっていく。ルシエラはトランクから薬ビンを一つとナイフを取り出した。

薬ビンは掌に載るだけのサイズで、ナイフは刃渡が十三センチほどであり、柄の先端には細い鎖に指輪がぶら下がっていた。

「白石さん……逃げちゃ駄目よ……？ 処理が面倒だし、終わったらきちんと処理してあげるから」

「怖いことばかり言うてる気がするんやけど……」

「逃げたところでここで倒せなかったらこの辺り一帯、滅んじやうけど」

あつさりと言われ続ける言葉をどうにか白石は呑み込んでいくが、どうもアレを何とかしないと危ないらしい。

「滅ぶ……？」

「イスカリオテの獣はそれだけの力を持っているわ……」

ルシエラは薬の中身を一気に飲み干した。少しだけ苦しそうにしながら、空になったビンをトランクの隙間に押し込んだ。ナイフを右手に持つ。

「そんな短い刃物で何とかなるんか」

「するのよ。……記憶は後で消してあげるから、夢だと想っていて、化け物通しの単なる戦いだから。動かないでね」

言葉に突き刺され白石は動けなくなる。

トランクを軽くルシエラは叩く。左手にナイフに着いている指輪をはめてから、右手に持ったナイフをルシエラは左手を

縦に広げて、骨を抉るように一気に突き刺した。

ミレーデイが大量のレーザーをルシエラと白石に向かって飛ばしてきたが、その全てが壁にはばまれた。

「塞いだのか」

「切り札を切るのは好きじゃないけど、そうも言っていられないのよね」

白石の前に刃が突き刺さっていた。刃渡は一メートル以上はある刃の幅が広い片手剣だ。

ルシエラはそれ以上に無骨な刃を握っている。刃渡は一メートル五十センチを優に超え、幅が広い。右手で軽く刃を持ち、左手には日傘を持っていた。

ミレーデイだったものは変質していた。人間の形をすっかり無くして、闇と影を纏った白い仮面をつけた二足歩行の獣として現れている。重そうな剣を片手で持ちながらルシエラはミレーデイの方に走る。

「カオナシっぽいと思ったたら何かどっかの漫画で見た感じの……」

漫画のタイトルルまでは忘れたが威圧感があるというのに呟いてしまつ。白石にレーザーやビルの破片が飛んでくるが、刺さっている剣から衝撃波が出て次々と撃ち落としていく。闇が広がり、黒こげの死体を呑み込んだ。

死体は影に変換されるとルシエラに銃を向けて発砲する。

見ずにルシエラは剣を一振りすると、影達は赤い液体をぶちまけて倒れた。

「……七番目の血」

「お前を殺したらお前の血も取り込んでやる」

「させないわ」

ルシエラが横に剣を振るうが、その攻撃をミレーディは反射した。ルシエラの身体に当たる。

ミレーディにもダメージは当たっているが、ルシエラのダメージの方が大きい。口から血を吐きながらも彼女は日傘を突き刺す。日傘から炎が出てミレーディを焼いていた。

「その程度、私にとっては」

「良く言う……力を使いこなせてないのに」

何度か咳をしているルシエラだが、口から血が零れている。瀕死の傷を受けて治っているとは言え、新たに傷を受けていた。

それも、内側から。



ルシエラは剣を向けると衝撃波をミレーデイに放つ。燃え続けているミレーデイは少し痛がっただけだ。

「力など血が与えてくれる」

「 狂気もね……私はそんな血、欲しくはなかったわ」

(欲しく、無かった……?)

白石はルシエラの寂しそうな、悔いても仕方がないが、それでも悔いている声を聞いた。

彼女は右手だけで握っていた剣に左手を添えるとミレーデイを再び斬りつける。頭上から瓦礫の破片が幾つも降り注いだ。力を使おうとしていたミレーデイだったが、異変を察する。

「力が……」

「アレがこの装備を知ったのは戦ったときだから、知らないだろうけど」

頭上に破片を喰らいながら影に身体を貫かれながらもルシエラは動いていた。と言うよりも動いていた。

巨大な刃を、ミレーデイの仮面に突き刺す。

「この剣、対イスカリオテの獣用なのよ」

突き刺して剣を抜くと大きくルシエラは剣を振るい、ミレーデイを吹き飛ばす。その瞬間、全てが燃えた。

刀の傷から発火した炎は日傘を包み込み、跡形もなく焼き尽くす。炎と共にまたルシエラはミレーデイを斬った。

悲鳴が上がる。

白石の目の前で黒い化け物は切り裂かれて、燃えて、跡形もなく消えた。死体も無くなっている。

ルシエラは肩で息をしながら地面に刃を突き刺すと荒い息をしていた。

「ルシエラちゃん!!」

白石はルシエラに駆け寄る。白い服は穴だらけで、赤く染まっている。ルシエラは何度か血を吐いていた。触れると身体が冷たい。

「薬の反動が来ただけ……早めにここを去らないと……」

手をルシエラが軽く縦に振ると突き刺さった剣が二つとも消えて、左手からナイフが出てきて地面に落ちる。

落ちたナイフをそのままにルシエラは右手を左手に当てていた。

「傷が……ホンマにルシエラちゃんって何者……?」

左手には深い傷があったのにルシエラが右手を当てていると、塞がった。解答を考えていたルシエラは息を大きく吐いて白石に答えた。

「簡潔に言うと殺し屋……ね」

ルシエラが後でやったことと言えば、着替えだった。着ている白いゴシッククロリータは穴が開いたりしたので、

買ってきたロングスカートと白い長袖ブラウスに替えた。身体がふらついていたが、白石が支えてくれたりしていた。

休みながら忍足医院に帰っていた。駅に戻り、電車に乗って、人気がない公園まで来た。

ベンチに座らされる。トランクは足下に置いてあった。

「病み上がりのせいか、こんなに苦しそうなもの」

「……薬のせいよ……」

戦いの前に飲んだ薬は全身の神経系と肉体を極限まで増強する薬だが、反動が強烈すぎた。

一般人が飲めばそれだけで死ぬか廃人だがルシエラは脳内物質を操作して痛覚を制御出来るので反動を抑えられた。

それでも、酷い。今までも何度か使ってきたがここまでではなかった。

落ち着いてきたルシエラだが白石に支えられているし、トランクだって白石が持っていた。

「ルシエラちゃんも殺し屋であの女の人も殺し屋やったん？」

「あれは、ファルソファミリーのボス、マフィアよ」

「マフィア……？ マフィアって、ゴッドファーザーとかジョジョの奇妙な冒険の第五部とかの……」

「……ジョジョ……？ 貴方、落ち着いているわね……普通、あんなことがあつたら混乱しそうなのに」

ゴッドファーザーは映画でルシエラも観たことがあるがジョジョ

の奇妙な冒険はタイトルしか知らない。日本の漫画のはずだ。  
白石が平然としている感じだったのでルシエラが言つと白石は顔を引きつらせた。

「混乱はしとるけどしすぎて逆に平然とした感じやな……マフィア？ ルシエラちゃん、イタリアから来た言うけど、マフィアやからか」

「マフィアって広義的な言い方だし、私は所属してる訳じゃ無いけど……ファルソファミリーのメンバーを殺すために来たの」

出来事が起こりすぎたら、通り越して落ち着いてしまっているらしい。自分をマフィア扱いされるのはルシエラは嫌いだ。

所属としてはフリーである。広義的な言い方としたのは細かく言えばマフィアにも様々な種類があるのだ。

「俺が思うマフィアって黒服で銃とか使とってあんな能力で戦うもんや…… ジョジョやん」

「だからジョジョって知らないのよ。……マフィア界はああいうのも居るわ」

マフィア界というのはマフィアが関わっている世界を差す。元はマフィアは自警団だ。

自分達の身を守るために彼等は様々なことに手を出したし、ファミリーの中には能力者の一族だった。

雑多すぎるのだ。マフィア界……ひいては裏社会は。

「知らなかった」

「ニューズじゃ黒服しか出ないものね……ファルソは貴方が想像してるマフィアの典型的な連中で、復讐を依頼されたの」

薬や銃の密売など、今のイメージのマフィアであったファルソファミリーに家族や恋人を殺された者達がルシエラに復讐を依頼してきた。

「依頼を受けて日本に来て、仕事したってことか」

「……殺し屋とはさつき言ったけど復讐屋も兼ねてるわね。ターゲットは全部始末したんだけどアイツ等、ホテル爆破しちゃったし、私も損害が大きかったし」

「ホテルの爆破……ニューズで言うところのアレ……？ テロリストの仕業とか言うところ」

「それよ。新聞で確認したけど、報道からして玖月が手を打ったのね。狂気の血に関しては手が速いわ」

ファルソファミリーや日本のヤクザが会合をすると言うのでそこでファルソファミリーのメンバーを始末することにした

ルシエラはターゲット全員を殺したが、向こうがホテルを爆発させてきたり……省いたが爆発はルシエラが作った液体火薬もあるのだが……ファルソファミリーが雇っていた殺し屋、レグナムのせいでルシエラも被害が大きかった。

「……狂気の血って、あの化けもんも言うところだけ……」

「狂気の血、クルーエル・ブラッドとかクルーデレ・サングエとか言うけど意味は同じ。私も引いている血……人を燃やしたの

見たでしょう。私、自分の身体で薬品が作られるのよ」

「薬品？ 毒とか……」

「それも出来るわ。引いて覚醒したら能力者になると想って……でも、血に呑み込まれたら怪物になってしまふの。アレがそう」

ルシエラの体内には薬物の精製プラントが存在している。操作することで毒や薬を作り出せる。

「俺がルシエラちゃんを見失ったのも……薬のせいだったりするんか」

「記憶消去の薬をかがせたんだけど、貴方、気付いたのよね……力が落ちているわ……今日、お金を降ろすついでに残党を処理するために出かけたのよ」

相手が謙也であっても白石であってもやることは同じだった。フアルソファミリーの残党を始末するために、

街中で目立った。連中はルシエラを探し続けていて、頃合いを見計らい、白石から離れて処理をしに行ったのだが、

殺したはずのミレーデイの身体をドン・ファルソが乗っ取っていてその身体にイスカリオテの獣の力が宿っていたのは

予想外だったが、剣で殺しておいたので処理は終わっている。

死体は残っていないし、あの場所で殺し合いがあったことなど、察せ無いだろう。

入院中も気が抜けなかった。忍足家の面々を軽く薬品を精製しては誤魔化し続けていたのだ。

「そんな怖いことになっとなんか。俺、殺されたかも知れへんっ

てことが」

「殺されないために守っていたでしょう……貴方には恩があるから」  
「恩って……」

「助けてくれて、忍足医院まで運んでくれたわ。あれが警察だったら……どうしていたか……」

仮に警察に通報されていたりしたら処理が大変だった。忍足医院に運ばれたからこそ手間も減ったのだ。

ルシエラはベンチから立ち上がる。飲んだ薬もプラントで分解した。身体の虚脱も取れてきている。

忍足医院の道も解っている。

「ルシエラちゃん、殺し屋、何でしとるん？」

「……それしかやることを知らなかったから……かしら……物心ついたときから殺しの訓練で血を移植されて覚醒されて、化け物にはなりたくなかったから必死だったけど、結局は化け物だし」

物心ついたときから教えられ、憶えたことは殺しに関すること、狂気の血の制御方法だ。言語を話せることも、殺しに必要なならば叩き込まれた。

組織が壊滅しても、行くアテなどはなく、その日限りをどうにか生きて、殺し屋兼復讐屋を始めた。

ルールをつけたのは化け物にはなりたくはなかったからだ。狂気の血に覚醒した者は血に呑み込まれれば化け物となる。

「仕事はもう終わったんやな」

「……ほぼ終わりね。最後の処理とかして……帰るだけよ……帰ったらしばらく身は隠すけど」

帰ったところでどうしたらいいのか解らないが……この依頼でルシエラが無くした物は非常に大きい。

取り返さなければならぬが、それまでは隠れていなければならぬ。

ルシエラは白石の記憶を消そうとして　それよりも先に彼の声を聞いた。

「なら、俺と契約せえへんか」

マフィアというのは黒服も居るが能力者も居て、ルシエラが殺し屋でターゲットを殺しに日本に来たと言うことを

白石は知った。ルシエラは隠さずに話してくれていたが、記憶を後で処理してしまうから話しても良いということだろうと考えた。例えるなら推理物で犯人が自爆のための準備をしていてそれがあるから探偵に動機から何かまで話すのと似ていた。

ルシエラは自分を化け物と言っていた。人を簡単に殺してしまったり、薬品が作り出せたりするのも白石からすれば十分化け物だ。

「契約……？　復讐したい相手とか殺したい相手とか居るの？」

「居らんけど、契約しよう」

ルシエラをイタリアへは帰したくはなかった。このままルシエラ



を帰してしまえば二度と会えないだろうし、機会は今しかなかった。記憶を消される前に言う。一瞬で記憶が消えるならばその一瞬を遠ざけるしかない。

「……そう言うの、始めて言われたわね……依頼料は？」

「ルシエラちゃん、身を隠さなあかん言うつつたやる。隠すの手伝うわ。イタリアよりも日本の方が見つからんやろっし」

イタリアで殺し屋として活動してきたであろうルシエラは日本では無名に近い。

「面白いことを言うのね。白石さん」

気楽そうにルシエラが口元に手を当てて微笑した。柔らかい微笑だ。

「俺はルシエラちゃんが日本で隠れとる間に手助けするし、やれることはする。代わりにそっちは日本に居ってよ」

「……日本、ね……確かにそちらの方がいいかもしれないわ……自分のことで手一杯になりそうだし」

柔らかい微笑が消えて冷徹に計算をしているルシエラが居る。表情が良く変わっていた。

白石とルシエラが話していると着信音が鳴る。飾り気のない音を聞いたルシエラはトランクを開けて、携帯電話を出した。

「明日には着く、か……デュー……遅いわ」

「デュー？」

「知り合いね……細々としたことを頼まない……白石さん、その提案、乗っても良いわ」

携帯電話をトランクに押し込むとルシエラは白石に言う。

「……っことは」

「貴方が契約者で良いわ。この辺りに隠れることにする。後のことは今からやっていくけど、イタリアよりも隠れやすいだろうから」

「そうか」

ルシエラが簡単に白石と契約をすると言っていたので白石は拍子抜けしたが、ルシエラは速く考えて結論を出していた。

それにルシエラならば白石を会話の間に何回も殺せた。

「大体のことは従ってあげる。私も四の五の言ってる場合じゃ無いし」

「それなら、殺しはせんとか……そう言うのでもええんか？」

「殺人中毒みたいに言わないでよ。敵を実験材料にしたことはあるけど……」

（それが怖いんやて）

敵と認識すればルシエラは殺すし慈悲など無い。殺し屋だからだろつと白石は想う。ルシエラはトランクをまた開けると、

金色の懐中時計を出した。白石の手に乗せる。白石が蓋を開けると時計は止まっていた。

ガラスにヒビが入っていて、針が停止している。

「貸しておくわ。契約がきれるまで」

「壊れとるんやけど」

「オーバーホールや修理に出すと数百万するのよ。スイス製の手作り時計」

数百万と軽く言うルシエラに白石は引いた。時計を眺めていると着信音がする。自分の携帯電話の着信音だ。

謙也からの電話である。

「もしも……」

『白石か。ルシエラも居るやろ。買い物から帰って来んのやけど何処に居るんや』

「近くよ。ごめんなさい。大阪が珍しくて、白石さんに案内をして貰っていたの」

(さらっと嘘……本当混じりの嘘、言つとるな)

心配する謙也の声だ。ルシエラは朗らかに言っている。白石が街中を案内していたのは本当ではあるが、後半は違っている。

『近くなら迎えに行くで』

「気遣いをありがとう。でも、送って貰うから……すぐに行くわね」  
「すぐに送ってくわ。すまん。謙也。きるな」

白石は携帯電話をきった。ルシエラは髪の毛を掻き上げる。

「謙也の速度ならすぐに来そうだし、三番目の血でも引いてるかと思っぐらいに速いんだもの」

「三番目の血とか……」

「おいおい、話していくわ。時間は沢山あるんだし、これからよろしくね。蔵ノ介」

ルシエラが言う裏社会で使う言葉も半分以上が意味不明である。説明してくれるとは言いが……白石はルシエラが自分を名前で呼んだことに気がついた。

「名前？」

「契約者だもの」

「……お前も解らん。友香里と同じ小学生ぐらいかと想ったのに大人びとるし」

悪戯っぽく微笑するルシエラに白石は呟く。途端にルシエラは表情を変え、白石に近付くと手を伸ばして肩を掴んでいた。

ちなみに友香里とは白石の妹であり、今年の春に中学生になる。

「私、十七歳なんだけど」

「こんな小さいのに!?!」

十七歳にはとうてい見えなかった。ルシエラは右手の指先の力を白石の肩に込めていく。

身長が足りないのか背伸びをしていた。

「ホテルでの戦いで血の力を殆ど全部、奪われて 私も解らないんだけど、百六十センチぐらいあったのに縮んだのよ。若返ったのよ」

「十七……って俺と三歳ぐらいしか違わんな」

「お陰でパスポートも見せられなかったからひたすら誤魔化していたのよ!」

パスポートの写真は十七歳のルシエラであるが居るのは小さくなったルシエラである。それならば見せられない。

白石の誘いに載ったのも、力が落ちすぎているからだ。

気にしていることに触れられて、ルシエラは機嫌が悪い。

壊れている懐中時計をポケットに入れて、白石は怒っているルシエラをなだめることにした。

【F i n】

一話に続く

## 壊れた時計 後編（後書き）

纏めて後書き

思い付きで書いてみた小説というか、うちのリボン世界ともクロ  
スはしてます。

狂気の血とかルシエラの武器の元ねたは分かる人には分かると言っ  
か、

十番目の血とか言ってますが発音とかはテンス・ブラッドとか

英語発音はしてるんですけどルビは面倒なので打ってない

感じで。ボンゴレとかは言ってますが彼等が出てくるかは未定です。

では、また次回で

柔らかい殻 前編（前書き）

次の日の話で新オリキャラも出たり  
説明ばかりだったりする話

## 柔らかい殻 前編

【柔らかい殻】

ルシエラ・ガートルード・ジンガレットィを何とかなだめてから白石蔵ノ介は二人で忍足医院に向かう。

道は暗い。春先で冬よりは日は高くなっているのだが、今の時間帯だと真っ暗だ。

「聞いたかったんやけど、アドラストィアって名前か？」

「私の異名。復讐屋とかしていたらそう呼ばれるようになったの」

話題を探した白石は浮かんだ疑問をルシエラに聞く。再開発地区での戦いで、敵からルシエラはアドラストィアと呼ばれていた。ルシエラは答えてくれる。

「異名か……俺は『四天宝寺の聖書』とか呼ばれとるな」

「……キリスト教なの？」

「そうやない。基本的に忠実なテニスをしとるから、そう呼ばれるようになったんや」

「私のアドラストィアってのは、ギリシャ神話の女神の名前なのよ……復讐の女神、ネメシスと同一視されてる」

「どす黒い異名やな……名前や無かったんか」



アドラスティアは別名をアドラスティアとされる逃れられない運命の女神のことだ。

それにネメシスぐらいなら白石も聞いたことがある。ネメシスはギリシャ神話の因果応報の女神の名であり、名の意味は憤怒である。

「ルシエラが本名、ガートルード・ジンガレットィはそれなりの身分の名字」

「本当の名字があるってことか」

周囲に人の気配は無い。ルシエラは確かめながら歩いている。会話が出来ない状態だからこそ、話しているのだ。

白石が言うとルシエラは微笑した。

「フラガラツハ。ルシエラ・フラガラツハが私の捨てられない名前」

「……フラガラツハ……」

フラガラツハというのも何処かで聞いたことがある言葉であるが白石はすぐには浮かばない。毒草の名前とかならばすぐに思い浮かぶのだが。

「そろそろ忍足医院ね。明日には知り合いが来るから手続き手伝わせないと……蔵ノ介」

「何かあるんか」

ルシエラは自分で持っていたトランクを白石の前に出した。

「持っていて欲しいものがあるの」

高い懐中時計を預かった白石だがルシエラから託されたものは、白色のゴシッククロリータ服であった。

買い物をしていたときに着ていたものである。戦闘で胴体のところ穴が開いていた。これが発見されると言い訳が大変らしいので白石に押しつけられたのだが、見つからないように部活で着替えを入れている鞆の中に押し込んだ。

高そうな服だったし、ごてごてとしているし、これを着て戦闘が出来るだけ、凄い。

どの辺りが力が落ちているのか白石は聞きたくなかった。

(予定としては知り合いが手続きを手伝わせる言いつつだったが)

次の日になり白石は部活のために四天宝寺中を訪れた。部活はほぼ毎週ある。学校があるときは違い、午前九時から開始だが、三十分ほど前にはすでに白石は部室に着いていた。

「おはよーさん、白石」

「速いな。謙也」

「小石川は外に居るし、他はまだ来とらんな」

忍足謙也が部室にいた。白石は話ながら鞆を降ろす。中にはルシエラの白色のゴシッククロリータ服が入っていた。

平静を装いながら白石は着替えに入る。ユニフォームはロッカーの中に入れていた。

「ルシエラの買い物につきおつてくれておおきな。アイツ、楽しんでっただっばいわ」

「それならよかったわ」

「帰ったらすぐに寝てもうて、朝に様子を見に行ったらまだ熟睡しとっただけ」

(疲れたんかな……)

昨日の戦闘を回想してみるがアニメやゲームに出てくる戦いである。剣で怪物をルシエラは切り裂いていた。

それがマフィアの戦いというのも驚きである。

謙也も着替えだしていたが彼は速さにこだわっているので、白石以上に着替えが速い。

白石も準備を終える。

「アイツは明日ぐらいには退院やて。念のためにもうちよい今日は休んで貰うらしいわ」

明日ぐらいと謙也が言っている。ルシエラは大阪に隠れ住むと言うがどう隠れるのか白石は見当が付かない。

準備は手早くしそうだというのが白石のイメージとしてはあった。部活が始まり、白石は練習をしつつ後輩や同級生にも指示を出す。部活自体は平穩に終わった。

平穩のありがたみを感じる。  
そんな時だった。

「シライシ、クラノスケ？」

部室から出て、帰ろうとしていたときだ。白石は最後に部室から出た。これから部室の鍵をしめて、忍足医院にでも寄ってルシエラの様子を見に行こうとしたときである。

やや角張った、わざと角張ったように発音された名で呼び止められた。

いつの間にか白石の前には彼より少しだけ背の低い少年のような青年が立っていた。

グレージュの髪に同じ色の瞳をしている。

「アンタ、誰や」

「始めまして。アンが、君の名前を出していたから」

「……アン？ 赤毛の女の子の知り合いは居らんな」

「モンゴメリーだっけ。アレは名前しか知らない。ルシエラ・フラガラッハ。

もしくはルシエラ・ガートルード・ジンガレットィの知り合いって言えば、分かる？」

気配の薄い青年は穏やかに彼女の名前を告げる。白石は息を吸い、どうにか自分を落ち着けていた。

「分かるで……マフィアの人か」

「そう言うことにはしておこうかな。危害は加えるつもりはないから」

手ぶらで青年は白石に対応する。場所を変えようか、とも言われた。

謙也の家である忍足家は代々医者の家系である。幕末に生きていた先祖は大阪で、つまりはこの地で、蘭医をしていた。父方の祖父は開業医であり、今は隠居生活をしながらも別の場所でもまだ開業医をしている。

忍足医院は謙也の父親である宗也が継いでいた。自分か弟の翔太が次は継ぐのだろうなと謙也はたまに考える。

荷物を家の方に置くと徒歩一分も無いところに建っている忍足医院の方に行き、二階の階段を上る。

医院ではあるが入院患者は滅多にこないし居ない。設備の整った病院は他にもあるからだ。

そんな忍足医院ではあるが最近では入院患者が居た。

「調子はどうや。ルシエラ」

「本調子になってきたわ」

病室にはルシエラが上半身だけを起こして読書をしていた。

「……お前、ジヨジヨ読んどるんか」

「翔太が同級生から借りてきてたし、興味があったから」

手に握られていたのは単行本だ。『ジヨジヨの奇妙な冒険』、荒木飛呂彦が書いたジャンプの漫画でも非常に有名な作品の一つである。第七巻を読んでいた。一巻から六巻までは丸椅子の上に積んである。

ジヨジヨの上に座るわけにもいかないので謙也は立ったままでル

シエラと話すことにした。

「結構長いで」

「……みたいね……『神曲』並かしら」

「お前、退院したらイタリア帰るんやろう。それまでには読み切れるんか？」

『ジョジョの奇妙な冒険』は非常に長い。第八部辺りまであるはずだ。ルシエラが読んでいるのは第二部であり、段々と編も長くなっていく。謙也の方を見ずにルシエラは答えた。

「帰らないわよ。日本に住むから」

「それなら読めるか……って、日本に住む!？」

「イタリアにいるよりも、日本の方が面白そうと言っか……どこに住んでも同じみたいなものだし」

話ながらページを捲っている。謙也はまず、ルシエラから『ジョジョの奇妙な冒険』の第七巻を取り上げた。

ルシエラは謙也の方を見る。

「お前な、両親……居らんかったな」

「養父や養母は死んでいるわね。イタリアに帰っても使用人とか土地とか財産があるだけ……七巻、良いところなのよ」

ルシエラの生まれについて聞くと幼少期に実の両親を亡くし、ジ

ンガレットイ家に引き取られたものの、養母や養父も死んだそうだ。遺産の管理などは弁護士や部下がしているらしい。

「身体弱い癖に一人で住むとかあかんやろ。日本に旅行に来て体調崩したから入院するハメになったんやで」

「以外と何とかなるものなんだけど」

「ならんって！」

「……兄ちゃん達、何やってるの……病室だよ。ここ」

呆れ顔で入ってきたのは翔太だ。手には何冊かの本を抱えている。ルシエラに貸すのだろう。

小説の他にも、雑学本や絵本などがあつた。

謙也は冷静さを少しだけ取り戻すと翔太にルシエラとの会話を話すことにした。

春休みの校舎というのは生徒はほぼ居ない。学校もないようなもののに学校に残っている生徒は珍しい。

白石は校舎内を適当に歩いていて青年に着いていく。逃げたところで捕まえるか下手をすると殺されそうなので大人しくしているしか無かつた。

「……屋上？」

「手頃かなって」

階段を上り、二号館の屋上に白石と青年は来た。

「ルシエラの仲間、やよな」

「同胞だね。君は白石蔵ノ介、であつてるよね」

「合つとるよ」

「白石蔵ノ介、大阪四天王寺中二年、テニス部部长、誕生日は四月十四日で血液型はB型、家族は父母と姉妹と猫、だね。

『四天王寺の聖書』の異名を持つテニスプレイヤーで全国区の実力持ち」

青年のペースを白石は掴めない。

白石のプロフィールを青年は言う。調べたのだろうかと考えてマフィアなら可能だろうと想う。

「調べたんか」

「簡単には調べたよ。アンに朝方、連絡を取ったら、”私は蔵ノ介と契約して日本に住むことにしたから細かいこと手伝つて”

なんて言われたから困つたよ。蔵ノ介つて誰つて聞いたら白石蔵ノ介よとか言われてもさ」

名前だけ分かればプロフィールぐらいは調べようとすれば調べられる情報化社会というか、裏社会だからと言つべきか、しかしルシエラは大分酷い対応だ。表情が薄い青年は困っているようだった。

白石については知っておかねばならないと調査したらしい。



「朝方か。昨日は何か戦闘しとったから、そのせいで疲れとったんやろっし」

「……戦闘？　どんなことになったの？　アイツの連絡は用件しか言わないから」

おれも、人のことは言えないけれどと青年は言う。

白石はまずルシエラと出会ったところから話して、昨日のことも話した。デイオはたまに反応を返してきて、詳しく聞いたりしている。

「そんな感じやったんやけど……」

「弱ってるな。小さくもなってたし、顔見に行ったら爆睡してたから」

「見に行つた？」

「オシタリ医院に寄つたんだ。こっそりパスポート作り替える必要があつたから、作り替えておいたけど……アン、弱りすぎてるよ」

白石からしてみればルシエラは十二分に強かったのだが青年からしてみればルシエラは弱体化してしまつたらしい。

眠っていたので起こさなかつたようだ。事情も聞けなかつたので、白石に聞いたのだろう。

「アレで弱つとる言われてもな」

「相手が殴る前に勝つてたり、殴りに入っても、恐怖の笑顔を浮か

べつつ圧勝したりしてる奴だから、 サディストだし」

「……サディストなんか」

昨日の戦いも相手が自分は有利になったと有頂天になっていたのをたたき落としていた気がする。

納得していた白石を青年は見る。

「君はアンと契約したんだよね？ 君には殺したい相手とか居ないんだろう」

「居らんな。ルシエラちゃんは選べる状態じゃないみたいなこと言うとっただけ」

白石には殺したいぐらいに憎い相手は居ない。人間関係は良好だ。青年が疑問に想うのも仕方のないことだ。

復讐屋兼殺し屋であるというのにルシエラと契約したのだから。

「アイツのことは置いておくとして、君が契約したいと想った理由って？」

青年は白石の言葉を聞こうとしているようだ。ルシエラが弱っているとかそう言うことを抜きにしてどうしてそんな取引や契約内容を持ちかけたのか、気になっているのだ。白石は考えを整理する。

どうして、自分はそんなことをルシエラに言ったのか。

「ルシエラちゃん、昨日の戦いを単なる化け物通しの戦いとか言うたんや。あの怪物もルシエラちゃんも狂気の血を引いとるんやろう。でも、戦ったときに、こんな力欲しくなかった、みたいに呟い

とつた……人間やん。ルシエラちゃん」

戦いは不可思議すぎたしルシエラの傷も速く治っていたり、相手を燃やしたり薬品を精製したりもしていた。

だが、ルシエラは人間だ。人間の形をした化け物とか本人は思っているかも知れないがそれでも、ルシエラは人間であると白石は想う。

「あの子が自分のことを化けもん言うんやったら怒りたいとか……契約についての答えになつたらんのやけど」

化け物ではなく人間だと白石は言いたい。少なくとも、ルシエラ・ガートルード・ジンガレットィは、何処にでも居る人間なのだから力などは関係なく、人間だ。

「何を言つて良いのか分からなくなつたよ」

「そつやるつな……」

自分でも答えになっていない言葉だと白石は想う。青年は白石に向かつて言う。

「……とりあえず、名乗っておこつ。おれはディオニージ・ドウリンダナ。デューで良い」

「デュー……?」

デューという愛称は聞いたことがある。ルシエラが来るのが遅いとか言っていた者だ。ディオニージ・ドウリンダナをどうすればデューになるかは白石には不明だった。

「蔵、君に教えておこう。狂気の血について……面白い解答が聞けた礼だよ」

ディオは無表情さを消して、笑っていた。

「狂気の血について……」

狂気の血について白石は何も知らない。礼とディオは言っているが雇うなら知っておいてもらいたいことなのだろう。

白石が言くと携帯電話の音が鳴る。ディオの携帯らしい。取り出すと彼は話し始めた。

「噂をすれば……予定変わった？ 何やってるんだよ。君にしては……間抜……怒らないで。落ち着いたら連絡してよ。アン」

「アンってルシエラちゃん……ところで、何でアン？」

用件よりも先に愛称の方が気になっていた。ディオは携帯電話をポケットの中に入れていた。

「アイツの本名はルシエラ・フラガラツハでフラガラツハの別名はアンサラーだからアン」

フラガラツハはケルト神話に出てくる剣の名だ。解答する者を意味する。

抜こうと想えば鞘から勝手に抜け、敵に投げれば勝手に敵を殺して戻ってくる。フラガラツハによって付いた傷は決して治らないとも言われている。

「予定が変わったとか」

「忍足家にホームステイすることになったとか言ってた」

「ホームステイ!？」

きっとフラガラツハから愛称を取ろうとすると上手くいかなかったのでアンサラーから取ったのだろうと白石は心中で納得しておく。ルシエラから聞いた事情をディオが話したが、日本に住むと言ったルシエラに謙也が何とかならないとか話していたら翔太が来て、そこに万里子、忍足兄弟の母、万里子が来たのだ。謙也が事情を話すと万里子の方が忍足家にホームステイをすればいいと言ってきたらしい。ルシエラは断り切れなかったそうだ。

昼間ではあるが忍足家で家族会議が開かれてルシエラも参加することになったらしい。

「薬によっちゃ相手を操れるんだけど、それも出来なくなったのかな……」

「万能やな。薬……俺が預かったゴスロリ衣装とかどう処分すればええんや」

「衣装？」

ディオになれば見せても平気だろうと白石は着替えを入れている鞆から白色のゴシッククローター服を出す。

穴が開いていた。白色なので服の汚れも目立つ。

「これなんやけど」

「地面において」

白石は全部出すとディオの指示に従い、屋上のコンクリートの面に置いた。ディオは右手を軽く振る。

胴体の穴部分にディオは右手で触れると一瞬だけ白いゴシックロリータの衣装が揺れる。

手を放すと穴が完全に塞がっていたし、汚れも取れていた。

「直った……」

「これも狂気の血の能力の一種で、物質精製……変換とも言つ。変換する方が楽だけど」

物質精製、もしくは変換と二つ並べたのはどちらもディオは出来るからだ。服からディオは衣装を驚掴みにした。

白色のゴシックロリータは淡く輝き、銀色のカードになる。大きさはクレジットカードぐらいだ。

この変換は質量が完全に無視されていた。

何も無い状態でも必要な物質は作り出せるのだが、物によって負担が大きくなる。

ディオは銀色のカードを掴むと元通りの白いゴシックロリータに戻す。ドレスは白石に渡された。

「手品みたいや」

「種も仕掛けもないよ。おれの能力はもう一つあって」

ディオは左手を上に向けた。向けた左手から迸ったのは電気である。

「電気人間……」

「体内に発電細胞が出来て生体電流を増幅したり出来るようになってるんだ。狂気の血と言うのはね。十三種類の能力を、血に覚醒した者に与える。とは言っても人によって一種類から三種類の間だけだ」

能力を区分して十三種類、血に覚醒した者はそのうちの一種類、もしくは二種類か三種類を使えるようになるらしい。

ディオはデンキウナギみたいなものと白石は納得しておく。口には出さないが。

しかしディオは察したのか、淡く笑っていた。理解が速い、と言っている感じがした。

「十三番目とかでも……あの怪物色々使ったで」

「アレは例外。まずは狂気の血について言うけど、元は人外の血とかわれてる」

狂気の血は元々は怪物が引いている血とされていた。

それは世界中に散らばっていて、人外と交わった人間や、その子孫が血の力を使えるようになっていたらしい。

らしいというのは狂気の血はまだまだ研究中で暫定的に色々と言を通しているだけだからだ。

十三種類の能力も、調べた者が確定しただけである。

血を引いたからと言って必ずしも覚醒するわけではなく、例えば一族が狂気の血を引いても覚醒せずに

一生を終える者だって居る。また、狂気の血を先祖が引いているとは知らず、先祖返りで覚醒する者も居る。

「人外か……」

「一族が引く他にも、狂気の血を引いた人間の血を輸血したりすることで覚醒することもある。おれやアンはそっちのタイプ。覚醒させられたの方が正確かな」

「覚醒させられたって……」

ディオが頷いた。話を続ける。

狂気の血を引いたり植え付けられた者が覚醒するときには心が身体に強いショックを受けたときに覚醒するという条件があると言う。

しかし、覚醒するときのショックで八割か九割が化け物と化す。化け物になった時は身体が大幅に変わることもあるが、変わらないこともある。しかし精神は人間のものではなく、自分が抱く衝動に突き動かされる化け物なのだ。

裏社会にしる、一般社会にしる、そうなってしまった狂気の血を引いた者は害悪であり、殺すしか無くなってしまふ。

「血に覚醒して化け物にならなかったとは言え、安心は出来ない。感情の高ぶりとかで血が騒いで、落ち着けないと衝動が出たり、血に支配されかけたり……能力を使うと血も覚醒していく」

「ほいほい使てえんか？」

「便利だからね……狂気の血を引いた人間は一生が血との戦いで上手く付き合っていこうみたいな……戦闘するときにも、戦闘力になるから」



ルシエラが液体火薬で相手を燃やしたりしていたのもそういうのだろう。使い方によっては強力な武器にもなるが、使いすぎれば怪物になってしまう。微妙なバランスで能力を使っているのだ。

「マフィアってそういう連中も居るんやな」

「言っておくけど、マフィアは元々は自警団だよ。自分達を守るために血の力を使ったりするしかなかった」

「自警団……」

「その辺の説明はアンに聞いて。それと、血はある程度覚醒するまでは瀕死になった状態に陥ると治してくれるけど、これも血に支配されていく」

狂気の血に覚醒した者達は血の支配とは切っても切り離せない関係になってしまつらしい。

宿主が死にそうになったら狂気の血は宿主を治そうとするが、どれだけ治るかは運次第であるし、血に苛まれていく。

「そんなそぶり、見せんかったな」

「理性で抑えられるぐらいには制御を叩き込まれてるけど、上がったとくとハイテンションになるかな」

昨日の戦いでルシエラはハイテンションというわけではなく、必死であった。ハイテンションで居られるぐらいの余裕はなかったのだろう。

「ディオ君も？」

「ノリは良くなるかな」

白石はディオをディオと呼ぶことにした。君付けをしたのはルシエラと同じ年ぐらいであろうという判断だ。

デューで良い、とは言われてもディオの方がじっくり来る。

「狂気の血の能力ってどんながあるんや、十三種類あるらしいけど」

「一番目の血とか二番目の血とか発見された順に定義されてる。アンの能力は九番目の血と十番目の血。おれはこの分類で言うところの六番目の血と十一番目の血を引いてる」

「薬品作られるとしか言うたらなかった気が……」

「省いたんだろうね。十番目の血って能力定義はされてるんだけど謎なんだよ。能力者が認識した領域内を自由に操作出来るとか、因子を埋め込んで、影響を及ぼせるとか言われても分からないだろう」

「分からんな……空間が微妙に歪んどったんも、その能力のせいかな……」

説明がややこしかったのでルシエラは省いたのだらうと言うのはディオの説明で分かった。

「領域使いは領域内ではかなり融通が利かせられるから」

自分の陣地内ではかなりの優位性を持つのが十番目の血の能力者である。

領域と認識して周囲に戦いを認識されないようにしようとしたのだから、能力が落ちているため上手くいかなかったようだ。

「ルシエラちゃんが戦ったの、イスカリオテの獣とか言うっただけど……十三番目の血とか」

「十三番目の血、これが狂気の血を宿すモノにとっては厄介すぎる能力持ちだね。他の狂気の血を食らうって取り込むんだ」

他の能力説明をすると時間もかかるし一気には憶えられないだろうし、憶えなくても良いと判断したらしいデイオは十三番目の血の説明を始めた。狂気の血と言うのは一般人に比べれば人数は少ないが、その狂気の血を引く者の中でも十三番目の血を引く者は滅多に居ないと言う。

血を移植して覚醒しようにも覚醒率は他の血に比べて非常に低い。

「そんなに少ないんか」

「裏社会は表よりも狂気の血が集まりやすいけどおれの知る限りで、一人しか居なかった……」

十三番目の血の能力は二つある。一つは影のようなものを操ること、ようなものが着いているのは影ではないが、

影のようなものという曖昧な存在を操作出来るのだ。影を刃のようにしたたりすることも可能だと言う。

もう一つは他の狂気の血を食らい、模倣する能力を持つ。狂気の血の天敵である狂気の血とも言えた。

イスカリオテの獣というのは十三番目の血を持っている化け物のことだ。化け物は言っても元の化け物が居て、それが人間に力を分け与えることにより、イスカリオテの獣は増える。イスカリオテの獣の力は強大であり、その力が完全に覚醒し、使いこなされていれば都市一つ消すことも可能であり、実際に消えた都市もある。

「ルシエラちゃんが縮んだんも血を喰われたせい……っばいんかな」

「詳しくはアンの血を調べないと分からないけど、血が喰らわれたとは言え……身体が縮むなんて聞いたことがない。

雇い主に言わせれば、”曖昧な定義付けをされている狂気の血の新しい事例”とかで喜びそうだけど」

曖昧などつけている辺り、狂気の血を宿していたりする者達ですら、自分達の力の源について完全には分かっていない。

謎に包まれている能力を血に覚醒しているから何となく使えるぐらいなのだろう。

例外的な事例が起きたら起きたで、その時に対処するしかないのだ。

【続く】

柔らかい殻 前編（後書き）

後書きは後半に纏めます

柔らかい殻 後編(前書き)

改めて色々放してみる話

## 柔らかな殻 後編

血の力が抜けてしまったことで自分も腑抜けになってしまったのかもしれないと、

ルシエラはベッドに寝転がりながら考えた。病室のベッドは布団が薄い。ルシエラは身体を横にさえ出来れば何処でも眠ることは出来た。

これはルシエラの同胞なら共通して持っているスキルだ。

「大阪人ってナポリ人みたいなのがあるわね……」

押し切られる形でルシエラは忍足家にホームステイをすることになった。しまったのだ。

日本に住むことまでは考えていたが、細かいことはまだ考えていなかったのが不味かったかも知れない。

言葉ではイタリア人と纏めることはあるがナポリやシチリアなど地方によって人間性も違ってくる。

大阪人とナポリ人の共通点としては押しが強いと言うことだ。

むしろ、イタリアではイタリア人と呼ばれることは嫌われたりもしている。

話し合いが終わってからルシエラはデイオには連絡を入れておいた。白石に連絡を入れなかったのは単純な話、連絡先を知らなかったのだ。謙也に聞けば教えて貰えるだろうが、謙也は忍足家の物置となつている空き部屋を開けていた。

明日でルシエラは病院を退院するが、行き先は忍足家の空き部屋だ。

病院から徒歩三十秒ほどである。

寝ていると枕の下に置いてある携帯電話が震えた。病院では携帯電話は禁止ではあるが入院しているのはルシエラだけなので遠慮無

く使っていた。ディオからの連絡でそつちが混み合っているのだから夜中に来るとだけ書いてあった。

日本に住むことにしたし、そうだったからディオも顔を出しづらいのかも知れない。

心配がしたのでルシエラは起き上がる。

「寝とつたんか」

「蔵ノ介」

「謙也から連絡受けたんやけど、それとディオ君と会ったわ」

「デューと？」

白石が言うにはディオは白石に話かけてきて、二人でしばらく話していたらしい。ルシエラが出ていたので、昨日のことなどをディオは白石に聞いたのだそうだ。

謙也がルシエラが自分の家にホームステイをすることになったと、白石の携帯に連絡を入れてきた。

ディオはルシエラに渡すものの準備があるからと白石と別れていた。

「ディオ君がデューになるんわ。どういう理屈や」

「アイツの名字のドウリンダナはデュランダルのイタリア語読みなの。そこからデュー。同じ組織にいたのよ」

居たとルシエラは過去形で言う。ディオがドウリンダナを名字に使っているのはルシエラがフラガラツハを名字にしているのと同じ理由だ。名字にする言葉がなかったというのが理由の一つであった。



デュランダルは不滅の刃の意味を持つ、フランスの叙事詩、ローランの歌に出てくる剣だ。

剣の柄には聖遺物が収まっている。不滅の刃の名の通り、岩に叩きつけようとも決して折れない。

「居た……過去形やな」

「……壊滅したのよ。私もアイツもそこに居たの。剣王って言う作品だったわ」

自慢するわけでもなく、忌々しいものを吐き出すかの如くルシエラは言う。

組織は『お菓子の家』と呼ばれていた。端的に言うと暗殺者養成機関であり、剣王というのは組織が最強をコンセプトに作り上げた作品であった。

「壊滅って警察とかが」

白石の言葉にルシエラは首を横に振る。

「テイル……剣王の最強が……何を思ったのか、完膚無きまでに壊したの」

彼はテイルフィングと言う剣の名が与えられていた。剣王最強であり、数々の殺しをしてきたのだが、

ある日、組織を壊滅させた。組織に従順であったはずなのに、組織に組織に関わった者、ファミリーを悉く潰して消して殺した。殺人に次ぐ殺人を行い、そのためにマフィア界が傾きかけたとも言われている。

ルシエラは『お菓子の家』の本部が滅ぼされたときには任務で外

に出ていた。

今でもテイルが組織を滅ぼした理由がルシエラには分からない。テイルは組織を不満に想っているわけでもなかったし、忠実だったのだ。

「どんな能力やったんや。そのヒト」

「奇数番だったから、無いわ。能力無しで武器とかだけ使って一人やったのよ」

テイルフィングは剣王では一番目であり、ルシエラは四番目、デイオは八番目だ。

偶数番は狂気の血を植え付けられて、奇数番は能力をそのまま純粹に鍛えあげている。裏社会には凄まじい人間が居るのだなと白石は想っているようだった。

「ジョジョ、読んどるんか」

ベッドに『ジョジョの奇妙な冒険』が置かれているのに気がついて白石が言う。八巻目になっていた。

「興味を持ったの。本は好きなのよ……蔵ノ介って四天宝寺中つてところに通っているんでしょ」

「通つとるな」

「四月から私も通うことになったわ……したと言っべきかしら」

忍足家との話し合いで、ルシエラは四天宝寺中学校に通うことになった。ルシエラは病弱で学校に通えなかったが、日本に来たし、

せつかくだから通ってみたいと言ったよつだ。  
学校に通うことはカモフラージュにもなるらしい。

「何年生で通うんや」

「……二年生ね。一年生とか……私は十七なのよ……デューと一緒になのよ」

「十七歳には見えんからな……ディオ君、十七やったんか」

ディオは用意したパスポートではルシエラは十三歳と言ったことになっていた。拳を作ってルシエラは掛け布団を叩いている。  
縮んだのが悔しいのだろう。

白石はルシエラが十七歳と言ったことは聴いていたがディオも同年齢だと言ったことを知り、そちらの方に気を取られた。

「……力は落ちるし縮むし最悪……」

「そのうち、ええことあるって」

「……そのうちっていつよ」

「近いうちとか、俺も補佐するから、気楽に行こうや」

ルシエラは一度だけ頷いた。

数時間後、白石は帰路に着いた。

明日にはルシエラは退院するため、退院は朝にしてからまずは四

天寶寺中に行ってみることもなった。

彼女が言うには身体はほぼ回復していて問題はないらしい。

午前中は学校で過ごしてみても……テニス部を見せたりすることに  
なりそうだが……午後にルシエラの部屋の家電や家具を揃えるため  
に白石で謙也とルシエラと出かけることにした。

「問題はこれからやな……」

学校に通ったことがないルシエラだし、病弱で話を回してしまっ  
ているため、その芝居を続けたいといけなくなったという。

狂気の血の調子が狂っただけであり、身体は健康体であるのだが、  
健康体とは言っても油断は出来ない。

それにルシエラの運動神経は一般の女子を軽く超えている。

まずは明日をどうするべきかと白石は考えていると、携帯電話が  
鳴った。出してみるとメールが入っている。

「……ディオ君……いつの間に俺の携帯アドレスを」

届いていたメールはディオからだだったが白石はディオに携帯電話  
のメールアドレスや番号を教えていない。

それでもメールが届いている。タイトルは蔵へ、となっていて、  
内容は”君のメールアドレスは調べた。ついでに番号も、何かあっ  
たら連絡して、おれも気がついたら連絡する”と書かれていた。メ  
ールアドレスが書いていないが届いたメールから返信すればいいし、  
電話番号は下の方に書かれていた。

もう一通またメールが届く。タイトルには追伸とあった。

「アンが十七歳って信じられないだろうから、元のアンの写真を送  
って……」

添付ファイルが着いていたので白石は携帯電話を操作してネットに繋げてみる。ディオが使っているサーバーにアップしたものであった。

元のルシエラの写真を見た白石は硬直した。

写真に写っていたのは鮮やかな金髪を腰辺りまで伸ばした十代後半の少女だった。

身長は百六十センチほどで、頭にはヘッドドレスを着けていて、首にはペンダントをつけている。

全体のバランスを上手く取っていた。

彼女が着ている白色のゴシッククロリータは白石が鞆の中に入れてばなしの……医院で話題にし忘れていた……ものと同じであり、サイズはぴったりだった。整った顔立ちをしていて、アンティークのソファアの上に座っている。

深窓の令嬢と言言葉がよくあっていた。表情はほんの少しだけ微笑んでいる。

「美少女や」

白石は携帯電話に本来のルシエラの画像を保存した。しっかりとフォルダに鍵をかけて隠しておく。

ディオの返事にメールは受け取ったと言うことや、写真の感想としてビフォーアフターやなど書いて送信しておいた。

【F i n】

第三話に続く

柔らかい殻 後編（後書き）

二話目後書きです。

新キャラのデイオは誰かに雇われてますがその雇い主はリボーンの方の

キャラで彼はそのまま雇い主呼んでます。

結構こき使われていたり、彼もテニスサイドに後に関わります。

ルシエラは忍足家に居候することになりました。

## オレンジ色の猫（前書き）

初めての彼女の学校と騒ぎと青春は載ってしまえば  
後は巻き込まれるだけだ？

## オレンジ色の猫

### 【オレンジ色の猫】

縮んでしまった右手を握ったり、開いたりしながらルシエラ・ガートロード・ジンガレットは息を吐いた。

調子は悪くはないが、縮んでしまった身体を見ていると、気分が重くなっていく。

今でも思い出せるが、縮んだときの身体の痛みはそれは酷いものだった。

身体の内側からベルトで締め上げられるような痛みが溢れ出てきたのだ。成長痛ではなく退化痛と言うべきだろうか。

重い気分を引きずりながら、入院着から大阪で購入した安物の服に着替える。赤色のロングスカートと白色のブラウスだ。

安いが作りがしっかりしている。

白色のゴシッククロリータにしたいところだが、持ってきた服は全てサイズが大きくなってしまっている。

(着たいのに着られないなんて)

妥協出来るところは妥協するしかない状況だ。

ルシエラの引いている狂気の血、九番目の血と十番目の血はそれぞれ薬品精製と領域操作の力を宿主に与える。

上手く使えばルシエラがサイズの大きな白色のゴシッククロリータを着ていても違和感無く出来るのだが、

白色のゴシッククロリータはルシエラ・フラガラッハのトレードマークでもあるため、うかつには着られない。

前に買い物に出たときに着たのはあえて、だった。

アドラスティアは外国人で白いゴシッククロリータを着ているとい



うのが、ルシエラの作った設定であり  
裏社会にもそう広めてきたからだ。

「ルシエラ。着替えたか？ 行くで」

病室の扉をノックして入ってきたのは忍足謙也、ルシエラが入院  
している忍足医院の院長の子供だ。

せつかちすぎるところはあるが、気を使ってくれたりもしてくれ  
る。謙也は学ランと言う学生服の一種を着ていた。

肩にはテニスバッグを担いでいる。

今日は午前中は謙也の通う学校、四天王寺中に行くことになって  
いた。

ルシエラは茶色いトランクを手につくと病室のドアを開ける。

「学校は、初めてなのよね」

「通ったことない、言うたってたからな……そのトランク、ごっつい  
で。旅行に行くんじゃないんで」

「鞆はこれとスーツケースしかないのよ」

ルシエラが手に持っているのはアンティークの茶色いトランクだ。  
中には化粧品などが入っているが爆薬なども入っている。

牛革で出来ているお気に入りの一品だ。何処へ行くときも持って行  
っている。

「鞆とかも買わなあかんしな。買うもん多いで。金は……」

「あるわよ」

日本滞在用の銀行口座には一年は無駄遣いをしても余裕で滞在出来るだけの資金を入れて貰った。

銀行口座でお金を出し降ろしするだけでも、そこからルシエラの居所がばれてしまう可能性もあるのでその辺りは手は打ってはあゝる。

話ながら謙也とルシエラは階段を下りる。忍足医院の病室は二階にあり、一階に下りてから玄関から外に出る。

春の青空が広がっていた。

「謙也、ルシエラちゃん、上手いこと会えたな」

「蔵ノ介。おはよう」

忍足医院の前に来て、自転車を止めたのはルシエラの今の雇い主でもある白石蔵ノ介だ。昨日、迎えに来ると言っていた。

「時間通りやな。鍵当番は……」

「今日は小石川や」

「午後は買い物もあるからな。部屋の方も荷物とか運ばなあかんし」

「色々して貰って悪いわね。ありがとう」

午後はルシエラが忍足家にホームステイをするための準備に使う家電や家具を購入したり、部屋に運んだりするのだ。

部屋は謙也や謙也の弟である翔太が片付けたりしてくれていた。ルシエラの言葉を聞いた謙也は複雑そうな表情を浮かべた。

「何せ、日本に住むとか言った後で何処借りるねん言うたら何処か、

とか借りられるんか、で何とかなるわとか、お嬢様やかからってざっぱすぎやで！？ 心配にもなるわ」

「……ルシエラちゃん……」

白石も苦笑いをしている。

イタリア人はコネと金で全部何とかなると想っているフシがあり、ルシエラもそう想ってる。かつて一緒に組織に所属していた同胞であるディオニージ・ドウリンダナに何とかして貰おうとしていたのだ。

謙也達からしてみれば中学生ぐらいの女の一人暮らしというのは無謀である。日本は他の国に比べれば安全だが、都市レベルで見れば都会は危険だ。

「行きましよう。部活って言うのに……」

ルシエラは話をそらせておくことにした。

白石は自転車を降りると手で押していた。謙也もルシエラにあわせて歩いていった。

謙也の足は非常に速いし、白石も自転車があるので早めに四天王寺中には行けるのだがルシエラを気遣っていた。

身体の方は十二分に治っている。血の力が落ちたのがネックだが、これについてはあげていくしかない。

昨日の夜にディオが病室に来たため、血のサンプルは渡しておいた。専門の検査をすればどうなってるか分かる。

ディオは日本製の携帯電話……スマートフォンと言っらしい……もくれた。

番号などの細かい手続きはすませてあった。

四天王寺中の校門は木の扉であり、日本の寺というのに似ていた。

「四天宝寺は日本の学校の中でも変わった学校やからな」

白石が言う。

今日は普通に入るか、と言った謙也が校門の扉を開けていた。何事もなく扉は開き、白石の自転車を

自転車置き場に置いてから、部室棟の方に行く。校舎らしき建物の他にもホールらしき建物もある。

「……コンサートでもやっているの？」

「あれは四天宝寺華月、金曜日にはお笑いライブやっとなるんや」

謙也が教えてくれたが日本のお笑いというのはルシエラにはいまいち分からない。

入院中は落語のCDを聞いてみたりもしていたが、病室にはテレビはなかったのだ。

部室の前に行くとテニス部のユニフォームを着た部員が何人もいた。

「蔵リンに謙也君……その女の子は誰？」

「始めまして。ルシエラ・ガートルード・ジンガレットイと言います」

「白石が助けたって言う。お嬢様やな」

坊主頭の学生が聴いて来たのでルシエラは先に自己紹介をしていた。体内プラントを起動させて、相手の警戒心を緩める薬品を作りだしておいて撒いておく。

白石や謙也と始めて出会ったときは動揺して使っていなかったが、

話をスムーズに進めるためにこれはよく使っていた。

赤いマスクをつけた学生も居る。白石と買い物に出た時に出会った二人だ。

二人と会ったときにルシエラは素早く逃げていたので会ったのは一瞬だったが。

「家にホームステイすることになって、学校にも四月から通うことになったんや。今日は見学やな」

「そうなの。私は金色小春。あつちは一氏ユウジ、ユウ君よ」

「その子って、前に白石と話しとったらいつの間にか居らんくなっ  
た……」

「景色が珍しくてあちこち見ていたらはぐれちゃって、蔵ノ介が見つけてくれたの」

わざと自分ではぐれたのだが、半分ぐらいしか嘘は言っていない。  
白石に発見はされたのは事実だ。  
微笑みと共に告げる。

「オサムちゃん、何処に居る？」

「師範と財前も居らん」

「監督ならまだ来ていないし、師範は噴水で修行中じゃないかしら。  
財前君も来てないわよ」

「おはようございます」

棒読みのような挨拶が聞こえた。学生服を着た耳にオリンピックの五輪の色をしているピアスをつけた少年が居た。眠そうである。

「噂をしとればやな。ルシエラ。コイツが財前や」

「始めまして」

「……外人何に……日本語上手いんツスけど」

謙也が財前光を紹介する。ルシエラが話すと財前が驚いていた。日本語の標準語ならば問題無く読み書き出来る。平仮名も片仮名も漢字も使いこなせるし、関西弁も何日かして覚えてきた。

財前は携帯電話を取り出すと、操作していた。

「お嬢様やから日本語ぐらい出来るやろ」

「ユウジ先輩、その理論おかしい」

「先輩なの？」

「財前は一年やから。ルシエラちゃんと同じ……年やな」

ルシエラが本来は十七歳であることを白石は知っているが、中一、十三歳と言うことに表向きはなっているため、そう発言した。今のルシエラは十七歳にはどうやっても……能力を使わない限りは見えない。

「小学生ぐらいに見えるな」

「これから成長するわよ」

「……ええ。成長してみせるわ」

ユウジと小春の言葉にルシエラは小さく答える。かつての自分を  
取り戻すことは目標の一つとなっていた。

テニスの予備知識は謙也の体育の教科書を読んで知っていた。ス  
ポーツのルールが様々に載っている教本があったのだ。

翔太が持つて来てくれた本の一冊だ。テニスはやったことはない。  
ルシエラは娯楽としてのスポーツはしない。

運動をするにしても仕事や自分の身体を維持するためだ。運動は  
疲れるので嫌いなのである。

「家は、去年は全国大会ベスト四になったんや」

ルシエラに教えてくれたのはテニス部の副部長、小石川健二郎だ。  
白石がテニス部の部長というのは謙也の話で知っていたので、  
テニス部では立場的にはナンバー二のようである。白石は小石川に  
ルシエラのことを任せた。

部長である白石は練習の他にも他の部員に指示をしたり、やるこ  
とが多いのだ。

「テニスが強いってことなのね」

ボール拾いをしている部員やテニスラケットでボールを打ち込ん  
でいる部員も居る。時々お笑いネタが混じっている。

笑い声が聞こえるがルシエラは眼を細めるだけだ。

「ルシエラはお笑いとか苦手なんか？」

「……日本人……大阪人？ と感覚が違うのか……反応に困って」

四天宝寺中男子テニス部監督渡邊オサムがルシエラに話しかける。  
四天宝寺中のテニス部のモットーは勝ったモン勝ちや

笑わせたモン勝ち、らしい。勝ったモン勝ちと言うスローガンはルシエラは嫌いではない。

お笑い番組はイタリアにもあることにはあるが見ないのだ。

そうか、とオサムは笑う。

「銀、謙也とダブルス組めや。白石は財前君と組んで練習試合や」

オサムが指示を出す。謙也のパートナーである石田銀は背が高く、頭が禿頭だ。白石や謙也と同じ年らしいが、  
そうは見えない。

「師範はテニス部では一番パワーがある。財前は逸材やな」

小石川が教えてくれる。

白石や謙也がテニスをしているのは初めてだった。白石は的確なテニスをするし、謙也は自分のスピードを上手く使い、  
試合を優位に進めている。

途中でトランクの中の貰った携帯電話が鳴っていたので取り出して画面を眺めておいた。

部活は午前中だけであり、時間はすぐに過ぎてしまった。

「お疲れ様。みんな、すごいよね」



「ルシエラはんはテニスは……」

「やったことがないわ」

「病弱でよくベッドで寝たきりとか言うところだからな」

小石川やオサムと離れて、ルシエラは銀や謙也と話した。病弱設定は嘘であるが、成り行き上つけるしかなかったのだ。

「身体は今は十分、丈夫になってきたの」

「とは言つても倒れたし」

「あれは……たまたまよ。それと、午後は家電とか家具、買いに行くでしょう。私は良いけど、謙也とか着替えがあるでしょう」

「家電？ 買い物つすか？」

病弱設定は程々にしておかないと行動に支障が出るかも知れない。通りかかった財前が話に加わった。

「財前、お前も来いや。家電とか詳しいやろ。それに家具とかええ店、知つとつたら教えてや。ルシエラは一から揃えなあかんねん」

「構いませんけど、家電とか何が欲しいんつすか」

「……使えるならミシンとかアイロンとか？」

「ピックアップしときます」

財前は携帯電話を出している。

ミシンもアイロンも裁縫道具もイタリアの住居には置いてあるが日本には持って来ていない。

使えるならとつけたのは音の問題があるからだ。ルシエラは白いゴシッククリータなどは自分で制作している。

「俺は部屋を片付ける仕上げで先に帰るから白石にお前のこと頼んでおくからな」

「分かったわ」

聞いたところに寄ると、部屋の片付けをしてから畳なども直しておくらしい。謙也は先に帰るようだ。

謙也達は部室に入り着替えてから帰る。

ルシエラは部室の外で白石を待つことにした。財前も着替えてから忍足家に来てくれると言う。

「着替え終わったで」

「部室、入ってみても良い？」

「ええよ」

白石から許可を貰い、ルシエラは部室の中に入ってみる。ドアをが閉じられた。

部室には人数分のロッカーや、ベンチなどがあった。部員の私物なのか漫画雑誌や仏像が置かれている。

オレンジ色の猫のぬいぐるみがロッカーの上に飾られていた。

「デューからメールが来たの。こっちに来るって」

ルシエラは携帯のメールを白石に見せた。日本語のメールである。ルシエラもディオも会話はどの言語でも出来た。

『そつちに行く。着いたときに用件とか話す』とだけしか書かれていない。

「素っ気ないな」

「こんなものだけど」

テニス部部員はみんな帰ってしまっているし、監督のオサムだって午後は大事な用事があると早々に帰宅した。

部員の会話を聞く限りでは麻雀を雀荘にやりに行ったらしい。

「部活、どうやった」

「新鮮だったわ。面白いし、蔵ノ介は丁寧なテニスをするし、みんな持ち味を生かしているわ……お笑いは苦手だけど」

「慣れていけばええわ。慣れすぎてもあかんけど……」

「確かに独特のノリだよな。ここって」

ルシエラと白石以外の声が聞こえた。

声のする方向を見ると、ディオが居た。ドアは閉じたままである。ルシエラは驚かなかったが、白石は仰天していた。

「ディオ君！？ 忍者か！？ ドアとか開く気配無かったで！」

「壁抜けしたのよ。物質精製能力使えば出来るわ」

ディオの能力、物質精製は物質操作の面も含まれている。能力を利用すれば壁抜けだって可能だ。

組織にいた頃は出来なかったことでもある。組織が壊滅してから出来るようになったのだ。

「驚かせたかったから、やってみた」

「めっちゃ驚いたわ」

白石の言葉を聞いてディオは少し満足そうにしていた。ディオはルシエラの方を向いた。

「アン、血だけど速攻で調べたら退化してた」

「速いわね」

「君は嫌がるだろうけど玖月の力をちよつと借りた」

ディオは用件を伝え始める。

玖月は玖月機関の略であり、日本における狂気の血の一大コミュニケーションだ。財閥めいているところがある。

銀色のカードを取り出すとディオはレポート用紙にする。渡されたレポートをルシエラは読んでみるが、血が退化していたことが書かれていた。白石も覗き込んでみている。

「血が退化した言うけど以前のルシエラちゃんの血とか入れて戻るとかは……」

「貧血みたいなものでさ、入れても今のアンの血に押し流されるか

ら地味に血の力を上げるしかない」

貧血患者が健康な血を輸血されてもヘモグロビンなどは自分の身体のものにあわさってしまい、輸血では貧血は治らない。ルシエラの症状もそれと同じだと言う。

「上げるってどないにするんや」

「怪物化するギリギリを見計らって使う……RPGのレベル上げとかスポーツのレベル上げと同じ」

狂気の血は使えば使うほど怪物になってしまうが、上手く上げることが出来れば血は進化する。

ルシエラもディオも怪物化を避けながら血を進化させてきたのだ。レポートを全て読み終わったルシエラはレポートをディオに返す。ディオはレポートをテニスボールに変化させて地面に落として転がした。

「血が進化すればもつというんなことが出来るんか」

「その分、使えば血の侵蝕が大きいけどね。……例えばデューは武器を作って、電撃を纏わせて発射出来る」

「……手札ばらさないで欲しいんだけど」

「アンタの方が分かりやすいし。武器を作る、電撃を纏わせる、さらに効果付加をしていけば血がその分活性化」

ディオが無表情に言っている。狂気の血は使う技にも寄るが、殆どの技はずつと使い続けられる。

RPGのゲームで言うMPの枯渇化が無いのだが、血に支配されていくのだ。少し簡単に血の能力を使うなら、侵蝕が無かったりすることもある。使用者は見極めなければならぬ。

「おれは一週間ぐらいは日本にいるから、これから新幹線に乗って関東に行くけど」

「並盛？」

「そこもかな。海遊館行きたかったんだけどね。今度にしておくよ」

海遊館は大阪にある世界最大級の水族館だ。ディオは忙しいようだ。組織を出た後で彼はある人物に雇われているのだが、人使いが荒いらしい。そうは言いながらもずっと雇われているのは気に入っているからか、他に決めるのが面倒なのか、ルシエラには分からない。

「海遊館はジンベイザメが居るで」

「見たんだよね……それと、この部屋に入って気になったことが一つあるんだけど」

ジンベイザメはルシエラも見ただけではない。ディオは緩やかな雰囲気だ。

「この部屋、盗聴されてたんだけど、心当たり無い？」

とんでもないことを告げた。

四天宝寺中には諜報部という部活が存在する。名前だけを聞くとスパイ活動をしているような部活ではあるが、実際していることと言えば、生徒会の下請けだったり、放送委員会の下請けだったり、下請けばかりしている部活だ。ややずれている四天宝寺中ではあるが物騒な裏組織は必要は無かった。

「助かったで。ディオ君が気付いてくれんかったら、諜報部がほんまもんの諜報部になるところやった」

白石は心底ディオに感謝していた。

ディオが部屋にあるオレンジ色の猫のぬいぐるみを持ち上げ、中を切り裂いて黒い小型の盗聴器を出したのだ。

部屋に入った瞬間、盗聴電波を感じたディオは能力で部屋一帯に電波障害を起こして盗聴器の電波を攪乱したらしい。

「デューの血、六番目の血は電気絡みなら殆ど何でも出来るから」

ルシエラのことかばれたのかと白石は考えたが、それならば部屋に仕掛けるのではなく、忍足家などに仕掛けるだろうと想い、別の考えに切り替えて諜報部の存在を浮かべた。諜報部は本物の諜報部になろうとしている派閥があることを

聞いていたのだ。盗聴器を壊しておく？ と聞いたディオに証拠として持つて行くと言った白石はルシエラとディオを諜報部の部屋に一緒につれて行った。

その後はと言うと、諜報部を締め上げたり、二度と盗聴するなと言っておいたり、念のためにディオに盗聴器発見器を作ってもらったりとしていた。なお、新幹線の時間があるとディオ

は帰っていった。

白石は自転車乗り場で自転車を出していた。ルシエラはトランクとオレンジ色の猫のぬいぐるみを持っている。

破いたところはディオが能力で直してくれていた。

トランクの中にはルシエラが前に白石に渡した白色のゴシックロリータも入っている。

一段落したときに存在を思い出してルシエラに返したのだ。

「新聞部が情報収集とかやっとするから、諜報部は下請けをしとればええんや。元は逃げ場みたいどころやし」

「逃げ場？」

「四天宝寺中はな。運動部と文化部に全員が所属せなあかんのや」

「それ……きつくないかしら」

学校についてよく知らないルシエラではあるが、白石の言っていることが無理があることぐらいは分かる。

運動が苦手な人だって世の中には居るし、文化系の部活に全力を使うより、運動部に全力を使いたい者も居るだろう。

「先生方も分かつとる。片方を真面目にやっとならば咎めへん」

「そうなの……私も部活に所属しないといけないのよね。運動部か……どんな部活があるの？」

「テニス部やろ。バレーボールにアメフトにバスケットに野球にカバディにセパタクローとか」



「最後の二つが何か微妙な競技なんだけど……私、運動は好きじゃないのよね。動くの」

「あんだけ動いとって……」

「いつもは薬を撒いてるのよ」

ルシエラ 능력은 藥品精製と領域操作であり、この二つは肉体をさほど使わなくても良い能力のだが、彼女が肉弾戦をするときは能力で足りないときや血を使いたくないときだ。薬で勝てるならば薬を使っていく。

運動神経はあるとは言え、病弱と言っているルシエラだ。仮に身体がよくなってきたから運動が出来るとは言って運動はしても出来すぎるだろうから浮いてしまっし、隠れているのだから目立たない方が良い。

白石はあるアイデアを思いついた。

「ルシエラちゃん、テニス部のマネージャーやってみんか？」

「マネージャー？」

「オサムちゃんには俺が言ってみるし、テニス部の細々としたことを片付けたりするんや」

四天寺にマネージャーの制度はない。昔はあったかも知れないが白石がテニス部に入ったときにはなかった。

仕事は副部長がやったり、一年生にやらせたりとしていた。

「それなら出来そうね。セパタクローやカバディはやりたくないし、蔵ノ介の側に居た方が良さそうだから」

「俺は文化部やったら新聞部に入っとる。小説書いとるんやで。文化部は入学してからでええやろ」

「テニスのルールは見て解ったし、憶えていくことは憶えていくわ」

「春休みはまだあるし、ルシエラちゃんも部活は顔出しとればええわ」

白石の小説は新聞である意味問題になっている妙な小説なのだがそのことについてはまだルシエラは知らない。

ルシエラをテニス部のマネージャーにしておけば、白石としてもフォロワーが効く。先ことは不明であるが見える範囲の先については考えておくべきだ。

「学校は分からないところだから」

裏社会で生きてきたルシエラは学校に通えるはずはなく、勉強は組織で教わっていたことや、自主的に勉強をやったぐらいのようだ。勉強についてルシエラには不安はないとディオが言っていた。剣王は総じて学習能力は高いらしいし、

彼女は暇があれば本ばかり読んでいたらしい。知識をつけるためにだ。

不安なのは日常生活だろう。白石にとっては何気ないことだがルシエラにとっては異質なことだ。

暗殺者だって殺し屋だって日常生活は送っていないわけではないが、学校に通ったり、遊んだりすることは未知の領域に入る。

「不安がらんでも、俺も居るし」

「……不安じゃないわよ」

「怖くは、無いからな」

白石がルシエラを安心させるように視線を合わせて笑う。

「……Nonostante una piu giovane  
persona」(年下の癖に)

視線をすぐに外してルシエラがイタリア語で呟いた。イタリア語は白石には分からない。

「イタリア語は……英語ならどうにか」

「Despite a younger person」

「無理やったわ」

白石が苦笑いする。その様子を見たルシエラはトランクを白石の自転車の籠の中に入れた。

「帰りましょう。午後は買い物なんだから」

「後ろ、乗ってけや」

「どう乗るの?」

シティサイクルには荷物置き場がない。白石はテニスバッグを自転車の籠の中に無理やり入れてから、後ろの乗り方をルシエラに教えた。

ルシエラはシティサイクルでの二人乗りは初めてだったし、自転車の二人乗りも初めてだった。

後輪の車軸に足を引っかけて立ち、白石の肩に手を載せて支えにする。

白石は忍足家まで送ってくれると言ってくれていた。数分間の短い自転車の二人乗りだと想っていたのだが……。

「蔵ノ介……私が降りたら」

「お前はそのまま自転車に乗っとればええ!!」

「待て　!!」

白石はシティサイクルのペダルを漕いで爆走していた。後ろからは自転車に乗った警官が追いかけてきている。

二人乗りをしていたら警官が二人乗りは危険だと言ってきた。

バランス感覚がある方のルシエラは二人乗りでも別に危険ではないと感じたが、警官は危険だと判断したようだ。

警官の判断を白石は無視して自転車を走らせ、警官が追いかけてきている。

自転車はガタガタ揺れていて、バランスを取るのが面倒になってきていた。警官は単に二人乗りをしているルシエラと白石を

注意しているだけでありルシエラが今まで行った殺人やその他諸々については咎めないと言うか気付かないだろう。

「何処に行こうとしているの」

「お前となら何処でも行ける気がするわ」

「乗っているところ悪いんだけど午後の買い物、憶えてる？」

「んー絶頂！！ このまま走っていけば警官から離れられる！」

警官はホイッスルを鳴らして自転車で追いかけている。何処へでもと言われても忍足家に帰らなければならぬ。

買い物は謙也や財前と一緒になのだ。集合場所は忍足家なのである。ルシエラはこの辺りの土地勘が無い。

「商店街？」

小道を抜けて辿り着いたのは行ったことがない商店街だ。魚の匂いや肉の匂い、雑貨屋などが通りの左右に並んでいる。

広めの煉瓦の道を白石は自転車で駆け抜けた。

「まだ追いかけてくるんか。だが、今の俺は何処でも走れるで！」

「何処でもって……」

白石の視線を追うと歩道橋が目に入る。歩行者や自転車が道路を渡りやすくするために交通量の多い道路の上に作ってある

橋ではあるが、そこにあるのは階段だけだ。坂道はない。目の前の歩道橋の階段は誰も上っていない。

先の道には人が多く歩いている。

「このまま渡るで歩道橋！！ ルシエラちゃんと俺ならきつと渡れるー！」

「鎮まりなさい。蔵ノ介　　！！」

体内の薬品製造プラントを起動させて鎮静剤でも作って白石に打ち込むべきかと一瞬考えたルシエラではあるが、勢いに乗った白石が自転車から降りずにそのまま、階段を走り始めたので使わないでよい。

ここで白石を落ち着かせてしまうと階段から落下したりして彼が怪我をするかも知れない。

ルシエラはと言うと怪我はしないはずだ。バランス感覚はあるのだ。

ガタガタと自転車は揺れていく。

「バランス取りづらいな。落ちんようにしっかり捕まっとるんやで」

「私じゃなかったら落ちてるわよ。これ！」

「ルシエラちゃんてよかったわ」

もう一つの能力である領域操作能力で何か出来ないか脳内で検索をかけてみるが出来そうなのがなかった。

領域操作能力というのは相手を支援することにも長けている能力であるが血の力が落ちたせいで、支援能力も

失ってしまったらしい。血の能力も何が残っているのかを調べておかなければならなかった。

狂気の血は使えば使うほど血が侵蝕していくが、侵蝕度が高くなるといって使える能力もある。

座って白石の腰に手でも回せれば安定するがシティサイクルには荷物置き場がないので無理であるため、肩を掴むしかなかった。

「登り切った、の……?」

「やったで。俺！これで警官も追っては……」

「クーちゃん!!」

「ルシエラさん」

揺れが無くなり安定し、ルシエラは白石の肩を掴んだままで周囲を確認した。視界が高い。下の道路にはトラックや

バイク、軽四など多種多様な車が通り、人々が歩道橋を眺めている。注目を浴びてしまったようだ。ルシエラは次に声の主達を見る。ルシエラ達が登ってきた歩道橋の反対側から登ってきていた。

「翔太……元気ね」

「目が疲れてるよ……」

「蔵ノ介と二人乗りに挑戦したら、警官が追ってきて私は降りるって言ったのにそのまま……」

忍足翔太は忍足家の次男だ。謙也の弟である。今は小学校六年生で、今年の四月からは中学生になる。

学校は四天王寺ではなく別の進学校に通うと聞いていた。黒髪のリ発そうな少年だ。謙也と髪の色が違うが謙也の髪も元は黒であり、脱色したと聞いている。

ルシエラは自転車から降りた。

「そのまま走るってどういうこと!?!」

「友香里、警官に追われたら逃げるもんやし、ルシエラは警官に捕まったらあかん……」

「誰でも捕まっちゃダメでしょ」

「誰？」

「白石さんの妹の友香里……俺と買い物途中で逢った。同級生」

白石が色素が薄い髪の毛をしているのに対し、妹の友香里の髪の毛は濃い。ピンク色のシャツと白色のスカートを着ている。髪の毛は短いツインテールだ。

「……落ちないように必死だったわ。二人乗りって怖いね」

「そりゃ、落ちたりしたら怖いけど、ルシエラさんが間違ったことを憶えそうな」

「クーちゃんの馬鹿!!」

友香里が白石の頬を叩いた。後ろから自転車から降りた警官が階段を上ってきている。ルシエラはオレンジ色の猫の縫いぐるみを自転車の籠から出すと両手で握っておいた。

「午後からの買い物、行けるかしら」

【F.I.C】



## オレンジ色の猫（後書き）

ルシエラは学校始めてです。戦場としての学校になら行ったことはありませんが  
歩道橋を自転車で登るのは止めましょう。  
スロープはついてなかったんだよ

## ニューロン（前書き）

六話目というか次の話ではキャラがまた（既存キャラの方）出しますが

他のサイドも書いていきたいなどは。

前の話から書いてなかったですが忍足家模造していたり今回の話だと財前の趣味が趣味だったりとしてますが模造です。

## ニューロン

【ニューロン】

「こんなに面倒だなんて、部活というのを甘く見ていたかも知れないわ」

白石蔵ノ介はルシエラ・ガートルード・ジנגレットの呟きを聞いた。部室には白石とルシエラしか居ない。

ルシエラが部室の中にあるベンチに座り、一息ついていた。今日の彼女はスカートではなくジャージ姿だ。

「裏方も大変なんやで」

ルシエラを大阪四天王寺中男子テニス部のマネージャーにすると決意してから二日が経過した。

マネージャーにすると決めてから、自転車で歩道橋の階段をルシエラを乗せて爆走して妹の友香里に怒られた白石は午後はルシエラの買い物に付き合った。

彼女は白石の同級生である忍足謙也の家にホームステイをする事になったので、家具や家電を揃える必要があったのだ。

後輩である財前光や謙也の弟である翔太も付き合い、午後と、休みである次の日を丸ごと使ってルシエラの必要なものを揃えた。

一日と半日で海外の大手家具ショップに行ってみたり、大きな家電屋に行ったりしたが、そのたびにルシエラは驚いていた。イタリアでは大きな店は余り利用しなかったらしい。

そして今日は男子テニス部の監督である渡邊オサムにルシエラをマネージャーにしても良いかと許可を貰い、許可があっさり下りたのでルシエラにマネージャーの業務をやらせてみていた。

「昔は一人で仕事は全部していたみたいなものだから楽だと想っていたのに……今までマネージャー居なかったの？」

「仕事とかは小石川とか後輩とか、俺とかで分担すればすんどつたし、他のスポーツ部でもマネージャーは居らんとこるばかりや」

仕事というのは殺し屋、もしくは復讐屋の仕事ではあると白石は知っているがそのことには触れない。

マネージャーの仕事というのはあるようで無いとも取れる。理由としてはマネージャーというのは主に顧問の補佐をするからだ。テニス部や野球部もそうだが部活をする以上は雑用がある。テニス部で言うならば、練習用のコーンの片付けや、スコアを記入、ドリンク作りや怪我をした部員治療などある意味では部員よりも知識や能力がいるところがあるし、基本は雑用ばかりだ。

「ドリンクも粉と水を入れて振るだけだし楽ね」

「妙な薬は入れんのかな」

「やるとしたら飲んだら元気になる水ぐらいにしておくわ。ドーピングはよくないんでしょ」

「よくないって言うか、失格になるから」

ルシエラ的能力というのは二種類、薬物を精製することと領域操作であると言うことは話で聞いていた。

液体火薬を作ったところは白石も見ているし、記憶消去の薬で記憶を消されかけたこともある。

「確かめてみたら、能力は二割戻ってれば良い方だったのよね。筋力も鍛えておかないと……剣だって二本持てなさそうだし」

二本の剣というのは前に白石が始めて裏社会の戦いを見た時にルシエラが使っていた白石を守るために地面に突き刺していた一本と彼女が武器として握っていたもう一本のことなのだろう。二刀流で使っていたらしい。

二刀流のルシエラを想像しようとした白石はあることに気がついた。

「……ルシエラちゃん、ルシエラちゃん的能力って薬物精製と領域操作なんやよな」

「そうよ」

「筋力を鍛える必要ってあるんか？ ゲームで言うとルシエラちゃんは魔法使いみたいなもんやろ」

狂気の血を使いすぎたら化け物になるとは白石も聞いているが、ルシエラは薬品を撒いて戦っていたと言っていた。

仕事だって、使いやすい能力を使ってきたのだろう。薬品を遠距離で撒いていた方が安全であるはずだ。

「私は武術の方の適性もあるって言うか剣王は一通りの適性は持っているのよ。それに私は能力に覚醒させられたのが遅くて、ある程度鍛えられてから覚醒させられたから……身体を鍛えておいているの」

一通りの訂正というのは刃物や銃、格闘技などのことを言うようだ。

ルシエラと違い、他の狂気の血を移植された者は覚醒させられ  
から鍛えられていた。

白石はルシエラを眺める。ベンチに座る彼女はお嬢様に見えるが、  
ナイフや銃を使いこなし、格闘技までやると言う。

「……ちなみに、格闘技というと……」

「関節技とか好きね」

「好きなんか……」

「逆関節とか、でもあれってあくまで補助なのよ。投げ技や崩し技  
のね」

「今もかけられるんか？」

「……試してみないことには分からないわね。能力の性能は確かめ  
られたし、身体のパフォーマンスも確かめておきたいんだけど」

関節技について言っているときは笑顔のルシエラではあるが、白  
石の質問に対しては顔を曇らせていた。

身長が八センチほど縮んだルシエラだ。リーチも縮んでいるし、  
体の使い方だつて違ってくる。

携帯電話の中に入っているかつての白いゴシッククロリータを着た  
本来のルシエラ・フラガラツハが、関節技をかけているところを白  
石は考えてみたが、薄い微笑みをみせながら人の関節をギリギリ締  
め上げているルシエラは、怖かったので白石は思考を止め、別の話  
題にする。

「性能って機械みたいに自分のこと言うんやな」

「癖みたいなものかしら。身体は資本だし……血も進化させなきゃ。薬はデューから貰ったけど」

自分のことは自分のことでありながら、他人事のように取っているのがルシエラだ。自分の右腕を眺めながら、ルシエラが一瞬だけではあるが不安そうな表情を浮かべる。

日常生活は慣らしていけば問題はないのだろうが、自分の力が落ちたことは大問題なのだ。白石で言うならば身体の故障でテニスが出来なくなつたようなものだ。

「能力は余り使わないでおいて欲しいな。怪物化の問題あるんやろう。血は使わないと進化せんとは言え、怖いんや。薬も……薬ってあの、血を吐く薬やろ」

ルシエラの気持ちも白石は分かるし、血に関して言うならば主で居るルシエラの方がよく知っているのだろうが、白石は前に彼女の同僚であるディオニージ・ドウリンダナから聞いた話を思い出していた。

狂気の血と言うのは定義はされているがまだまだ分からないことばかりであり、万が一のことが起きるかも知れない。

裏路地での戦いで変質したマフィアのボスのように、ルシエラもそうなってしまう可能性はゼロではないのだ。

「あの薬、肉体と精神の力を上げる薬で……九番目の血を引く私だから吐血程度ですんでるのよ。」

万が一があつたら今まで以上に肉体レベル上げないと……薬が手っ取り早いよね」

「吐血程度とか吐血に程度、とかつけたらアカン！」

白石は強く言う。ルシエラは目を大きく見開いていた。

裏社会の者達は自分達の身を削って戦ったりする者も居る。ルシエラの投薬がそうだ。ドーピングは自分の力を上げられるが、身体に反動も来る。廃人にはならないですんでいるようだが、血を吐いたりして戦うぐらいなら白石としては戦って欲しくはない。

「……蔵ノ介がそう言うなら使わないようにはするけど……非常事態とかは使っても良い？」

ルシエラは怒られた子供のような表情で白石に問いかける。

「薬は駄目やで。能力やったら非常事態はええけど、俺が許可したらにしてや」

「それともう一つ、使いたいときがあるんだけど」

もう一つ、とルシエラが言い、白石が聞こうとしたときに彼女は声を止め、ドアの方を眺めた。  
少しするとドアが開く。

「白石、ルシエラ。軽音楽部が終わったで」

入ってきたのは忍足謙也だった。すぐに謙也の気配を、誰かが来ると分かって会話を止めたのだろう。察知能力は落ちていないらしい。白石とルシエラは軽音楽部がある謙也を待っていた。謙也は入学式するための演奏の相談をしていた。

四天宝寺中は在学生全員がスポーツ部と文化部の両方に所属してどちらか、もしくは両方を全力で挑まなければならない。



「帰りは、徒歩よね」

「強調せんでも、俺は自転車やけど降りて歩くし」

「前に二人乗りをしたら酷い目にあつたんだから」

始めてルシエラが四天宝寺に来て部活を見学した日、白石の運転する自転車にルシエラは二人乗りをした。

そうすると二人乗りは危ないと警官に注意をされたのだが白石は聞かずにそのまま自転車を走らせ、歩道橋の階段部分を勢いよく登ってしまったりもした。白石はそこで鉢合わせした妹の友香里に頬を叩かれたりしていた。

警官に捕まりそうになつたがルシエラが能力を使った話術を使い、嚴重注意だけで終わらせた。

話術だけでも何とかかなりそうではあつたが、念のために能力を使ったという。

「ルシエラは自転車に乗れるんか？」

「乗れるわよ。身体の調子が良かったときにはちよつと乗っていたし」

ルシエラは病弱という設定を使っている。血が不具合を起こしていただけで身体の方は健康的ではあるのだが、話を作っているうちに病弱と言うことになってしまった。

マネージャーになるのも謙也はまた倒れないかと渋い顔をしていたが、白石とルシエラで身体を丈夫にするには動かすしかないなどと言つて納得させた。

「小石川が言うつたんやけど明日か明後日には千歳が来るらしい

な」

「来たら施設とか案内してくれってオサムちゃんに頼まれたわ」

「千歳？」

謙也が四天宝寺中男子テニス部副部長である小石川健二郎が言っていたことを謙也が話した。小石川も軽音楽部である。

千歳についてルシエラは知らないので聴いて来た。

「獅子楽中の九州二翼の一人でな、目を怪我して部活は止めとったんやけど、ウチに転校してくるんや」

「吸収二翼って……厳つい名前ね」

「……ルシエラちゃん、吸収やのうて九州。日本の南の方にある地方やな」

真剣な声で言うルシエラに白石は発音から勘違いしていることに気がついて、説明をしておく。

千歳千里、九州の熊本にある九州地方の覇者、獅子楽中の九州二翼と呼ばれている強いテニスプレイヤーの一人だが、練習中に目を痛め、テニスを止めていた。白石達が知っているのは西日本のテニスの大会で会っているからだ。

ルシエラは白石を見上げるとすぐに視線をそらせた。

「イタリア人なんやから日本語の聞き間違いとか俺等より多いんやて」

「……聞き間違えてないもの」

謙也がフォローを入れた。呟くルシエラは顔が赤かったような気がして、白石は笑う。

ルシエラが軽く右手で白石を叩いた。

自宅に帰り白石は自転車を所定の位置に止めると家に入る。白石は父母と姉妹と猫と暮らしているが、母や姉は出かけていて友香里も居ない。父は薬剤師としての仕事をしているため、家には白石と猫しか居ない。

白石の部屋は健康グッズで溢れている。通販で買えそうな腹筋マシーンや各種のサプリメントや体操のDVD、座布団や枕は全てテンピュールだ。テンピュールはルシエラにも勧めておいた。テンピュールは低反発素材が進化したもので、値段は高いが寝心地や座り心地は良い。午後は久しぶりに一人で過ごすことにした。

(一週間も…… たつとらんよな)

裏路地のマフィア通しの戦いは白石の心に衝撃を与えた。マフィアというのが居るのは白石も知っていたが、異能力を使ったり、化け物になったり、ルシエラもルシエラで能力や剣を使い、倒していた。

映画でやっているマフィアというのも居るようだが、あんなマフィアもいる。

心配してルシエラを追いかけなければあんな光景には出会わなかったし、巻き込まれることもなかった。

しかしそれだと今頃、ルシエラは大阪には居ない。

鍵の着いている一番上の引き出しの鍵を開けて、白石はルシエラから預けられた懐中時計を取り出す。

「いくらぐらいなんやろう。相場で……」

スイス製の懐中時計と言っていた。スイスというと時計を作っているというのは白石はテレビで観たことがあった。

金色で、丸形で細い鎖が付いている。縦に蓋が開く。開けてみれば硝子がヒビ割れた文字盤が出てくる。

時計の裏側にも細工がされていた。

直すのに数百万かかると聞いていたので懐中時計の値段自体もそれぐらいだろうと白石は時計を預かってから引き出しに入れて鍵をかけて押し込んだままだった。

(裏蓋の所に字……?)

目を懲らすと裏蓋には光の加減でアルファベットが掘られているのが見えた。

筆記体ではなくブロック体なので白石にも文字の判別は出来るのだが、言語が不明だ。

解読を諦めて懐中時計を白石は机の上に置き、状況を考えていく。ルシエラを雇うとは言ったが、期間は決めていない。せめてルシエラが中学を卒業する二年か、自分が卒業する一年かのどちらかにしておくことにした。裏社会も刻一刻と様子が変わってくるだろうし、何かあればディオが連絡を入れたりしてくれるだろう。ルシエラの雇い主となった白石なのでディオは様子を知らせてくれるはずだ。

白石が裏社会の状況について行けるかというのは別問題ではあるが。

能力は余り使うなど言っていおいたが殺しも禁止にしておいたりした方が良さだろう。

敵だと感じたらルシエラはあっさり人を殺す。裏社会の人間だ

からだろうか。死体の処理については呟いていそうだが、殺しは殺しである。殺しは駄目だ。犯罪である。

ディオがルシエラが隠れるときに出来る限りの手をルシエラの部下もそうだが打ったので追っ手は来ないはずではある。

依頼料に着いてではあるがルシエラは金には不自由していないと答えていた。

稼いだ手段は裏社会的な方法と、真つ当な方法が半々ずつらしい。不自由はしていないだろうが、白石は雇った身ではある。考えておかないといけない。

「ルシエラちゃんは……」

サディストと聞いているし、殺し屋兼復讐屋だし、身体で薬品は精製出来るし、領域も操作出来る。

白石はルシエラを人間と想っているが、彼女の性格などはいまいち掴めていない。性格が悪いのはあるだろうが、たまに子供の……十七歳は子供と言えば子供かも知れないが……ような表情を浮かべる。

一日と半分を買い物に費やしたときだって、普通の、何処にでも居る少女に見えたのだ。

「……まずは決めたことを、伝えよ」

思考の堂々巡りに入りそうだったので考えることを止めた。

雇う期間と、守って欲しい約束や依頼料についてを白石は明日、伝えることにした。

四天宝寺中男子テニス部の部活は休みは一週間に一度か二度だ。

時と場合によって違う。次の日も部活があった。

今日は四天宝寺華月でお笑いライブがある。その準備が他の部活によって行われているはずだ。

一氏ユウジや金色小春が出る。四天宝寺華月は四天宝寺中にある総合演芸劇場だ。

今日は漫才の他にも、軽音楽部のライブもやるはずである。

「お笑いライブって言うのはテレビでやっているアレよね」

「小春とユウジはおもろいで。ユウジは物まねも得意なんやけど」

見習いのマネージャーとしてテニス部で仕事をしているルシエラだが余裕が少し出来たのか、

昨日よりは疲れていなかった。午前中の部活を終えて今は午後だ。

四天宝寺華月でライブをやるのは夕方からであるが、リハーサルや会場の準備がある。

「蔵ノ介はライブとかしないのね」

「俺は新聞部やから記事にする方だな」

「小説を書いているっていったけどどんなの？」

「推理小説や」

部活が終わり、白石とルシエラはテニススコートの側で話していた。ルシエラはテニススコートを眺めている。

午後のライブはルシエラも見に行くと言っていた。四天宝寺華月で行われるお笑いライブや軽音楽部のライブは在学者でなくても見に行ける。

「白石部長……と、ルシエラ」

「財前」

午前中は話すことが出来なかった決めたことを白石が話そうとすると財前が話しかけてきた。

財前は着替えて学ランとなっている。

「ルシエラ……謙也さんが、呼んどったで」

「呼んでた？」

「あの人は四天宝寺華月に居るから」

「大きなホールよね。行ってくるわ」

財前がルシエラの方を見て告げる。ルシエラは軽く首を傾げてからすぐに四天宝寺華月へと行った。

ルシエラが行くのを財前が見送っている。

「どないした」

「……ルシエラについて何やけど、謙也さんに相談するより部長に相談したほうがええかなって」

「相談？」

神妙な顔で財前が頷く。白石は緊張しつつ、緊張を表に出さないようにしながら財前の話を待つ。

「一昨日とかで家具屋とか案内したじゃないですか」

「お前の案内で助かったな」

家具屋や電気屋は財前がネットで検索したところに行つた。財前はインターネットやパソコンが得意だ。

他の部員はインターネットやパソコンについては余り分らない。

「そのお礼つて、朝に俺が欲しかったモンをくれたんですが……それ、かなり高かったんっすよ。あっさりくれたんで……」

「欲しいもん……かなり高かったっていくらぐらいや」

財前の表情は嬉しさよりも複雑さの方が現れている。財前は困惑と共に言葉を吐き出した。

「諭吉さん二枚でようやくおつりが来るぐらいの……」

「それは高いわ!？」

「返すわけにもいかんし、高いもん貰つても悪いつてか、これぐらいするのは当然みたいな表情やつたんで。俺は、案内しただけっすわ……たいしたことしてないのにあんな……金銭感覚がおかしいなつて」

ルシエラは何をあげたのだろうか、財前が混乱している。財前にとっては簡単なことだったのだろうかルシエラにしてみれば、随分と助かつたらしく、お礼は弾んだらしいが、それが諭吉さん二枚で



おつり、つまりは一万円以上はするものである。

一万円は中学生には大金である。

家具を買ったりしたりしたときは高いものではなく、中間の値段のものだった。全て簡単に安く揃えられるところを財前が検索してそこで揃えた。

(小遣いの使い方についても言うとかんと)

「人の付き合い方がビジネスっぽいつてか……距離の掴み方が分かるのかも知れんけど、深窓の令嬢っぽいし」

身体は丈夫になってきたけれども病弱だったと言うのはルシエラや白石が広めておいた噂だ。

裏社会で生きてきたルシエラは人付き合いは程々にしておいていたらしい。デイオは最初の組織の同胞なので、付き合いが続いていたようだ。

病気がちのお嬢様だから人付き合いも分からないのだろうと言うのが財前の見解だ。

真実は違うが、このままにしておいたほうが良い。

「……そうやな……財前、知らせてくれておおきにな。話してみるわ」

「……謙也さんが呼んどるってのは嘘やったんで」

「相談したかったんやな……」

白石も四天王寺華月の方に行くことにした。華月の方に向かってみると、ルシエラと出会う。

「蔵ノ介」

「ルシエラちゃん。用事は」

「謙也は呼んでないって言ってたけど、夕飯について話したわ。夕  
「焼きとご飯だって」

「大阪の定番メニューやで」

大阪は九割の家なたこ焼き器があり、場合によっては来客用と自  
分達用で二台ある。またご飯とたこ焼きを一緒に食べると言うのも  
家に寄ってはよくやられていた。ルシエラはたこ焼きは食べられる。  
イタリア人はヨーロッパの中では数少ないタコを食べている民族  
であり、ルシエラも食べることに嫌悪感はなかった。

「お好み焼きも好きよ」

「好きで良かったわ……そや。財前から聞いたんやけど財前に高い  
モンやったんやて？」

「高い……のかしら？」

「諭吉さん二枚でようやくおつりは高いで」

逆に聞かれたので白石は落ち着いて、ルシエラに高いと教えてお  
いた。

「お礼はしなきゃ。部屋も良い感じになったんだし」

ルシエラは忍足家の一室に買い込んだ家具を運び込み、自室とし

ていた。住みやすいように計画を立ててその通りに勧め、理想の部屋を作り上げていた。

「……限度があるで。財前は引いとった」

「好みのものをあげたはずなのに」

「値段や値段！ 小遣いも制限するで……って俺はルシエラちゃんのおかんか」

「蔵ノ介は雇い主よ……自分達でお金とか稼いでないの？ 謙也はおばさまやおじさまの手伝いをしてお金を貰っていたけど」

ルシエラの冷静なツッコミと心からの疑問が来た。おばさまは謙也の母親である忍足万里子のことであり、おじさまは謙也の父親である忍足宗也のことだ。

忍足家は開業医をしていて、自宅の近くには診療所があり謙也は雑用をたまに手伝っては、臨時の小遣いを貰っていることを白石も聞いたことがあった。

「日本の学生はほぼ小遣いなんや。イタリアにも小遣いはあるやろ」

「Spllatiicoならイタリアにもあるわよ」

「イタリア語は分らんがそれやろうな。謙也は家のことを手伝って金を貰とる。とんでもない金額を普通に使える学生の方が珍しいんや」

イタリア語が聞こえるが白石はイタリア語は全く分からない。けれどもルシエラが納得したので、

きつと単語はあっているのだろうと想う。ほぼをつけているのは例外だつて居るかも知れないからだ。

大概の中学校は家庭環境の問題の特例を除けば、バイトは禁止だ。話してみても白石はルシエラが謙也も自分のように仕事をして稼いでいると想っていたと言つことを知る。

ルシエラからしてみれば一般家庭というのは分からない集団なのだろう。

「お金持ちの学生と言つ事ね。二万円は中学生には大金と言つことも憶えたわ」

「中学生のレベルで大金となるとしたら五千円ぐらいかな……オサムちゃんも競馬とかで、たまに数万円単位で無くすこともあるけど、礼もするのはええけど、やりすぎるのもな」

白石の基準として五千円と言つておいたが、人によっては違うだろうし、ルシエラも他の人から話を聞いたりして基準は修正していくだろう。

「相場は払っていたつもりなんだけど、この手のことは上手くやらないと下手にしたら不審がられるし」

「ルシエラちゃんは裏社会の人付き合いの仕方とかは知つとつても、学校での人付き合いとかしたことはないしな」

これから学校に通つたり、テニス部にも馴染んできたら、金目当てで近付いてくる人間だつて居るだろう。

そんな人間が居たらどうするつもりなのだろうか。ルシエラのことだから利用するだけ利用して捨てるかも知れない。

「病弱設定を上手く使うわ……学校に通うための準備はしてる」

「制服を揃えたりとかか」

「それもあるけど……勉強ね。翔太から小学校の教科書を借りたし……財前から中学校一年生の教科書も借りてどの辺りまで勉強したか見ておくわ……準備は念入りに行っているし」

彼女は準備に手間暇をかけているが、裏社会の人間として染み込んでしまったクセのようなものだろうと白石は想う。

「学校のことは準備が出来とるとして……ルシエラちゃん、財前に何をあげたんや？ オーディオセットか？」

白石には気になったことがあった。

財前が引いたルシエラが彼にあげたものことだ。財前からはそう言えば貰ったと言うことは聞いていたのだが、それが何なのかは聞いていない。財前がオーディオセットを欲しがっていたことを白石は知っていたので、あげたのはオーディオセットなのかと想った。ルシエラは瞳を軽く細め、財前にあげたものの名を口にした。

「ボックス、初音ミク、ガレージキット、六分の一フィギュア」

「……はつねみく……ふいぎゅあ……」

「買い物に行ったときに彼、CDとか見ていたから、探したらフィギュアがあつたのであげたの」

初音ミクというのは白石も聞いたことがある。キャラクターだ。歌うキャラクターである。

インターネットで流行しているボーカロイドの一種だ。白石はそれぐらいしか知らない。

買い物の際に財前が初音ミクのCDを見ていることに気がついたルシエラがお礼にと商店街に行ったら、  
フィギュアの店で初音ミクのフィギュアを見つけて、それを購入してあげたのだ。

このフィギュアは未塗装であり組み立ては自分でしなければいけないのだが、上手い人にもやってもらったという。

(財前……引いっつたんやろうか)

そのキャラクターが好きだからと言ってフィギュアを買ったら困ってしまうこともある。

ルシエラはその時のことを回想しながら白石に聞いた。

「俺の嫁……とか言っていたんだけど、日本人は人形と結婚する風習でもあるの？」

俺の解答がルシエラちゃんの日本観を左右するかも知れへん。そう白石は財前が言った言葉の意味が分からずに疑問に想っているルシエラを見て感じた。

「日本人が結婚出来るのは男やと十八歳のはずなんやけど……日本人には人形と結婚するとかそういうのはないで。韓国やったら抱きまくらと結婚した人とか居るらしいで」

俺の嫁という言葉聞いて財前はきつと喜んでいたのでらうと白石は察するがそれ以上は触れないでおく。

白石なりの優しさであった。

咳払いをして話題を切り替え、白石はルシエラに雇う期間と依頼料について話す。

雇う期間はとりあえずは一年から二年の間で状況によっては短くなったりするかも知れない。

状況が不明瞭なところがあるのでこれはルシエラも納得した。

守って欲しいことは殺人はしないことと能力は出来る限り使わないようにすること、お金も程々に使うこと、依頼料について白石はこれはどれぐらいあげればいいのか分からないと伝えるとルシエラは思案した。

「月に一回か二回、食べ物を買ってくれればいいわ」

「食べ物か。本とかは自分で買うやろうしな。ルシエラちゃん」

「串カツとかたこ焼きとか美味しかったから」

串カツもたこ焼きも買い物に出たときにルシエラが食べたものだ。大阪と言えばこれだと食事をする時に謙也が選んで白石達で食べたのだ。

「好き嫌いとかあるんか？」

「あるけど、四の五の言っていられないときは何でも食べるわね」

食べ物の好みを言っていられないときは嫌いな部類に入ろうが食べるのがルシエラらしいが、

美味しかったと少し笑って彼女は話したので、串カツとたこ焼きは好きな部類に入ったのだろう。

「食べ物も……高いもんは買えんけどな」

「たこ焼きとかで構わないわよ。あるいは何処か案内してくれれば、大阪城とか」

「見に行ったとか言っとらんかったか」

「あれはあの時、貴方の話に合わせた嘘よ。見学なんて行ってないわ」

言われて白石は気がついたが、ルシエラは大阪には観光に来たわけではなく、暗殺の仕事をするために来たのだ。

大阪城なんて見学に行く暇もなかっただろうし、行く気にもなれなかっただろう。

白石は観光の話をしたときはルシエラが殺し屋だとは知らなかった。

観光に来たとルシエラは嘘をついていたため、白石が出した観光名所を行ったことにしたのだ。

「大阪言っても見取らんところばっかりか」

「通天閣とかは遠くで見たけど」

「それはテレビで見たみたのと同じみたいの意味やな……大阪城、今度行こか」

知られても構わないことだったのでルシエラは話題に出したのだろつ。



「連れていってくれるの？ 行ってみたいわ」

「大阪はおもしろいもんがぎょうさんや」

白石がルシエラに笑いかける。ルシエラが軽く微笑んだが、すぐに気配を感じたのか、気配のした方を向いた。

「蔵リンにルシエラ、ここに居たのね」

「二人とも、これからリハーサルやるから見学に来んか」

「小春さんと一氏さん」

ルシエラが二人の名を呼びながら白石を見上げた。目で名字はこれであっているわよね？ と訴えている。

白石は軽く頷いて合っていると返した。

「リハーサルか。見てみようか」

「それに新聞部の新聞も今日は配布されるのよ。これ、新聞部部长が蔵リンに渡して欲しいって」

「蔵ノ介が小説を書いてるっていう……」

小春が差し出してきた新聞部の新聞を白石はルシエラに渡した。自分は後で見れば良いと想ったからだ。

新聞部は春休みの号外として新聞を出していた。新聞部が出している新聞は壁新聞として大きく張られるのが一枚と配布されるのが百枚ほどだ。部数は時と場合によって変わる。

「どや。俺の小説？」

新聞に目を通したのは三十秒程度だ。ルシエラは新聞から目を離すと白石を見上げた。

「……蔵ノ介は人間が出来ていると想っていたけれど自転車のことと言い、これといい、おかしいところがあるわね」

「新聞もう、読んだんか」

「これぐらいならすぐだけど」

ユウジが驚いているがルシエラは何事もなかったかのように返す。

「どの辺がおかしいんや。ルシエラちゃん、俺の推理小説は読めば毒草の魅力に浸れるんやで」

「全世界の推理小説家に謝りなさい。蔵ノ介」

「面白ければいいのよ。蔵リンの小説は推理小説と言うよりも、困惑をまき散らすギャグ小説なんだから」

「ギャグなら許すわ」

白石としては自分が持っている毒草の知識を使うには推理小説が一番だと書いてみているのだが、ルシエラからはだめ出しされて、小春の補佐を受けていた。白石の小説は毒草の名前が先行して、話はずれまくっていたりするのでルシエラの反応は正しいのだが、白石としては不服だった。

「お嬢様って、新聞を読むのも早いんか」

「情報入れるために読むのだったら……ね。ちゃんと読むと時間がかかるわよ」

「速読って奴ね」

お嬢様とユウジが言ってきてルシエラは返答していたが、お嬢様と新聞を早く読めることについては関係が無いだろうと言う風な表情をしていた。ルシエラは速読も出来るらしい。速読だと情報を入れるためだけに法則性などを理解しながら、書物を早く読むので読むスピードは速いのだが、文章で感動したりすることはない。

「それなら速読せんと読めば俺の小説の素晴らしさが……」

言いかけた白石をルシエラが見上げてきた。どちらにしろ同じよ、と目だけで言っている。

小春が両手を軽く合わせて音を立てた。

「とりあえず、四天宝寺華月へ行きましょう。軽音楽部がまずリハ―サルをしているわ」

軽音楽部はいくつかのグループに分かれてバンドを組んでいる。

「謙也がドラム叩いとるで」

「ドラムとか出来るのね」

（こうなったらルシエラちゃんが認めるみたいな毒草小説を、ルシエラちゃんでも知らんような毒草使えば感動するはずや）

小説のことを頭から追いだして小春とユウジと四天宝寺華月へ行こうとしているルシエラの背中を眺めながら、白石は決意する。しかしその決意はかなり間違っていた。

「四天宝寺ってスポーツが強いよね」

「セパタクロー部とかも強いぞ。たまにバレーボール部と争つとるけど」

「ルシエラは文化部は何に入るつもりなのかしら」

「まだ決めていなくて」

「お笑い研究部とか落語研究部とかもあるぞ」

ルシエラは折りたたんだ新聞を鞆に入れていた。

入学してからの話になるが四天宝寺の運動部と文化部、どちらも一つずつ入らなければいけないというルールにより、彼女は文化部にも入らなければならぬ。

「他にはどんな部活があるの？」

「文芸部に新聞部、演劇部に軽音楽部に、美術部に映画部、仏閣愛好会にアプリケ部に謀報部ね」

「仏閣愛好会は師範さんが入っていきそうね。アプリケ部って……」

微笑みながら言うルシエラではあるが白石は表情から、困惑がほんの少しだけ込められていることに気がついた。

注意深く観察しつつ、ルシエラの素を知っていないと分からない反応だ。

師範は石田銀のことであり、ルシエラの推測通りに彼は仏閣愛好会に入っている。

「手芸部のことや。でもたまたまに運動部の部室に押し入ってアップリケをユニフォームに縫うって活動をしとる」

「……その活動はいらないと想うわ……手芸ならやってるけど」

白石が伝えるとルシエラは無表情で言っていた。

「どんなものを作ったりしていたの？」

「白い服とか、小物とか、編み物とかもしていたわ」

（まさかあの白ゴス服、手作りやったんか……！？）

かつて自分に預けられた白色のゴシッククロリータ服、あれはどうやらルシエラの手作りの品だったらしい。

心中で白石は驚愕する。彼は小春とユウジとルシエラの会話を聞きつつ、黙っている。

「ユウ君と同じぐらいに器用なのね。ユウ君も小物作りが得意なのよ」

「物まねも得意やで！ 漫才は期待しとってや。イタリア人も笑わせるぞ」

会話をしていると四天宝寺華月前に着く。小春とユウジは先に行

っている」と白石とルシエラと別れた。

「黙っていたけれど……小説の出来が悪いのは否定しないわよ」

「否定せんのか。……白いあのゴシッククロリータも自分で作っとつたんかなって」

「……悪い？ あの服は特別な布を使っているから装備品としても良いのよ」

手作りだったらしい。買い物時にミシンも買っていたので、また作るつもりなのだろう。

特別な布というのはルシエラの九番目の血に反応して、力の補助をしてくれる布だとルシエラは説明した。

「防御は……」

「避けたり狂気の血の再生能力を使用するのよ……再生能力は自動で出るけど」

白いゴシッククロリータには防御力などはない。攻撃が来たら回避するか、当たったとしても狂気の血が持つ再生能力を使用すると言うが、再生能力は瀕死の状態ではないと発動しない。

「それやったら……ジャージとかで戦った方がええ気がするで。戦いはあかんが……自動回復とかも他に便利な無いか」

「デューも私も回復は出来るけど、時間かかるわね。自動回復もあるんだけど、五番目の血とかになるし」

「五番目……」

「熱操作」

試しに聞いてみるとルシエラは答えてくれた。

血によって出来ることは大幅に違ってくる。五番目の血の能力は熱操作であり、超高温と超低温、或いは一方だけを操作することが出来るようになる血だ。この場合での回復は熱で傷を塞いだり体力を回復する。

「人間ガスレンジに人間冷蔵庫能力か」

「日常生活に便利な血ならデューなんだけど、八番目の血とかも便利ね。これは天才になれる血で……」

ディオは六番目の血と十一番目の血、電撃精製と物質精製の能力を持っている。

八番目の血は覚醒すれば脳内に神経ネットワークのようなものが形成され、人間コンピュータのようになり、何でもこなせる天才になれるとルシエラは言う。

「小春も頭はええんやけどそれよりも頭良くなるんか」

「どれぐらい頭がいいの」

「IQは二百やで」

IQは知能指数だ。小春はIQが二百なので非常に頭が良いと言うことになる。某探偵の孫がIQが百八十なのでそれよりも二十は高い。

「補佐に一人、頭がいい人が居てくれると助かるわよね。小春さん、補佐が得意そうだし」

話している間に判断したのだろう。

「頭いい奴の頭ってどうなっとるんやろうな」

「八番目の血だと解剖してみたら脳の神経回路、ニューロンが非常に複雑になっていったって」

「……解剖……」

「狂気の血は引いて覚醒すると身体の機能が変わるとかそんなのばかりだから」

白石が顔をしかめたのは解剖と言ったときである。ルシエラも体内に薬物精製プラントがあると聞いていた。

「ディオも体内に発電細胞が出来たと話していた。一般人とは身体の機能が違う。そのことを呟いたルシエラは本人にとっては当然のことを言っているようだったが、少し寂しそうだった。」

「成長とか促されるとかはないんやな」

「……植物なら因子を埋め込んで大きくできるんだけど……蔵ノ介、私が小さいと言ってるのかしら」

「百五十センチはあるんや。昔に流行したミニモ二とかなんて四人全員が百五十センチ以下でな、それに比べたら、ルシエラちゃんは」



大きいで」

見上げてきたルシエラの表情は白石を睨み付けていた。白石は慌ててフォローするのだが、ルシエラは睨んだ表情を変えないままで無言で四天王寺華月へと入っていく。

「怒ったんかな……」

成長に関しては戦闘能力の低下並みに、あるいはそれ以上に気にしているようだ。白石はルシエラを追いかける。少しづつ分かってきた彼女は、想っていた以上に子供っぽいところがあった。

【F i n】

## ニユーロン（後書き）

今回は白石の視点だけで固定しつつ、話を進めてみましたが、財前がオタク設定なのは趣味と言っか……  
近況報告の方で没場面も後は載せておこうかと  
話は地道に進んでいます。多分

## 外伝 価値観の違いと相談と（前書き）

外伝で、白石もヒロインにあたるルシエラも出てきません。読まなくても本編だけで話は通じるようにはなっています。

オリキャラだらけだったり。財前がミク好きになっていたりとかそんなので良ければどうぞ

## 外伝 価値観の違いと相談と

### 【価値観の違いと相談と】

東京都にある聖ルドルフ学院、創立してそろそろ五年になるまだ新しい学校だ。中等部と高等部がある。

テニスや野球に力を入れていて都外から選手を集めているカトリック系の学校だ。

「ゲームの実況は取り終わったし、夜にはウェブラジオでもしてみるかな」

聖ルドルフ学院には寮がある。

中等部の女子寮の一部屋でデスクトップのパソコンの前で呟いたのは、長い髪をシニヨンで纏めた灰色の瞳をした少女だった。

部屋は二人部屋ではあるのだが、相方は実家に帰っていて数日間はずっと帰っていない。

整頓されている部屋にはテニスラケットやテニスバッグも置かれていた。

パソコンの電源を入れて、インターネットを始める。いくつかのソフトを起動させると、反応があった。

「……おや？」

彼女は首を傾げ、その反応にマウスを動かした。

「カレーは美味いよな」

「アンタは昔からカレーが好きよね」

女子寮の一階にあるロビーでは夕食が振る舞われていた。

ロビーには大きなソファアームがいくつかと、大きなテーブル、薄型の液晶テレビが置かれている。

そこに居たのは褐色の肌をした少年や、茶色い髪を二つの太い三つ編みにした眼鏡をかけた少女だ。

二人は三人掛けのソファアームに座り、日本の定番メニューとも言える白いご飯に肉や野菜がカレールーで煮込まれた洋食、カレーライスを食べている。

「寮母さん、すみません。俺たちの分まで」

「管理人には連絡をしておいたし、カレーは作りすぎたから」

恐縮していたのは茶色い髪を刈っている額に傷のある少年だ。一人がけのソファアームに座り、スプーンをカレー皿の上に置いている。

寮母と呼ばれたのは二十代に見える女性であり、黒い長髪をしている。

服の上から赤いチエックのエプロンを着けていた。

「相談事があるとは言え、女子寮に来るのも……」

「……でも、男子寮に行くよりは……私としてはこっちがいい……」

カレーが付かないように丁寧にカレーライスを食べているのは黒い髪をした少年だ。

服の柄が個性的であり、紫色の長袖に赤い薔薇が描かれている。この場にいる者達は彼の服については何も言わないようにしていた。

彼は一人がけのソファアームに座っている。

折りたたみ式の背もたれが着いたパイプ椅子に座り、左手でスプーンを持ってカレールイスを口に運んでいたのは、茶色い髪を背中まで伸ばし、前髪を上げ、額を出している少女だ。

男子寮がテニス部員や野球部員、ごく少数ではあるが事情があり寮暮らしをしている者達が居るのに対し、

女子寮ではほぼテニス部員しか居ない上に殆どの者が実家に帰っているため、静かだ。

「観月、四月からテニス部もそうだけど生徒会も動くのよ。アタシが副会長でアンタが会長」

三つ編みの少女、聖ルドルフ学院女子テニス部副部長にして四月からは生徒会副会長もやる大瀧歌織は、

男子テニス部マネージャーにして四月からは生徒会長もやる観月はじめに言う。

「僕としては副会長がしたかったんですけどね。どうしてこうなってしまったんでしょうか……」

「礼拝堂で懺悔でもする……？」

「したところで……原因は周囲にありますからね」

「頑張れ。観月君。歌織も補佐してあげて」

観月の嘆息を聖ルドルフ学院女子テニス部部长である茜崎聖良は

微笑で受け止めた。

聖良はいつもは無表情ではあるが、時折、笑ったりもする。

「おかわりないのか？」

「赤澤部長、寮に入っていないのに夕食はご馳走になると言うかよく食べるというか」

赤澤は観月や裕太の皿よりも大きい皿にカレーを盛りつけ、それを八割方食べていた。

この中で唯一、赤澤は自宅からルドルフに通っているが良く寮に遊びに来ては食事を取ったりしている。

裕太は言いながらテーブルの上に置いてあるプラスチックの透明なコップに入ったホーリーバジルティを飲みながら、カレーを食べていた。

「裕太君はカレーが嫌い？ 余り進んでないけど……」

「少し、辛くて……カレーは美味しいです」

「アンタは甘党だからね」

寮母が裕太を気遣う。歌織が代わりに答えたが裕太は甘党だ。

裕太以外の者達はカレーの辛さは今の味が丁度良い。

辛さの度合いで言うとカレーは中辛だ。カレーライスは美味しいのだが、裕太は辛味に苦心していた。

空っぽになっている赤澤の皿を寮母がお代わりを入れに持って行く頃、聖良や観月、歌織もカレーを食べきり、裕太もほぼ平らげていた。

「裕太君、先輩達も丁度良かった。相談に乗って欲しいことがあるんだ」

「森村。相談って？」

「食事が終わろうとしていたとき、階段を下りてロビーの方に来たのは森村撫子だった。」

裕太の同級生である。長い髪の毛をシニヨンとバレッタで纏めて、灰色の瞳をしていた。

撫子と裕太は中学一年生で、観月、赤澤、聖良、歌織は中二だ。四月に入れば学年が一年上がる。

「相談ですか？ 撫子」

カレーライスの皿を片付けに行こうしていた観月だが撫子が相談事を持って来たので、そちらの方に興味を引かれる。

撫子が観月の言葉に首肯した。

その様子を見ながら歌織は聖良の分の皿を自分の皿と共に重ねて上に二人分のスプーンを置き、観月に押しつけようとしていた。

寮母が赤澤のお代わりのカレーライスを持って来る。

「ぜんざい君からスカイプで相談を受けたんだけど、私じゃ上手く答えられないんだ」

「どんな相談よ」

「彼、イタリア人から約二万円の初音ミクのフィギュアを買ったのらしいんだが、どうしたらいいのか分からないらしい」

撫子が相談内容を伝えた。



その内容に場の空気が止まる。寮母はカレーの皿を持ったまま立ち尽くしているし、赤澤と観月は困惑し、聖良はお茶を入れたコップを手に持ったまま動かない。歌織は眼を細めていた。

裕太が代表して、撫子に全員が思っていることを伝える。

「森村、一から説明してくれ。意味不明だ」

「……意味不明かな？」

「相談に乗ろうにも乗られないっての。初音ミクのフィギュアは分かるがイタリア人のところとか」

裕太は呆れる。

撫子は左利きであり、左利きの人間は感覚で生活することが多い。何となくで理解してしまつたために彼女の中では、相談内容は分かるのだが、言葉にすると不明瞭となる。特に撫子はその傾向が非常に強い。

左利きはこの場には裕太と聖良と寮母が居るが、彼等でも少ししか話の内容が分からない。

「撫子、部屋のスカイプ、一回きつてきなさい。こっちで繋ぐわ」

「分かりました」

歌織の指示に撫子は従い階段の方へと行く。聖良はコップに入れたホーリーバジルティを飲み干す。

「……ぜんざい君って、ボカロPで撫子のネットのお友達で、歌織とも知り合いだっけ」

「知り合いね。彼、初音ミクが好きなんだけど」

観月に皿を押しつけた歌織はソファから少し離れたところにあるパソコンデスクの方に行き、

置いてあるパソコン本体の電源を入れてモニターの電源も入れた。

ロビーに置いてあるパソコンは共用のパソコンだ。

希望者は自室にパソコンを置いてあるし、撫子もその一人ではあるが、全員で相談が出来るロビーで

聞いた方が良くと歌織が判断した。撫子の部屋に全員で押しかけるわけにもいかない。

「歌うパソコンのソフトだったかな。世の中は発展しているね」

「そうですね。ネットやパソコンの発達は非常に速いです」

寮母が観月の持っている皿を回収する。すみません、と観月が言いながら寮母の言葉に同意した。

ボーカロイドは音声合成技術の一つであり、それを使った関連ソフトのことでもある。歌詞を入力すれば、その歌詞をソフトが歌い上げるのだ。初音ミクはボーカロイドであり、人気はトップクラスである。

テレビでも何度が取り上げられているため、存在は知られていた。

「きつてきました」

「こっちで繋いで。マイクやヘッドセットはある？」

「いいません。文字だけで会話してたので」

戻ってきた撫子はパソコンデスクの椅子に座りスカイプを起動さ

せた。スカイプはインターネット回線を利用した電話だ。

音声の会話の他にも文字で会話も出来る。自分のIDを入れて起動させてから撫子は画面にキーボードで  
「ただいま、と打ち込んだ。少しするとおかえりと言う文字が返ってくる。」

「……詳しく事情を教えて……とか打って、教えて欲しいかも」

「イタリア人と初音ミクが混ざり合いませんしね」

ソファーに座っていた聖良と側に立っている裕太が言う。撫子の背後に歌織が行き、移動させたパイプ椅子に座る。

赤澤はカレーを食べ続けていて、観月はホーリーバジルティを飲んで  
「んでいた。」

詳しく事情を教えて欲しいと撫子はメッセージを入れた。

「撫子ちゃんは、夕飯は？」

「相談が一通り終わったら食べます」

寮の人数が少ないこともあってか、夕飯は希望の時間に出して貰えていた。撫子は相談を優先する。

スピーカーから音が鳴った。

「ぜんざいだっけ。仲が良いんだな」

「いつか、会ってみたくて」

「返事が来たわね。事の始まりは俺の所のテニス部部长がイタリア人の女の子を助けたのが始まりだった……」

「……大瀧さん、撫子、茜崎さんと僕も意見は同じです。細かく相手に聞いて下さいね」

赤澤に言われ、撫子が呟く。

ぜんざいというのは本名ではなく、インターネット上で名乗るハンドルネームだ。ボーカロイドを使い、曲を作っている。

撫子は彼とネットで知り合った。

歌織が文章を全員に聞こえるように文章を読み上げていく。彼はテニス部に所属をしているが、テニス部の部長が、道ばたに倒れているイタリア人の女の子を助けたという。

彼女は病弱で重度の貧血を起こしたとかで、数日間、テニス部の先輩の家族がやっている病院に入院していたが、入院中に日本に住んでみたいと想うようになったらしい。

「イタリア人ならイタリア語だろう？ その子と意思疎通が出来るのかよ」

「彼女……日本語が話せるみたいだ。それも日本人並みに上手らしい」

「森村も言語は英語とかドイツ語とか日本語とか出来たよな」

「出来ませんが、イタリア語は全然分かりません」

イタリア人はイタリア語を話す。全員がそうではないだろうが、フランス人ならばフランス語、スペイン人ならスペイン語とその国の主要言語は話せる。しかし、ここは日本だ。イタリア語が出来る日本人は珍しい。

撫子は帰国子女であり、英語やフランス語も出来るが、イタリア

語は出来ない。話ながら撫子はキーボードで、ぜんざいに対するメッセージを打っていく。

返事はすぐに来た。

一人で日本に住むと言ったらしい女の子を心配し、スピードスターの先輩の家が受け入れてくれた。

ホームステイをすることになり、ぜんざいは家具や家電が揃えられる店を探して欲しいと頼まれて、インターネットで調べて一日と半分使い、買い込んだ。

女の子はぜんざい達の通う学校にも四月から行くことになり、テニス部のマネージャーにもなると言う。

「ぜんざい君、どこのひと？」

「大阪？ って聞いたことがあります。連想するのは……人工衛星からビーム打ったり、冬に咲く桜並木とか？」

インターネット上ではプライバシーは伏せておくべきだ。仲良くなっている度合いにも寄るが、相手によっては、個人情報が悪用されたりしてしまう。

大阪というと撫子の中のイメージは読んだ小説から連想されるものの他には

蟹や小太鼓を叩いている眼鏡人形とか、騒がしそうなところとか、無い。

他のメンバーはたこ焼きやお好み焼きや大阪城など撫子よりはまだ大阪のイメージを持っていた。

「その大阪は違うから」

「女の子はマネージャーの仕事をしていて、俺は部活をしていて午前中には部活が終わって……ここからか」

裕太が撫子にツッコミを入れる。

歌織はまた読み上げた。部活は午前中に終わり、ぜんざいは帰ろうとしていたらしいが、そこに女の子が来てラッピングされた大きな箱を渡したという。

開けてみた彼が見たのは六分の一サイズの初音ミクフィギュアだった。

箱を落としそうになったのが堪えたらしい。驚く財前に彼女は買い物の際にぜんざいが初音ミクというのを見ていて、買い物を手伝ってくれた礼にと初音ミクの物を探していたらフィギュアがあったので買ったという。

未塗装のものだったので組み立てて塗装をして貰ったりしたそう  
だ。

値段はおよそ二万円、四捨五入で切り上げをしたので二万円となっているが、切り上げを止めても、

これを買うには諭吉さんが二枚も居る。女の子はあっさり出したらしい。

「お嬢様なんだな。二万円だぞ……二万もあれば、懐が助かるぞ！  
？ 大金だ」

「二万円は高いですね……」

「それより店を調べて買い物に付き合ってくれただけで二万のミクは……驚く……」

「イタリア人、凄いですよ」

相談内容のイタリア人が何か凄いと言うのが彼等の認識となっていた。まとめてみれば日本人並みに日本語が上手く、買い物をちょ

つと手伝うだけで約二万円の初音ミクのフィギュアをくれる。  
何かが飛んでいた。

「景吾もそこまでではないよ……」

金持ちの幼なじみを思い浮かべながら撫子は驚いたことをぜんざいに伝えた。そこから返事が来る。

初音ミクというのが良く分からなかったから商店街を探してたまたまみつけた初音ミクフィギュアを買ったらしい。

貰った彼は部長にフィギュアのことは伏せて相談し、部長が彼女に言ってくれることになった。

ぜんざいはフィギュアを持って帰宅はしたが、気が気ではなかった。

「ミクのフィギュアもまだ安いのはあるんだけど八千円とか」

「八千円でも……フィギュアって高いよね。好きな人は買えるんだろうけど」

撫子の後ろから歌織がキーボードを叩いて、タブブラウザを呼びだしてからフィギュアのサイトを出して見せた。

聖良や観月も後ろから覗き込む。三千円ほどのフィギュアもあるが良いフィギュアだと高くなっている。

「でも、大瀧先輩、約二万円のフィギュアも八千円のフィギュアも買い物に付き合ってくれた礼としては高いですよ」

「せめて五百円のねんぷちかしら」

「ねんぷちでも……高いんじゃないでしょうか。彼からしてみれば

大したことはしてないんです」

裕太が言ったことは尤もであり、歌織は値段を下げては見たが観月が否定する。

”大したことはしていないのに高いフィギュアを買ってしまった”と言っのがぜんざいの悩みなのだ。

ねんぷちはねんどろいど・ぷちの略であり中学生の小遣いでも手軽に買える方のフィギュアだ。

「……分かるかも知れない。私の知り合いにも似たような人が居たし」

「寮母さんの知り合いに？」

プラスチックのコップにホーリーバジルティを入れて、全員に配りながら寮母が話に加わる。

昔のことを懐かしんでいる表情を浮かべていた。

「あの人もお金持ちで、書類をついでに手伝ったら高級なお菓子をくれて、味わって食べた」

「菓子なら良いけどフィギュアは食えないからな」

「その人は天然だし言っても仕方がないと私と……管理人は黙っておいたけどさ」

「……食べて処分も出来ないからね……フィギュア……重いね」

「茜崎さん、赤澤君のネタを使わなくても良いですから」



撫子は寮母や赤澤、聖良や観月の会話を聞くことで一人では分からなかった相談事の問題点が分かってきた。

ぜんざいにとってフィギュアは重い。

お礼が十倍以上で帰ってきていて、嬉しいを通り越して、プレッシャーになっている。

「フィギュア、その人に返して、こんなにお礼をしなくても良いと教えた方が良い気がする」

「そうだよな……黙っておいたりすると……そのヒトも学校通うんだろ。ぎくしゃくした付き合いになるだろうから」

「日本語が分かるなら意思疎通が出来るだろうし、話せば分かるだろう」

一年生コンビは先輩達や寮母の会話を聞いて、解決案を出した。

フィギュアはそのイタリア人の女の子に返し、やったことにしては高いなどと理由を説明するべきである。

出した解決案を撫子はスクイップのメッセージ覧にキーボードで打って返信した。

「ついでに初音ミクやボーカロイドの歌を聴かせてみると良いかも。上手くいけば同志よ」

「歌は聞いてみないと、解らないしね。ボカロは好み別れるけど」

歌織やボーカロイドで趣味で曲を作っているし、聖良は動画鑑賞が好きだ。

ボーカロイドを使った歌というのは機械音声のようだと倦厭する人も居るし好みがあるが、聞かなければまず分らない。

「イタリア人だからボーカロイドの歌とか聞いたこと無いだろうしな」

「恐らくは、そうでしょうね」

ぜんざいからの返事を見ながら撫子は他の案も打つ。ぜんざいの方は撫子達の案には賛成であり、そうしてみるっすわ、と言っている。

「ぜんざいの嫁のミクからにしてルカとかは止めるべきね。オススメ歌はいくつかチョイスするわ」

「自分の歌を選ぶとか？」

「そんなことしないわよ」

ルカこと巡音ルカはボーカロイドの一種だ。ボーカロイドも多種多様であるが、まずはミクからにするべきではある。

歌織もぜんざいとは会話をしたことがあるので彼がミクを俺の嫁宣言していることは知っていた。

俺の嫁というのは好きという言葉の表現の一つである。

「森村、もう一つ、アドバイスしておけ。帰国子女って手間がかかるところがあるから、見ておけて」

「裕太君……何だかそれはとても実感のある言葉のような気がするんだが……」

「実感があるから言ってるんだよ」

裕太が軽く青筋を立てていた。

撫子は帰国子女だ。日本で暮らした時間よりもイギリスで暮らした時間の方が長い。英語や他の言語が話せるのも、イギリス時代の影響だ。

ウェブラジオをしている撫子だが元は歌織が日本語が苦手だった撫子に日本語を使わせようとゲーム実況などをやらせたのが最初だ。裕太もゲーム実況を手伝ったりしているが、彼は撫子とまたまクラスが一緒になってしまったり、テニス部に所属しているからと、ロビーにいる先輩達から彼女の補佐、あるいは保護者の役割を押しつけられた。

彼女は強い方向音痴であり、目的地に向かっていているつもりでも違う方向に行ってしまうことが多々あるのだ。

「おおきに。助かったっすわ……解決にはなつたみたいね」

「ありがとうございます。先輩達、裕太君に寮母さんも」

「イタリア人はさすがに……撫子だけでは追えなかつたでしょうからね」

パソコンの画面から目を離し、上半身だけ振り向いた撫子は礼を言っていた。観月が微笑む。

誰もが撫子の相談内容に困ったが、ひとまず悩みは解決したようだ。歌織も画面から目を離す。

「俺的にはイタリア人について気になるんだが、他にも情報とか聞けないのか？」

「聞いてみます」

赤澤もそうだがロビーの面々はイタリア人について気になっている。

「大阪のノリにはついて行くのが辛そうだった。俺的にはその気持ち分かる……」

「……大阪人なのか？」

「ひとまとめにしても……大阪人とか……細かくしたら分かれるよ？」

歌織が読む。

赤澤は大阪人が大阪のノリに着いていけないのかと疑問に想っていたが、聖良は補足を入れる。

大阪人も関西弁を話すがノリが良くない者も居る。テンプレートはこういった傾向が多いと言うだけであり、全てではない。

「補佐の話題引つ張り出してさ。仲良くなれば逆玉狙えるかもとかアドバイス」

撫子の後ろで歌織が手を伸ばして撫子以上のスピードでキーボードを打ち、撫子のような口調で返信した。

「キーボードを打つのが早いですよね。大瀧先輩」

「裕太君も練習すればもつと早く打てるようになりますよ」

キーボードを見ずに文字を打つブラインドタッチだが、一番早く打てるのが歌織だ。次が観月になる。

他はそこそこのスピードだ。

「逆玉は狙う気はないっすわ。確かに家は出なあかんけど……」

「次男坊とかですか？」

「お兄さんにお嫁さんが居て甥っ子がいるんだって。同居中」

「サザエさんみたいだな。あれは婿養子だけど」

「赤澤、サザエさんは婿養子じゃなくて嫁の家に同居してるだけです」

撫子はぜんざいとたまに会話をするため彼の事情もいくつか知っていた。彼は両親と兄、義姉と甥と同居していて肩身が狭いとか、最近では余り両親とは会話をしなくなったなど聞いている。

「……ぜんざい君もよく知らないみたいだね……彼女についてはスピードスターの先輩や部長なら分かるかもとか」

「いっそ……想像するとか？」

ぜんざいも余りイタリア人のお嬢様については知らないようだ。聖良の発言にロビーの学生達は考え込む。

「イタリア人はトマトとパスタ食べてるんだろ。ピザとか、コーヒが好きとか聞いた」

「食べ物ばかりですね。赤澤君」

イタリア人で思い浮かぶのは何かと云うことに関しては赤澤は食べ物ばかりだった。

ピザやパスタはイタリア全土で共通であると言えばあるのだが、トマトはイタリアの地方による。

ネットやロビーの会話は想像してみるイタリア人のお嬢様についての話題となっていた。

「お嬢様なら紅茶好きじゃないんですか？」

「ピアノとかヴァイオリンとか出来そう」

「……クリスチャン、とか」

「甘いものが好きだったりすると良い気がする」

「みんな、それ自分の好きなものと言っているだけで……お嬢様なら愛想笑いは出来るだろうな」

各々が抱いているお嬢様のイメージが言われていき、撫子はそれを上手く纏めながらぜんざいに送る。

ぜんざいの方も、ひらひらの服とか好きそうとか打たれている。好き勝手に盛り上がっていた。

話し込んでいると、聖良がロビーにある大きな丸い壁掛け時計を見上げた。

「撫子……ご飯……食べちゃった方が良い」

「確かに。私、話し続けると食べなさそうだから、ここでまたきますね」

聖良に言われて、撫子は食事をするので一時落ちるとメッセージを打ち、ぜんざいの返事を見てからスカイプをきった。

「俺等も帰るか。人数が少ないとは言え、女子寮に長居すると不味いし」

「九時前には帰るつもりでしたよ。規則がありますからね」

「お邪魔しました」

赤澤が立ち上がる。

男性陣も相談が一段落したので帰ることにした。寮では規則上、夜九時までは教員や寮管理者の付き添いなく、出歩ける。規則は守るところは守っていた。

「管理人によろしく言っておいて。其れと明日は入寮者が来るから出かけられないとも伝えて」

「入寮者？ 次期一年生か？」

「赤澤君達と同じで、次期三年生、九州から来るの」

寮の細々としたことを片付けていた寮母が観月や裕太に伝言を託す。女子寮には明日には入寮者が来ると言うことを赤澤は知らなかった。管理人は男子寮の管理者のことであり寮母の友人だ。

「すぐにレギュラーにも出来そうだから、戦力補強になるわ」

「どんな人だろう」

「強いよ……」

歌織はレギュラーの補強を望んでいた。撫子も話は聞いていたがやってくる先輩がどんな人かは知らない。

聖良はその人物を知っているらしく小さな声で呟いた。

「九州というと男子テニスでは……強い奴が居たな。名前忘れたが」

「忘れないで下さいよ」

「全く、赤澤は……」

赤澤の曖昧な言葉では誰のことを指し示しているか不明だ。裕太と観月がそれぞれ言う。

その様子を見て寮母は穏やかに笑っていた。

同時刻、ディオニージ・ドウリンダナは日本の関東地方にあるホテルの一室でベッドに横になっていた。

シングルサイズのベッドであり、部屋はビジネスホテルだ。安眠するための設備が揃っていると評判のホテルで、値段も手頃であったため、部屋を借りた。

「ヴァルは日本に来たなら顔出せって言うし、ユースはファルソの処理は終わったって連絡くれたし、

……クラウは高校生？ になるみたいだし、ダンスも学年が上がるし、クレールも元気そうだし、

アスカは未だに行方不明だし、あの女は……上手くやってるはずだけど……」



次々と最初の組織にいた頃の同胞を思い浮かべながらディオは様子を口ずさむ。

安否が分かっている剣王は、ほぼ日本にいた。唯一、ユースはイタリアにいるがたまに彼女も日本にやってくる。最年長のヴァルからは顔を見せるとは言われているが、見せる暇は無さそうだった。

ごろ寝をしていると、携帯電話が鳴る。ディオは携帯電話を取り出すとボタンを押した。

『ディオ、血は落ち着いてきたか』

「落ち着いてきてるよ。雇い主」

数時間前まで狂気の血や持って来たアイテムやらを駆使して戦闘をしていた。

雇い主からの仕事なのでディオはこなしてはいたが、この仕事が終わった後に追加で言われたことにディオは未だに戸惑っている。

『玖月機関も人手不足だ。手を貸しておけば貸しが作られるし、玖月の研究は私の研究にも役立つ』

「匣とかも作ってるよね……マルチだよね」

『時間はいくつあっても足りないよ』

”雇い主”の時間は大量にあるというのにそれでも足りないと言っている。匣というのはマフィア界で最近出てきた匣兵器のことだ。ディオもモニターとしていくつが使ったことがある。

通信で二人で会話をしているのに誰も会話に口を挟まない。ディオはまあいいかと心中で片付ける。

「おれ、年齢的には十七歳のはずなんだけど」

『学校には通ったことがないから良いだろう。私としても面白いデータが取れる』

はずと言うのが着いているのはディオも自分の正確な年齢が分かっていないからだ。あの組織の生き残りで正確な年齢が分かっている方が少ない。他はおよその換算だ。

「明日にはアイツと待ち合わせして、アイツが通ってる中等部に行く……おれが居なくても平気？」

『手札は他にもある。私は私の身ぐらい自分で守れる』

「……気をつけてね……雇い主。寝るので電話は終わるよ」

ディオの”雇い主”はマフィア界ではマッドサイエンティストとして名が通っているが其れよりも有名な称号がある。

アルコバレーノ、マフィア界最強と言われている七人の赤ん坊の一人がディオの”雇い主”だ。

暗殺されかけたのも一度や二度ではない。ディオもアルコバレーノについては少ししか知らない。

布団に潜り込む。

血は落ち着いては来たが今日も血を酷使した。傷は自力で治したが、眠って精神も回復させておくべきだった。

「でもまさかおれも、学校に通うことになるなんて」

決定事項となってしまうことを言うと、彼は意識を深く落とした。

財前光はインターネットを一時的に休み、パソコンから離れる。

初音ミクのフィギュアは箱に入ったままだ。母親は部屋に入らせないようになっているし、入ってくるとしたら、兄ぐらいたが、兄が入ってきそうになったらフィギュアは隠せばいい。

彼が初音ミクが好きなことを兄は知っているが、問題はフィギュアの値段だ。

発見されたりすれば問い詰められるし、問い詰められて上手くかわせるかというところ今回は自信がない。

「彼女に相談して良かった……悩み相談とかもたまにやってみたいやっただけかもしれないけど、想て」

書くことを自分で選ぶのがネットであり、発言に責任を持たなければならぬのもネットだ。

ミクのフィギュアを買ったことはブログにも書かず、心にしまい、白石にだけ話し、

他にも相談出来る相手は居ないから探したところ、彼女がスカイプにログインしていたので相談をもちかけた。

お嬢様なので世間と常識がずれているかも知れないと財前は思う。謙也が話していたが、病弱だったので勉強も屋敷に家庭教師を呼んでしていたらしいし、

外にも余り出ずにずっと過ごしてきたらしい。

彼女の世間は屋敷の中であるが今の過ごさなければならぬ世間は大阪になる。

「でも、うちの学校もずれとるし」

四天宝寺が世間一般からずれているというのは通ってみれば分かることだし、

行われている学校行事を話題に出せば人によってはすぐに四天宝寺中学校と分かってしまう。

それぐらいに個性があるのだ。

明日も学校へ行き、部活をする。

その前にウェブラジオを彼女がやるみたいなので、それを聴いてからだ。

部活に影響が出ない程度に夜更かしをしたい。

心のつかえが取れた財前は作りかけの曲を作ろうとソフトを起動させようとしたが、ブログを更新しておこうと予定を変更してブログを書くためにサイトにアクセスする。

パソコンで書くほかに、携帯電話で細かく……むしろ思いついたらすぐにデータを送れる携帯電話の方で、ブログを書いているのだが……更新していた。

明日のことを考えながら今日のことを記録する。明日は教えて貰った対策を実行する予定だった。

九州地方にある熊本県にある一軒家で、ささやかなパーティが開かれていた。

四人がけのテーブルの上には買ってきたオードブルやサンドウィッチが並んでいる。

「兄さん、大阪に行く準備は出来てる？」

「信用無いな。飛駿、後は俺が行くだけったい」

「今日のうちに千里の分も必要な荷物は全て宅配便で送ったわ」

「真鶴姉ちゃんはすっかりしとるっちゃ」

左手で箸を持ち、馬刺しを食べている少年と彼よりも同じように馬刺しを食べている背が二十センチ以上は高い青年、コップにジュースをついでいる背の高い少女と、肌が日焼けしている少女、千歳家の子供達は子供だけでお別れパーティをしていた。明日には年長組に入る千歳千里と千歳真鶴が熊本を離れるからだ。

千歳飛駿は自分の分の馬刺しを小皿に避けてから、千歳ミュキに姉が入れたジュースのコップを渡した。

「飛駿、ミュキのことは頼む。俺の分までミュキを守って欲しいばい」

「シスコンだよね」

「ミュキについてもだゆるわね……私は貴方がもだゆるけど、来年から私達、高校生よ」

もだゆるは熊本弁で言う心配の意味である。千歳は苦笑を笑顔で掻き消しながら従妹に言う。

「それなら真鶴も一緒に四天宝寺に来れば良かったのに」

「ノリがあいそうになかったの」

千歳と真鶴は同じ中学二年生で、四月には中学三年生になるが双子ではない。誕生日が一日違いの従兄弟だ。

真鶴と飛駿、千歳とミュキがそれぞれ姉弟で兄妹だが、小さい頃から皆で共に過ごしてきた。

飛駿は相変わらずの姉と従兄を眺める。

従兄は進路の話をするのは苦手であるが、来年は彼も高校生だ。進路の話はついて回る。

実姉については心配していない。小さい頃からあの放浪癖がある奔放的な従兄の補佐をしてきたのだ。

「出来る限り見るようにはするけど、俺も今年から中学生だし……学ランはお古だし」

「制服って高いし、千里のを着れば買わなくて良いから経済的」

今年から飛駿も中学一年生だ。千歳や真鶴が通っていた獅子楽中に通う。

千歳が昔に着ていた学ランを……中学一年生の頃に買った学ランだ……着ることになる。

「飛兄ちゃんはテニス部には入る？」

「陶芸していたいけど、見てからだな。兄さん達が抜けたテニス部なんて……」

「お前には負担かけるかも知れん。俺も真鶴もテニス部だと有名っばいから」

有名っばいどころか千歳は九州二翼と呼ばれた九州では敵無しとされている強い選手の片割れだし、真鶴も九州内ではトップクラスの実力を持っている。

「去年はベスト四にはなっただけ……今年も全国に行けるかも不明ね」

この場に居る全員の共通点の一つはテニスをしていると言うことだ。

兄さん達と複数形で行ったのは千歳以外にももう一人テニス部を抜けた者が居るからだ。全員が知っているし、付き合いがあった。

真鶴の言うことは的確ではある。千歳ももう一人も抜けたテニス部は戦力が不足している。

「四天宝寺って、去年のベスト四だったような……」

飛駿の呟きに頷いたのは真鶴だ。

「残りの二つは立海、牧ノ藤ね。立海が二連覇したの」

「牧ノ藤の方が四天宝寺よりも強いっちゃ？」

「去年の西日本大会も見たけれど……四天宝寺の方が強かったわね」

千歳が四天宝寺に転入を決めたのはもっと上のレベルにいけるからであると飛駿やミュキは聞いている。

四天宝寺に行くことにしても西日本大会が一つのきっかけであるらしい。

「明日はミュキと見送りに行くから、父さん達やおじさん達は分からないけど」

「俺は大阪で真鶴は東京。しばらく離ればなれしたい。連絡はする」と

「人様に迷惑をかけちゃ駄目よ。千里」

「兄ちゃんと真鶴姉ちゃんのところ、遊びにいくつちゃ！」

明日は新幹線で千歳も真鶴も新天地へと行く。しばらくの別れだ。

明日の出発に影響がない程度に

宴は続いていた。

【F.i.c】



## 外伝 価値観の違いと相談と（後書き）

ルドルフのオリキャラの方がルシエラよりもずっと前から出来ていたりとかで、会話だらけというかこんな繋がりもあるんだみたく話は書きたくて書いてみたり

千歳家は熊本弁変換辞書が昔使っていたのが使用不可能になっていたりして会話を書くのは大変だったりとか

観月が次期生徒会長になっているのは寮生管理委員会とか決まってなかったぐらいに生徒会長にしたので  
未だに生徒会長です

それとリボンとクロスしているこのテニ王の世界観ですが、リボーンの方はヴァリアー編までは本誌と同じで、そこからは独自の時間を進んでいるので四月になったら綱吉達は中三で、匣兵器とかも

未来編はしてないので技術とかも進んでないような感じですよ。  
綱吉達は出てくるかは未定だったり

## 登場人物紹介（前書き）

外伝で色々出したりしたのもあつたので登場人物紹介でも用語集とかは……要望とかあれば。

紹介が短い人も居ますが書くことがなかったとかもあつたり

## 登場人物紹介

本編登場キャラ

ルシエラ・ガートルード・ジンガレットイ

17歳（本来は）B型、1月27日生まれ  
身長は160cmだったが152cmに縮んだ。右利き

金髪に紫色の瞳をしている。

本名はルシエラ・フラガラツハというイタリア出身の殺し屋兼復讐屋。

白いゴシッククロリータが好き。大阪には仕事で来たが、仕事の時に血の力を盗られ、身体が縮み、戦闘能力も落ちる。逃亡しようとして倒れていたところを白石に助けられた。

物心ついたときからある組織で育てられてそこで能力を植え付けられたり戦闘能力をつけられる。組織が壊滅してから殺し屋兼復讐屋を始めた。

そこで与えられたコードネームが剣王が4、フラガラツハであり、イタリアではルシエラ・フラガラツハと名乗っている。本人はこちらを本名と思っっている。

ガートルード・ジンガレットイの方はイタリア貴族としての名前。

肉弾戦もこなせるが戦闘能力は以前よりも落ちてしまっている。

異能力として自分の身体で薬品を精製したり、物に因子を埋め込んだり

自分が領域と認識した場所を自在に操作出来るがこれも精度が落ちている。

日本語は最初の組織で教わった。

忍足謙也の家にホームステイ（あるいは居候）をすることとなり、四天寺中男子テニス部のマネージャーもすることとなった。周囲からは病弱と思われているが本人は健康体。

ディオニージ・ドウリンダナ

17歳、A型、6月11日生まれ

身長は172cm、右利き

グレイジュの髪に同じ色の瞳をしている。

ルシエラが最初に居た組織の同僚であり、彼女のことをアンと呼ぶ組織が壊滅してからはある人物に拾われて雇われながら様々なことをこなしている。

ある人物のことは雇い主と呼んでいる。

電撃精製と物質精製の特技を持っていて、武器を精製して電撃を載せて打ち込むことを得意としているがそれ以外の手札も持っている。

物質を折りたたむことも特技の一つであり、物に触れて力を送り込めば銀色のカード上に

出来る。戻したりすることも自由自在。

一番最初の組織で与えられたコードネームは剣王が8、デュランダール。

名字にしているドウリンダナはデュランダルのイタリア語読み。

## 外伝登場キャラ

もりむらなでしこ  
森村撫子

13歳、AB型、9月30日生まれ  
身長は160cm、左利き

ロイヤルブラウンの髪に灰色の瞳をしている  
聖ルドルフ学院の生徒でテニス部の補強組。独特の口調で喋る。強い方向音痴であり、地図がないと目的地には辿り着けない。慣れればどうにか辿り着ける。

イギリスからの帰国子女であり、同じイギリスに住んでいた某学校の部長とは幼なじみではあるが最近は疎遠。英語の他にもドイツ語なども話せるが日本語は苦手。  
財前とはネット上の知り合いでありぜんざい君と呼んでいるが、財前の名前は知らない。  
テニスプレイヤー。

おおたきかおり  
大瀧歌織

14歳、O型、11月23日生まれ  
身長は165cm、右利き

アーモンドブラウンの髪の毛をしていて二本の三つ編みにしている。視力は悪い。聖ルドルフ学院の生徒でテニス部の生え抜き組ではあるが事情により

寮で暮らしている。テニス部副部長、赤澤吉朗の幼なじみ。

パソコンやネット関係には非常に詳しい。ボーカロイドも扱える。曲も何曲か投稿している。

まとめ役になりやすいのだが、サブポジションが好きらしく、部長の座は聖良に譲った。

観月に物をハッキリ言える一人。

あかねさきひ  
茜崎聖良

14歳、O型、5月22日生まれ

身長は157cm、左利き

濃い茶色の髪の毛を背中辺りまで伸ばして額を出している。

聖ルドルフ学院の生徒でテニス部所属の補強組。女子テニス部の部長でもある。

歌織に部長を譲られた。

物静かで余り喋らない。クリスチャン。

テニス部はテニスをするため、各地から集まったりする者が多数でクリスチャンは少ないため、

数少ないクリスチャンとも言われている。

ちとせまじ  
千歳真鶴

14歳、B型、1月1日生まれ  
身長は170cm、左利き

黒髪黒目で髪の毛は腰辺りまで伸びている。  
九州、獅子楽中の出身ではあるが獅子楽中を出て東京でテニスを  
するらしい。

千歳千里の従妹であり幼なじみ。放浪癖のある千歳の補佐をして  
いて、ミユキのことも  
実の妹のように可愛がっている。

ちとせひしぎん  
千歳飛駿

12歳、A型、3月17日生まれ  
左利き

千歳真鶴の弟であり、千里とミユキの従兄弟でもある。  
熊本弁は余り使わない。テニスはしているが陶芸も好きではある。

## 登場人物紹介（後書き）

色々また出たら増やしたりする予定

……気付いたらこれ本編じゃなかったな



ロレンツォおじぎり 前編（前書き）

この話の第一部は春休みに四天宝寺の面子が全員揃うまでなんですがいっ揃うやら……

## コンビニおにぎり 前編

【コンビニおにぎり】

窓がない部屋に二人の少女はいた。

蛍光灯の灯りが部屋を照らし、壁も白く、天井も白い。

病室を思わせる部屋の床には写真集や絵本がページを開いた状態で置かれている。

それ以外には部屋には簡素なベッドぐらいしか置かれていない。

少女は二人とも金髪だったが、髪を弄っている方の少女の瞳は紫色で弄られている少女の瞳は銀色だ。

銀色の瞳の少女は大きめの丸い手鏡を持っている。二人の顔が映っていた。

「出来たわよ。アスカ」

「ありがとうございます。姉さん」

ルシエラ・フラガラツハはアスカと呼んだ少女の髪の毛から手を放した。

アスカの髪の毛は右頬にかかる髪が二つ編みに編まれていた。先端はゴム紐で留まっている。

「訓練はしばらく無いみたいだから、ゆっくり出来るわね」

「姉さん、仕事は」

「分からないわ。他のみんなは？」

アスカは訓練ばかりであり仕事はルシエラの記憶している限りではしていない。

訓練とは言え、怪物化した者を殺したりはしているはずだ。アスカがルシエラの方を見て表情を曇らせる。

仕事になれば大人か、年齢が上の者が呼びに来る。

「顔は見てませんが、仕事や訓練って聞いてます」

「いつものことか……」

自分達がやっていることと言えば上が必要だと思ったことを学ばされていたり、実験や訓練だ。

二人が話していると、ドアがノックされる。

「アン。居るかい？」

「……ヴァル兄さん……」

「しばらくしたら、また帰ってくるから」

か細い声でアスカがドアの向こうにいる者の名を呼んだ。

気遣いながらルシエラはアスカに手を振ると、ドアの方まで近付いてからドアを開ける。

見上げると、黒髪と青色の瞳があった。

ルシエラよりも五歳以上は年上の青年が立っている。見上げることを止めてルシエラは廊下に出てドアを閉じた。

青年の方を向く。

「仕事だよ。言わなくても分かっているだろうけど」

「私と、ヴァルだけ？」

「他は転戦してるよ。今、居るのは僕たちとアスカ、レーヴァーグらだね」

アスカについて触れないのは彼女はまだ実験が上手くいってないからだ。戦力としては数えられていない。

戦闘能力は付いているが、上が望んでいるところまでアスカは達していないと言う。

何を上が求めているかは知らない。ただ、求められているものは剣王によって違う。

剣王が十、アスカロン 通称アスカはルシエラにとっては妹のようなものであり、出来る限りのことはしたかった。

彼女は戦いには向いていないが、戦ったり実験を拒否してしまえば、殺されてしまう。

彼の情報の方が最新であるとルシエラは思い、気がついたことを口に出す。

「……アスカに会わない理由が分かったわ。貴方にとっては連戦になるのね」

隣の青年からは濃い血の臭いがした。

彼は答えず、ただ笑っただけだ。

剣王が五、ヴァルムンク、奇数番である彼は近接戦闘が得意だ。

その両手で敵を打ち殺して来たのだろう。アスカは血の臭いに自分以上に敏感であり、怯えさせてしまっただろうから、出来る限り逢わないようにしたようだ。

シルヴィオと言う名も彼は持っているが、剣王内ではヴァルと呼ばれている。

「偶数番は血の活性化の問題があるからね。奇数番が連戦するのは仕方がないことだよ」

「クラウもユースも、レイもティルもこき使われてるのね」

血の活性化　　狂気の血に覚醒した者が必ず抱える問題だ。狂気の血は使えば使うほど活性化する。

活性化した状態で使える力もあるが、長く活性化し続けていると怪物になってしまう。そうなれば後は殺されるだけだ。

「レーヴァに逢っていいんか」

「……逢って良いの？」

「遠慮しなくて良いんだよ。君は好きな人ほど近寄らせないようにするんだから」

ルシエラが憧れ、尊敬する彼女の愛称を彼は言う。仕事に出る前の僅かな時間、彼の気遣いでルシエラは剣王が「レーヴァティンに逢えることとなった。

昔のことを回想してしまうと、手が止まってしまう。

ルシエラ・ガートルード・ジンガレットィはヘアブラシを手に握ったままで、長方形型の卓上鏡を眺める。

かつてよりもくすんでしまった金髪と変わらない紫色の瞳、目を一度閉じてからルシエラは気持ちを切り替えた。

鏡の隣にあるシンプルな置き時計は午前八時になろうとしている。忍足家に居候を始めて何日かが経過した。この家の人達は良くし

てくれている。

髪の毛を整え終わったルシエラはジャージに着替えた。四天宝寺の制服は近いうちに作るつもりだし、入学手続きも忍足家がしてくれるらしい。

(考えなければいけないことは……)

学校のこともあるが、どう戦闘能力を取り戻していくかもルシエラにとっては大事なことだ。

血の力も落ちているが身体能力も落ちている。ファルソファミリ―との戦いだって、薬品精製能力で自分に能力上昇の薬品を入れたり、切り札を使って終わらせている。

切り札の方も以前以上に何度も使えるものではないし、そんな戦闘になるのも困るが、万が一のこともある。

身体を鍛えなければならなかった。

問題としてルシエラは病弱として通ってしまったので、運動をやるにしても慎重にしていかなければならない。

時計をもう一度眺めてからルシエラは部屋を出た。

忍足家は二階に子供達の部屋がそれぞれある。

ルシエラが借りているのは、一番奥の部屋で物置として使用されていた部屋で、家具を運び込んで部屋らしくした。

「まずは」

呟いて、部屋を出る。

すぐ近くの部屋のドアノブを手にとって捻る。雑誌が床に無造作に置かれていて踏まないように、

気配を出さないようにしながら、ルシエラはベッドで寝ている少年を見下ろした。ブリーチされた茶色い髪の毛が、ぐしゃぐしゃで

ある。シャワーを浴びてすぐに寝てしまったからだろう。

「Si svegli presto」

青年の耳元でイタリア語で言ってみる。

”時間なので起きろ”と言う意味だが、寝ている忍足謙也は反応をしない。寝息を立てている。

昔に誰かを起こしていたときは武器を使っていた。殺意を込めて剣を振り下ろしたりすれば、目覚めて剣を受け止めていたが、謙也は一般人だし、そんなことは出来ない。

ルシエラは謙也の頬を軽く叩いてみる。

二十回ほど叩き続けると謙也は目を覚ました。

「……ルシエラか……俺を起こしに来るとは……俺がそんなに信用出来るのか」

「準備は余裕を持ってするものよ」

謙也は起きればすぐに動ける。寝起きは悪くはない。

テニス部では『浪速のスピードスター』と言う異名を持つ謙也は何事もスピードにこだわる。

しかし、彼はスピードがあるからとぎりぎりまで寝ているということを良くやる。

「昨日はユーシと電話しとって、アイツと会話しとると時間忘れるわ」

「貴方の従兄だったわよね……」

ユーシとは忍足侑士のことであり、同じ年の謙也の従兄であると

ルシエラは謙也の弟である

忍足翔太から聞いていた。一週間のうち、二、三回は電話で話しているそうだ。

「逢える機会があればお前にも逢わせたり、話とかさせたいけどな。お前に興味持ったわ。お嬢様でイタリア人で世間知らずとか」

「世間は知っているはずよ」

「でも、ずれたところあるからな。お前は」

謙也は起き上がるとルシエラの頭に手を置いた。謙也は日本に不慣れである気を使ってくれるのは良いのだが、ルシエラを子供扱いする。子供扱いというかルシエラは謙也よりも年下と言っことになってしまったので、仕方ないと言えば仕方がないが、ルシエラは不服だ。

「……私の方は準備が終わっているし、待ってるから」

ルシエラは部屋を出る。

先に朝食を食べておいてから、謙也と共に四天宝寺中へ向かうのが、このところのルシエラの朝だ。

日本の風習には少しずつ馴染んでいるつもりだが、日本とイタリアでは違いが多々ある。夕食だってイタリアでは夜八時辺りに取るのに、忍足家では全員が揃ったら……午後六時や七時に取っていた。部活に行くまでは余裕がある。準備されていた和食の朝食を食べるから、謙也と共に四天宝寺中へと向かう道を歩く。

「体の方は調子ええみたいやな」



「良くなったし、安心よ」

「春先とか寒いから、体調が崩れやすいんや。イタリアの春ってどんな感じや？」

「Marzo marzo pazzarello, vedi il sole prendi l'ombrello」

聞かれたのでルシエラはイタリア語で答える。

「……お前は日本語上手いけど、こつ言つのを聞いとると異人や……とか想うで」

「意味としては、三月は狂った天気。太陽が出たら傘を持っていけっつて感じ」

「その手の言葉……日本語にもあった気がするで。天気が崩れやすいんやな」

「イタリアの春と言つと言葉が広すぎて一概にこつとは言えないけど、北は雪が降ってるけど中部や南は花盛りね」

「そう言われると、日本もそうやな」

日本だって北海道から沖縄まで、本州も季節が違いすぎる。

大阪の空気は肌寒いが、イタリア北部ほどではない。

息を吸うと冷たい空気が肺に流れ込んでくる。このところ、大阪の天気は晴ればかりだ。

通学路は人が少ない。ゴミ捨てに行く主婦や遊びに行くこつとして  
いる小学生とすれ違ったりはしていた。

日本の風景も見慣れてはきた。

「ルシエラ。謙也、おはよう」

「蔵ノ介。おはよう。今日は少し、遅めなのね」

歩いていると白石蔵ノ介がテニスバッグを右肩に担ぎながら、自転車に乗っていた。ブレーキを操作して自転車を止めると、自転車から降りた。

白石は男子テニス部の部長であり、部活にはかなり早く来ている。

「今日は小石川が鍵当番やからな」

小石川健二郎はテニス部の副部長であり、頼りになる。

「小石川が部室を開け取るとは言え、速めに行かんとな」

「走るの？」

謙也はせっかちだ。

『浪速のスピードスター』という異名を持ち、テニスでもそのスピードを生かしたプレイをしているが、生活面でもスピードを重視している。食事を食べるときだって早すぎるし寝付きも早い。

「それやと、お前を置いて行くやろ。あるいは白石の自転車に乗せてもらうとか」

「嫌。それをやるなら謙也の上に乗るわ」

「オレがお前を背負って走るんかい！？ そんなに自転車嫌いか」

「蔵ノ介が悪いのよ」

ルシエラは自転車の二人乗りはしないことを誓った。

白石の自転車の後ろに乗ったことはあるが、気分が乗った白石は警察官に追われても走り続け、しまいには歩道橋の階段の上も自転車で上つて行った。

「今度はそんなことはないで。俺の気持ちは穏やかなんや」

「する気無いわよ。それをするぐらいなら走るわ」

「お前は病弱なんやから、運動はちょっとはしたほうがええやろうけど、体力とか無さそうやし」

「運動ね……した方が良いんだけど……前はしていたんだけど」

白石とルシエラが話していると謙也が割って入る。

速度に関して言うならばルシエラはそれなりに速い。

テニス部のマネージャーの仕事しながら、謙也のことは観察したが、謙也は短距離ならば非常に速いスピードで走れるが、バランス感覚がなかった。ロケットのようなものである。

ルシエラはバランス感覚はある方だ。スピードならば謙也に負けるだろうが、バランス感覚では負けない。

「運動なら、テニスとかやってみんか？ ルシエラ」

「選手として活躍するとか無理よ」

「趣味とかでやるならええやろ。俺が教えたる」

運動はしていたと言うが戦闘のために体を鍛えていると言った方が正しく、スポーツはルシエラは余りしたことがなかった。

テニスもそうだ。疲れるから運動は嫌いではあるが、体は動かしておきたい。

白石が自転車を押しながらルシエラを誘う。

「……やってみようかしら。でも、やるのは遅すぎない？」

「そんなこと無いで。財前とか、中学入ってからテニスとか始めたし、中学校やと、新しいことやろうとかで、部活を選ぶとかの方が多いんや」

小さい頃から色々やっておくべきだというのがルシエラの考えの一つにある。これは彼女が陥った状況に起因していた。

白石が丁寧にルシエラに教えているがこれはルシエラが日本の状況を知らないのと、一般的なことには余り詳しくないから、言うておくというのがあった。

「やるんやったら、道具とか揃えなアカンな」

「そんなに急いでやらないわ。他にやることはまだまだあるもの」

テニスならば良いだろうと謙也も想っているようだ。今日すぐにテニスをルシエラは始めたいわけではない。

それよりも優先しておかなければならないことはいくつあった。

ルシエラが白石や謙也と共に四天宝寺中男子テニス部の部室に入ると小石川健二郎が壁に色紙を止めていた。正方形の白い、ボール紙で出来たサインをしたりする色紙だが四天宝寺中での部活では、部日誌として使われているようだ。日々の部活の記録を書く部日誌ではあるが、一般的には部日誌用のノートに書いたりしている。

教えてくれたのは白石で、彼はルシエラに一般のことと、四天宝寺のことを分けて教えてくれていた。

色紙はルシエラも書き込んだが、他のテニス部部員がコメントをつけたりしてくれていた。

「小石川さん、色紙の整頓をしているの？」

「ルシエラか。オモロい奴を貼るようにはしとるが、定期的に変えんと壁が埋まるからな」

「誰かがポスター貼ったりするしな。お笑いライブのポスターとか」

「……部室に貼ってどうするのかしら……」

小石川は四天宝寺中男子テニス部の副部長であり、ルシエラも世話になっっている。解らないことがあればすぐに教えてくれているし、白石やテニス部の顧問である渡邊オサムも補佐もきちんとしていた。謙也が壁を軽く拳骨で叩いていた。

お笑いライブのポスターを貼るならば部室に貼るよりも、四天宝寺中の校内にある掲示板に貼った方が、宣伝効果がある気がした。

他の部員はと言うとまだ来ていないようだ。

「白石。渡邊監督からやけど、今日ぐらいに千歳が来るらしいから、補佐頼むって」

「千歳がか、寮に入るんやよな。そうしたら師範にも話しくか。オサムちゃんは……」

「宿直室に居ったわ。競馬でか麻雀でスツたみたいで、空腹そうやったから、朝食のサンドイッチを差し入れたわ」

「……オサムちゃん、たまにこういうことあるよな」

千歳というと、聞いたことがあった。九州の強いテニスプレイヤーらしい。四天宝寺に來ると言っていたが、今日のようにだ。千歳の話題はそこそこになり、男性陣の話題はオサムの方に向かった。

競馬新聞を読んでいるオサムをルシエラは何度か見たことがある。白石と謙也がオサムを心配していた。

「寮って、四天宝寺にあったの？」

「あるで。ちょいボロボロやけど、うちやと、師範とか入っとるな」

「師範が？」

「銀は東京出身で、四天宝寺にはテニスの特待生で入っとるんや」

(関西弁だったのに東京の人だったのね……)

四天宝寺に寮があることをルシエラは始めて聞いた。

小石川や謙也が答えてくれたが、寮のことよりも銀が東京の人であることの方がルシエラの興味を引いた。

銀はテニス部の中では落ち着き払っている人であり、謙也のダブルスの相方だ。

身長がテニス部内では一番高い。

「俺、オサムちゃんの様子見てくるわ。千歳についても話とかなアカンから」

「渡邊監督、まだ何か食べた方が良くないかしら。食事と睡眠は取っておかないと駄目よ」

「テニス部の部費の一部を削ってオサムちゃんがこうなったときの救済資金はためとるんや」

「……蔵ノ介……学校をよく知らない私でもそれは何かあっているんだけどずれていると想うの」

白石が対処をすぐに行っている辺り、オサムはたまにこういった状況に陥るらしい。

「謙也、宿直室と一緒につきおってくれ。買い物頼むわ」

「ええで。コンビニぐらいひとつ走りや」

「日本のコンビニは便利よね……イタリアだとローマとかしか無いわ」

「イタリアは田舎なんか……」

二十四時間営業のコンビニなどイタリアには滅多には無い。ルシエラは謙也の方を見た。

「……タバッキならあるけど、元々日本とイタリアじゃ生活形態も違うし、イタリアは保守的なところがあるから、コンビニが入らな

いいし、治安も悪いから、自動販売機だってお金が盗まれるを理由で檻に入っているのよ」

タバッキとは雑貨専門のイタリアのコンビニだ。イタリア人は何件かのタバッキを知っていてそこで細かい雑貨を買う。

治安について言えば良くなってきたところはあるが日本に比べたら悪い。日本が安全すぎる共取れるが。

「檻の中の自動販売機とか……使いにくくないか？」

「使いづらいわよ」

謙也が想像してみているが、自動販売機が犯罪でもしているかのような様子だと想っているようだ。日本が二十四時間営業の店が多すぎるだけであり、外国に行けばそんなにはない。治安や宗教の問題があるからだ。使いづらいが自動販売機で飲み物を買いたいこともあり、置いてあると言うのがイタリアだ。

「ルシエラは小石川の手伝いしとってや」

「渡邊監督に、賭け事は程々にと伝えて。やるなら臓器とかかけちゃ駄目よとも」

白石は自分と謙也でオサムのところへ行き、ルシエラは部屋に置いて行くという考えのようだ。ルシエラは賛成すると、オサムへの伝言を頼む。

「お前な、ルシエラ、漫画みたいなことを言うな」

(……実際にあるんだけど)



ルシエラが伝えようとした言葉は謙也からしてみれば冗談に聞こえたのだが、ルシエラとしては本気なところがあった。

彼女は裏社会に居た。裏社会の賭け事というのは賭けられるものはなんでも賭けたのだ。

「伝えとくわ」

微苦笑を見せた白石が謙也と共に部室を出る。部室には小石川とルシエラが残された。

「他の部員はまだなのね」

「もうそろそろ集まり出す時間や。……そや。師範にも連絡を取らんと」

小石川は携帯電話を取り出す。

白石も気配りが上手いが、小石川も上手い。連絡というのは速めにしておくべきだとはルシエラも想う。

耳に携帯電話を当てていた小石川だったが話もせず携帯電話のボタンを操作していた。

「連絡が取れないの？」

「電波が届かん言うったから、裏山で滝に打たれとるんかな」

「裏山とかあるのね」

「四天宝寺は意外と敷地とか広いんやで」

(学校の中にも華月とか食い倒れビルとかあるし……)

ルシエラが知る四天宝寺中の敷地はグラウンドや校舎や部室などだ。学校というのは皆こんなに広いのかと考えたが、かつて見たことのある並盛中はそんなに大きくなかったことを思い出す。

「師範は滝に打たれようと想えば一日中とか打たれとる。呼びに行かんと、今日はフリーの試合練習やし」

「小石川さん、私が呼んできましようか？ 大体の位置を教えてくださいえれば行けるから」

「ルシエラがか……裏山は道はあるけど、行けるか……」

「裏山には行ってみたいし、入学する前に見られそうところは見たいの」

「それなら、簡単な地図なら書くから頼むで。俺は部室を離れられんし」

四天宝寺の練習は練習メニューによつては出なくても良いが、フリーの練習試合は実力を確かめたり、磨いたりするためには出た方がよい。小石川は渋っていたようだがルシエラは言葉で押した。

机の上にあるいらぬ紙の上に小石川は裏山の地図を黒の油性マジックで簡単に書いてくれた。ルシエラは受け取ると、小石川から裏山の方向を教わってから、部室から出て、裏山の方に行く。

今は春休みで他の部活も練習に来ているようだった。サッカー部やアメフト部の生徒とすれ違う。

裏門から少し歩いて、裏山に入る。裏山は校舎から離れた位置にあ

った。人が二人分歩けるぐらいの道が上の方へと延びている。ルシエラは小石川からもらった地図を眺めたが、滝は頂上近くにあると書いてあった。

道は舗装されていないが、歩きづらくはない。人の気配は感じない。ルシエラは頂上近くを目指し、歩き出した。

（能力……使ってみようかしら……領域操作の方）

ルシエラの狂気の血にどの能力が残っているのか、確かめきれないところがあった。

領域操作というのはルシエラ能力の一つで、自身が領域と認識したところに因子をばらまいていてそれにより、範囲内ならば自由に領域を操作出来るという能力らしい。らしいが着いているのはルシエラもいまいち、解っていないからだ。因子をばらまいているとは言うが領域を操るときは彼女はその範囲を見たり、感覚的に領域だと認識しているぐらいである。

狂気の血で今のところ判明している十三の能力のうち最も謎なのが領域操作であると言うがその通りだった。

確かめられたのは領域を不可視にしてしまう能力だったが、これは精度が落ちすぎていた。

白石に発見されたからである。白石は能力は使わないで欲しいと言っていたし、自分が許可を出してからと言っていた。

「……薬品精製に比べるとやれることは攻撃面だと兩粒操って叩きつけたり、地面割って相手を落としたり……」

する程度なんだけど、とルシエラは呟く。白石がいれば何処がその程度や！と言われそうではあるが彼女は気付いていない。

補助ならば領域内の音を全て聞くことが出来たり、因子を撒くことで情報を検索したりなども出来た。

問題として血の力を全て確かめるには血を活性化させなければならぬ。それは怪物に近づくのと引き替えの行為だ。

「ルシエラ!!」

人の気配がしたので振り向く。ルシエラの名を呼んだのは財前光だった。肩にテニスバッグ、手にはリュックサックを持っている。

「財前……?」

「小石川先輩に聞いて、来たんっすわ」

どうして財前が来ているのかということルシエラが疑問に想っている。財前が答えた。

部室に来た時に小石川からルシエラのことを聴いて、裏山に来てくれたらしい。

「蔵ノ介と謙也は渡邊監督のところよ」

「部長と謙也さんじゃなくてルシエラに用事があつて……これを」

財前は持っていたリュックサックから、箱を取り出した。

取り出されたのは直方体をした透明のケースであり、ルシエラにはこれに見覚えがあった。中には緑色の髪をしたツインテールの少女のフィギュアが入っている。

「昨日、私があげた初音ミクのフィギュア?」

「返すっすわ。俺、大したことはしてないのにこんな高いもの貰うんわ……」

「高いかしら」

「……高い……お礼とかは良いんで……」

部屋の家具を揃えたり家電を揃えられたのも財前が店を紹介してくれたからである。お礼にとルシエラは初音ミクが好きな財前にフィギュアをあげたのだが、財前はフィギュアが高いと言っていた。初音ミクのフィギュアは塗装費などを含めると一万円を二枚ほど使っておつりを貰った。

「解ったわ。でも、出来ることがあるなら言っただけ。尽力はするから。これは……部屋に飾っておけばいいわね。人形だし」

「人形とか好きですか？」

「好きよ。ぬいぐるみとか集めていたわ」

フィギュアは部屋に飾っておくことにした。買うときに直射日光には余り当ててはいけないと聞いていたので、日陰に置いておこうとは思う。ルシエラは少女趣味な所があり、本拠地の自室にはぬいぐるみが沢山置かれている。忍足家の部屋にも置きたいところだ。

「フィギュア入れるときこれ使ってください。それとフィギュアのことばばらさんように」

「財前のお嫁さんについては言わない方が良いのね」

「俺の嫁ってのは日本語の一つで、自分が好きなキャラクターに使う言葉というか……」

そうなの、とルシエラが頷きながら言う。日本語は理解出来るのだが、俗語になったりすると、解らないところがある。

「初音ミクは歌うパソコンのソフトだって聞いたわ。日本には凄い技術があるのね」

ルシエラは最新技術には疎い。苦手としている。そう言ったことは出来る者に任せていた。

簡単な操作は可能だが、難しい操作になってくると能力を使ったりするし、知識も大雑把だ。

「ネットとかパソコンとか疎い方っすか？」

「……得意じゃないわね……興味はあるけど」

「ミクとか動画で歌とかアップロードされてるんっすわ。聞いてみます？」

「聞いてみたいわね。音楽とかクラシックばかりなのよ。たまに勧められたアーティストの歌を聴くぐらいで」

「お嬢様や……ピアノとかヴァイオリンとかも……」

財前の呟きにルシエラは一度大きく瞬きをした。クラシックばかりを聴いているのは趣味と言うよりも、かつての生活でそれぐらいしか聞くものがなかったため、聞いていただけである。

「そこそこに弾けるわ」

「……お嬢様っすね」

「……教養の一種で憶えたのよ」

教養を憶えさせられたのは貴族社会で使つたためだ。組織の教育方針は謎なところがあつたが、ルシエラは教養は身につけさせられた。ピアノとヴァイオリンならばピアノの方が好きである。憶えたと言つよりも憶えさせられたの方が正しいが、ルシエラは言い直さない。

「師範を迎えに行くんっすよね。俺も着いていくっすわ。一人やと、危ないし」

「平気よ。一人でも迎えに行けるわ」

危険があるうともルシエラはどうにかなる。裏社会の者が関わつてこなければルシエラは今の状態でも十分にやっていけた。

しかし、そんなルシエラに財前は真剣な顔で言う。

「……ここは四天宝寺。笑わせたモン勝ちをスローガンにやつとる学校。外とは常識とか違っつすわ」

風で周囲の木々が揺れる。常識が違つと言うのは白石から教わつていた。財前が真剣に言っているところからして、他とは違つことが四天宝寺にはありすぎるのだろう。

「（財前に話を聞いた方がいいかもしれないわね……教科書の話もしておかないと）着いてきてくれると、助かるわ」

こうして、ルシエラは財前と共に、銀を迎えに行くこととなった。

「……あれ？」

同時刻、ディオニージ・ドウリンダナは携帯電話を耳に当ててから離れた。電話の相手に電話が通じない。”おかけになった電話番号は電波の届かないところにあるか、電源が入っていません”と聞こえる。

「ディオ。電話か？」

「知り合いにかけたんだが通じなくて……またかけ直さない」と

ホテルの前でディオは電話をかけていた。迎えに来た相手の問いに答えながら携帯電話を操作してから、ポケットの中に入れた。騒がしくなってきた町並みを眺めると、知っている者が来た。軽く手を上げておく。

「学校は始めてってお前やお前の雇い主が言うつつたが」

「通うのは初めてだね。前に潜入してぶち壊したことはあるけど」

待ち合わせの相手が丁度来たのでディオは受け答えをしながら、待ち合わせの相手と共に歩く。テニスバッグを持っていた。彼とディオは同じ服装をしていた。ディオが彼の服装に合わせたのだ。着ているのは学校の制服である。ブレザーだった。

「入学手続きとかはやっとるんじゃない？」



「雇い主、日本に行くって言うていたし……並盛でトラブルを起こされると困るんだけどね」

「お前さんを案内すると言っておけば真田も誤魔化せる。練習も大事だが、案内しとる方が面白そうじゃ」

「……そういうものかな……？ テニス部の練習って厳しい？」

雇い主がトラブルを起こすと対処するのはディオになる。雇い主には戦闘能力はあるが、本格的な戦闘になれば、兵器やディオが駆り出された。並盛に居る次期ボンゴレボスもその守護者も強くなっているし、かつての同胞も居る。

ディオは頭を掻いた。

「他の要因もあつて今まで以上に厳しいのう。ウチは元々練習は厳しいんじゃないが」

「大阪で見たテニス部は凄く速い奴がいたりしてたけど……そつちも凄そうだ」

頭から手を放すと、ディオは待ち合わせ相手の隣を歩く。連絡は学校について案内が終わってからにしようと思った。

連絡相手はルシエラであり、自分の状況を伝えておくものだ。待ち合わせの相手は口元に笑みを作る。

「それより凄い。これから行くのは立海大付属中　テニス部は全国一連覇しとるからの」

【続く】

## コンビニおにぎり 前編（後書き）

後編はこれを書いている時点ではまだ書けていなかったりするので九州の彼が出る予定だったのに全然気配がないとかタイトルは後編のキーワード、のはず

## コンビニおにぎり 後編(前書き)

OVAネタとかも混じってますが知らなくても読めるかと  
最後の方に出てくるのはオリキャラではないですが、  
かなり古い作品からキャラクロスさせたので  
知らない人の方が多いような……

## コンビニおにぎり 後編

財前光が見たルシエラ・ガートルード・ジンガレットイの印象と  
いうのはお嬢様だ。

漫画やドラマで見ているお嬢様である。

これは他のテニス部員もそう想っているのだろうと財前は考えて  
いる。物腰は柔らかいし、振る舞いもそうだ。

そんなお嬢様と財前は二人で裏山の道を歩いている。道は緩やか  
な坂だが、上に行くにつれて段々と傾斜が上がっていく。

左右は森であり、道の幅は二人が通っても少しの余裕があった。

「お嬢様が四天宝寺に通うつても、妙な感じするっすけど」

「学校には通ったことがないから……知っている人が居る学校が良  
かったの。貴方はどうして四天宝寺を選んだの？」

ルシエラの話は謙也から聞いている。病弱でイタリアの屋敷で過  
ごしてきたとか、学校には通えなかったことなどだ。勉強の方は屋  
敷でしていたらしい。

四天宝寺と言えば？ と問われて中身を知っている者が解答に出  
すのは、お笑いがメインの学校であるということだ。

ルシエラに問われ、財前は答える。

「家から近かったんっすわ。事前情報知っとれば、別の学校選んど  
ったかも知れんけど」

人によっては小学校、幼稚園から受験をしたりしている者も居る  
が財前はそう言うことはなく、家から近いという理由だけで、四天  
宝寺中を選んだ。特に調べもしていなかったので四天宝寺中が、お

笑いの学校だなんて知らなかったが。

「公立の学校は受験しなくても入れるみたいね。イタリアの学校も中学校まではそんな感じ」

(……学校、通いたいとか想つとつたんやろうな)

微笑するルシエラの横を財前は歩いている。ルシエラの歩くペースはゆっくりめだ。

携帯電話で時間を確認すると、部活が始まるまで時間はまだあった。裏山は携帯電話のキャリアによっては電波が届かない。

財前が使っている携帯電話はアンテナが立っているが、銀が使っている携帯電話は裏山では電波が通じない。

「四天宝寺は常識が違うって言うけど、他とどう常識が違うの?」

「何でもお笑いに結びつけるのが一番の特徴っすわ」

四天宝寺と言えばお笑いで、お笑いと言えば四天宝寺という方程式が成り立っているところがある。

学校内ではお笑いの大会をやっていたり、入学式からお笑いがあり、卒業式だってお笑いがある。たまに大食い大会が混じる。

「笑いが大事な学校なのね」

「当初はノリに着いていけんかったんで」

「ほどよい距離を取るべきみたいね……」

日本で生活を始めたルシエラの買い物も一緒に付き合ったことが

あるが、こうして長めの会話をするのは始めてかも知れなかった。  
電気屋の買い物時にしろ、家具を買いそろえる買い物にしろ、  
彼女は白石や謙也や彼等の弟妹と話していたからだ。

財前が会話を避けていたわけではなく、白石達の方が積極的では  
あった。

「ここで六割ぐらい。もうちょっとで師範の居る滝に着くんで」

「……これは……こけし？ 日本の置物……よね」

財前とルシエラが着いたのは裏山にある広場のような場所だ。先  
に道は続いているが、それよりもルシエラの目を引いたのは、道の  
側に置かれている巨大なこけしであった。全長は二メートル以上で  
あり、それが坂の側に置かれている。

「こけし様っすわ。元々はテニス部の部室に置かれてて」

「……どうやって部室に入れたの？」

「オサムちゃんが西日本大会優勝記念に持って来て……入れ方はあ  
の人がどうにかしたんやろうけど、  
出すのも大変で……出したはええけど、置く場所にも困ってとりあ  
えずここに」

「お供え物が置かれているわね……」

至極真つ当なツツコミが聞こえてきた。

こけし様と呼ばれている巨大こけしには幌金縄が撒かれていたり  
お供え物だつて置かれている。

四天宝寺中の生徒や教師が供えたのだ。

「あの人、こけし渡すでしょう」

「……お前が正式なマネージャーになったらやるわみたいに言われたわね……謙也が言うには、笑点で言う座布団と同じって」

「……イタリア人が解りづらい例えを」

オサムはよいことをしたりするとこけしを渡す。こけしがある程度貯まると特典が付いてきたりするのだが、西日本大会を優勝したときに部室に鎮座していた巨大こけしには困ったものだ。どうにか部員でこけしを外に出して、置き場所を考え、部室の前に置いたら不気味すぎると裏山に置いておくことにしたのだ。

巨大こけしはこけし様と呼ばれるようになり、願掛けに来る者が居る。

二人はこけし様を通り過ぎて、また坂を上り始めた。

「こけし様を手に入れた西日本大会って？ こけしが貰える大会？」

「商品はこけしやないっすわ！ 一、二年生が中心で……西日本大会は秋頃に行われる大会で、去年は俺等が優勝したんや」

西日本大会は関西、四国、中国、九州の覇者が集まって戦うテニスの大会だ。四天宝寺は西日本大会で優勝している。

「四天宝寺中は強いのね」

「去年はベスト四で……立海に負けて終わったっすけど、今年は優勝したいし」

財前の話を興味深そうに楽しそうにルシエラは聞いていた。部活動なども新鮮に聞こえるのだろう。

昨日、財前はインターネットのスカイプでネットの友人と会話してお嬢様の対策やフィギュアについてを話した。

的確なアドバイスが返ってきたのでそれを参考にしながら話を進めている。

「大会っていつからやるの？」

「五月に地区大会で、六月に府大会、七月に関西で八月に全国で……」

運動部の大会はどこも似たような時期に開催されるが、五月に地区大会をしてから、府大会、関西大会、全国大会となる。

三年生は何処かの大会で負けてしまえば引退だ。秋になれば関西大会や新人戦があり、冬になればジュニア大会がある。

「……大会ばかりね」

「負けたらそこで終わり……四天王寺がいくら関西で一番強いからって、負けたらアカンし」

「油断は駄目ね。ちょっとしたことでも狂うこともあるんだから」

歩くペースを少し速めた。滝の音が微かだが聞こえてきて、歩いて行くにつれて大きくなっていく。

「すれ違つことはないから、滝に打たれとるはず」

「……師範、何か言ってる……ぶっせつかまはん……」



止まったルシエラが聞こえた通りに言う。財前は何を言っているかまでは聞き取れなかった。二人は滝の方へと着く。

滝は裏山の開けた場所にあった。滝から流れた水がたまり、泉を形成している。

白装束を着た頭を剃った男が滝に打たれながら目を閉じて、般若心経を読んでいた。

「師範　！！　そろそろ部活始まるんで！」

「滝に打たれるのは止めて」

財前が呼びかけ、ルシエラも呼びかける。その声を聞いた石田銀は目を開けて、滝から出た。泉の側にはテニスバッグや着替えが置かれている。

「財前にルシエラはんか。呼びに来てくれたんか」

「ええ。今言っていたのはお経かしら」

ルシエラが聞くと銀が頷く。

「般若心経や」

「暗唱出来るなんて凄いわね。私は聖書を少し言えるぐらいよ」

「イタリア人やから聖書か……」

「a s a n g u i n e A b e l , u s q u e a d s a n  
g u i n e m Z a c h a r i a e , q u i p e r i t t i

nter altare et aedem . Ita dico  
vobis……とか」

日本語を話していたルシエラが聞いたことがない外国語を紡いだ。イタリアはカトリックの国ではあると聞いていたが、聖書も暗唱出来るらしい。財前は英語かと考えたが、使用言語はラテン語であり、日本語に訳すと、”すなわちアベルの血より祭壇と神殿との間に倒れしザカリアの血に至るまで現代はその罪を問われん、われ誠に汝らに告ぐ、現代はかくのごとく罪を問わるべし”と言うルカ聖福音書の一説である。

「ルシエラはんはキリスト教か。イタリアのお人やからな」

「聖書は小さい頃から慣れ親しんだから、師範は家がお寺なの？日本人は信仰心が薄いつて聞いたけど」

イタリアといえばキリスト教で、カトリックだ。財前からしてみればカトリックやプロテスタントの見分けは曖昧である。

信仰心が薄いとルシエラが言っていたが、財前も神は信じていることには信じている。しかし日本人と言えば、初詣に行き、お盆を祝い、クリスマスを祝う人種だ。様々な宗教をごちゃごちゃにして自分達なりに変えてしまっている。

「師範の家は寺じゃなかったっすよね」

「うむ。東京の下町で、父は大工をしている」

銀は仏道に帰依しているようなものだ。

父親が大工なのにと財前は思っているがルシエラもそう想っているらしく、そうなの、と呟いただけであった。

ルシエラは携帯電話……財前が見たところによると最新のスマートフォン……を出した。

「部活、もうちょっとで始まりそう」

「着替えて……ルシエラは、その辺を散策しとって欲しいっすわ」

「終わったら呼んでね」

財前の指示を察したのかルシエラは首肯し、滝から離れて、森の中へと入る。銀が着替えないといけないからだ。

折りたたまれている着替えを財前は銀に渡す。銀は着替えを始めた。

「落ちついとる方やな。ルシエラはんは」

「俺のネットの友人は、お嬢様は適応能力を身につけなあかん言うとったから、そのせいかも知れせんわ」

相談したときに聞いたところに寄ると、お嬢様で高飛車というのも居ることには居るのだが、金持ちというのは金持ちなりの付き合いがあり、家の面子などにも関わってくるため、落ち着いた振る舞いなどを求められることがあるという。

財前のような一般人でも、自分が何かしてしまえば場合によっては近所の者が噂を立てたりして母親に愚痴られたりもするのだが、金持ちにもそういうことがあるらしい。

「大人びとるな。異人さんは年齢よりも年上に見えると言うことがあるが」

「（……師範も大人びとるっすわ）俺と同じ年ですけどね。彼女」

「白石はんと同じぐらいにも見えたが」

「あの人、エクスタシー！ とか言うて突然脱ぎ出したりするんで、比べたらルシエラが可哀想っすわ」

外面だけで判断すれば大人びているのは銀であり、巨大な壁を挟んで、小石川、白石、壁がまたあって謙也や小春やユウジと言うのが財前の見解だ。ルシエラは本当ならば十七歳ほどであるが、そのことを知るのは白石ぐらいである。

銀が着替え終わったのを見計らい、財前はルシエラを呼んだ。ルシエラがやってくる。

「見て回っていたけれど、落ち着けそうので良い裏山ね」

「ネタ出しかに使われてたりもするっすわ。行きましよう。遅れるとみんなが煩いんで」

財前がルシエラと銀を促し、裏山を下りていく。こけし様を通り過ぎた。

「午後からは千歳さんが来るって聞いたわ」

「寮の部屋は掃除がおわつとる。荷物が来たら運んだりすれば完了やな」

「……九州二翼の千歳千里、二翼やのうて、九州は一翼になったっすね」

「もう片方も秋口には転校してしまっている。獅子楽中は去年は脅威やったが、今年は今年の勢いがあるかは解らん」

千歳が来ることは銀も知っていたようで、迎える準備は出来ているようだ。九州二翼の二人は九州にはもう居ない。

だからと言って安心は出来なかった。

「情報とか掴んでないの？」

「うちは情報は小春先輩がしてるっすけど……当たって砕けるみたいなのところが六割ぐらいあるんで」

「六割でも多いわよ。せめて四割ぐらいで」

降りるときは登るときよりもペースを速くした。裏山から出て、四天宝寺の敷地内へと入る。

テニスコートへ近づくに津入れて賑やかな声が聞こえてきた。

「間に合ったかな」

「師範の白装束の干さないといけないわね」

水を絞った白装束は銀が持っているが、干して乾かさなければならなかった。部室の扉前に三人は来る。

「おはようございま……」

財前は部室のドアノブをひねるとドアを開けた。

「あら、財前くん。ルシエラは？」

「師範がおるってことはルシエラが居るは……」

「財前？」

財前の後ろにはルシエラが居た。

ルシエラの身長は財前よりも低い。彼女は財前の後ろにいたために部室の光景が見えなかった。

部室にいたのはバレリーナの服を着た小春とタキシードを着たユウジだ。白い縦長の習字用紙に墨字で『白鳥の湖』とか書かれている。バレリーナの服を着ている小春だが、白鳥のオブジェもつけていた。

「ルシエラ笑かすにはどうすればええか考えてこつなつたんやけ……」

どうかしらこれ！ と言う小春の声が聞こえ、ユウジの声も聞こえたが財前は無視して部室の扉を勢いよく閉めた。

「見たらあかんっすわ」

「……死体でもあつたの？」

「死体よりもある意味おぞましい精神汚染されるもんが……」

真顔でルシエラは死体と言っていたが財前はそれよりもお笑いダブルスコンプの非常にずれきっている、四天王寺の面々なら慣れてしまっていることからルシエラを遠ざけるのに思考が行っていた。

「小春はんとユウジなりのルシエラはんへのコミュニケーションや

と想うぞ。財前」

「そんなコミュニケーションは、日本が誤解されたらあの二人のせいっすよー！」

財前は体でドアを押すようにして立つ。あのおぞましい何かは部屋に封印しておくことに限る。

「誤解……日本については大阪はお笑いの地方と言うのは聞いているけど」

「お笑い、違う。もっと別の……大阪の特徴……通天閣とかを、それやとイタリアと言えばパスタみたいなのになるんで」

大阪と言えばお笑いだがお笑いだけで解決されると財前としては心外だ。ルシエラは納得する。

「……イタリアと言えばマフィアとか言われるみたいなものね。マフィアは分類の一種でもっと細かく言うと……」

「財前！ 師範！ ルシエラ！ おかえりー。部活始めるで！ せめてパスタやー！」

白石がそこに走ってきた。

財前は背中にドアを何度もノックされる音を感じつつ、彼のツツコミを聞いていた。

ルシエラとしては大阪は日本の第二の都市であり、関西に属する

他とは違っている場所という認識をしていた。

都市に個性があることは知っている。イタリアだって、フィレンツェもヴェネツィアもローマもナポリもみんな違う。雰囲気としてはナポリに似ていた。似ているだけで違うところもあるが、ルシエラはイタリアでも北イタリアをメインに活動をしていたので南は余り行かなかった。

「別に調べたら一般人でもイタリアのマフィアが細かいことぐらい解ると想うけど」

「パスタの方がええんやて。お前はお嬢様なんやから」

「以外と金持ちは裏社会にも関わりが」

「……それなりにまともで居ってや」

イタリアのパスタは非常に細かい区分がある。それに比べたらマフィアは大まかに四つしか種類がない。

部活が始まった。フリーの練習試合と言っていたが、これは試合形式で対決を試みるというものであった。

白石はまだ出番が無く、待機状態で、ルシエラはマネージャーとしての仕事を覚えていた。オサムが元気を取り戻したので、生徒を見るのはオサムに任せて白石はルシエラと話していた。

「一氏さんと小春さんはステージで漫才をしていたわね。私をそんなに笑わせたいの？」

「馴染ませるようにはしたいんやろ」

「財前は馴染んで欲しくないみたいだけど」



「お笑いの空気に染めたくないんやな」

部室の中は見る事が出来なかったが、お笑いに関わるものではあったらしい。ルシエラがテニスコートに視線をやると財前と謙也がダブルスを組んでいて、小春とユウジとテニスをしていた。お笑いテニスをしているようだ。

「蔵ノ介はお笑いはしないのね」

「俺は距離とか考えとるところもあるかな……お笑いにルシエラを入れるとギャップあるっつーか」

この中で唯一、白石はルシエラの正体を知っている。殺し屋兼復讐屋であることをだ。

「イタリアにもお笑い番組とかはあるし、私もたまに見るわ。ただ、日本と違って正確な時間にやらないことばかりだから……」

「……やらのか？ 日本やとスポーツ放送やったら多少はずれるけど」

バレーボールや野球などをしていたら延長などで長くなってしまい、ドラマやアニメなどがずれれることは

日本ではたまにあった。ルシエラはそれを聴くと少しだけ考え込む。

「唐突にずれるわね。ドラマとか見ようとしたら三十分はずれるとか、しまいには明日放映しますとか」

「ざっばやでイタリア……」

「白石、ルシエラを馴染ませるために話かけるのはええけど、他の部員も気にかけてやってや」

オサムに呼ばれ、白石が気付く。周囲には白石は倒れているルシエラを助けた恩人であり、日本で暮らすことにした彼女を構うようにはしているという印象が広まっているが彼は部長であり、他の部員も気にかけないといけない。

「私は平気だから」

「解らんことあったら小石川とかにも聞いてや」

白石と別れてルシエラは仕事に戻る。この体での生活も慣れた。仕事をしながら試合を眺める。テニスボールが当たりそうになるようなこともなく、その日も無事に部活は終わる。テニスコートの片付けはルシエラも手伝った。

「千歳が今日は来るからな。午後ぐらいとか聞いたんやけど」

「連絡は？」

「……連絡先知らんわ……」

「聞いておきなさいよ。午後ならもう、午後じゃないの。お昼過ぎだし」

午後には千歳が来るというのは聞いていたが細かい時間は白石は聞いていなかったらしい。

「待ち合わせは……駅ぐらいで」

「千歳なら顔は知つとるし、俺が迎えに行くわ」

「謙也さんだけやと不安やから、俺も着いていきます」

「アタシも行くわ!」

「小春が行くならオレも行くで」

駅としか聞いていない白石だったが、千歳の迎えに謙也、財前、小春、ユウジが名乗りをあげた。四人で迎えに行くのも、どうかとは思ったが、寮の準備は銀と小石川が先に仕上げをしてくれていた。皆、特に今日は用事が無く千歳を迎える準備を手伝っていた。

「ルシエラ。昼飯やけどコンビニで買ったおにぎりとか余つとるか  
らそれ食えや。他にも食べたかったら買ってくるし」

「これだけあれば十分よ」

謙也に言われてルシエラは持っているコンビニの袋を上げた。中にはコンビニのおにぎりが三個とペットボトルのジュースが入っている。オサムのために買ってきた食事の残りだ。残りとは言え、謙也が勢いで買ってきてオサムが、食べきれなかった分である。白石もコンビニの袋を持っていた。

四人が部室から出た後で部室にはルシエラと白石が残された。

「食べ終わったら、寮の方に行こか。おにぎりとか好きか?」

「好きね。ご飯系もいけるわ」

器用にルシエラはコンビニのおにぎりのパッケージを外すと引っ張って海苔をつけて、食べていた。

中身は梅干しだ。ルシエラは梅干しも好きな方だ。忍足家で食べたことがある。

食べていると、持っている携帯電話が鳴った。ルシエラは左手でおにぎりを持ったまま、右手で右ポケットの中にある携帯電話を出す。

「誰からや？」

「デューね。どうしたの？」

携帯電話を 통화状態にするとルシエラは耳に押し当てた。ディスプレイにはディオニージ・ドウリランダナの名がある。

ルシエラのかつての同胞であるが、彼は今どこにいるのだろうか  
とルシエラは考える。

雇い主の命令で世界中飛び回っている奴だ。

『どうしたの？ って、朝に電話をかけたら通じなかったんだよ。  
アン。おれはまだ日本にいる……蔵は？』

アンと言つのはルシエラのかつての呼び名だ。ルシエラの本名はルシエラ・フラガラツハであり、フラガラツハは別名をアンサーーと言ひ、そこからアンだ。デューも似たようなものであり、ドウリランダナをデュランダルと英語風に言い換えて、そこからデューである。

「蔵ノ介はすぐ側に居るわ」

『それなら彼にも聞かせて。おれも日本で生活することになったんだ……お前と同じ中学生になって、学校に通うことになった』

「……アンタも中学校に通う？ 何処の学校よ。並盛中とか……？」

並盛の名を出すのはそこが彼等にとつてはある種の重要な場所であるからだ。声に出して白石にも聞こえるようにしたので、白石も反応する。ルシエラは携帯電話を握りしめた。音がして、携帯電話が周囲に音を聞かせるようになった。

『神奈川県立海大付属中、四月から中学三年だよ……おれ、しかも男子テニス部のマネージャーすることになった』

「立海大付属中やて！？ デイオ君、テニスするんか？」

「マネージャーって言ってたじゃない」

この言葉に驚いたのはルシエラよりも白石であった。神奈川県というとルシエラからすれば東京都の隣にある県ぐらいの認識しかない。

『玖月の手伝いで仕事したりしてたらいつの間にかね。雇い主の命令だから……マネージャーはそうじゃないけど』

「選手としては出ないでしょう」

『出ない出ない。フェアじゃないからね』

フェアではないとデイオは苦笑いをしている。

「フェアじゃないって殺し屋やからか？」

『おれは殺し屋と言うか何でも屋かなー？』

「……デューは六番目の血よ。体内電流の操作が可能になるから……加速かけたり力上げたり出来るんだけど、アイツ、痛覚鈍くしてるのよ」

それをいうとルシエラ有能力である薬物精製でも似たような事が出来る。フェアではないというのは能力で底上げが出来るからだ。

二人は種類が違えど、ドーピングが出来てしまう。

狂気の血に目覚めた時点で一般人が送るようなまともな生活などやれないことをルシエラもディオも知っている。

『消しはしてないけどね。消したら消したで危険だから』

電話越しに聞いて解るがディオは笑いながら話している。

「立海ってな……ディオ君は聞いたるかも知れんけど、全国大会二連覇しとるんや。去年、ウチはストレートで立海に負けとる」

『二連覇は聞いてるけど……そっか。皇帝とか、サーリとか強い人ばっかりだしね』

白石は何かを押し込めるような表情をしてから言った。ストレートで負けていることを気にしているのだろうかとルシエラは考える。白石は二年連続で部長をしているのは聞いていた。二年生の時も部長だったのだ。

「中学三年生って、私は事情で仕方がないにしろ、アンタは高校二

年か三年でしように」

『協力者が中学二年なんだ。蔵と同じ年。学校はどっちにしる通ったことはないから中学でも高校でも良いけどね』

「デイト君も学校は通ったこと無いんか」

『無いよ。アン、それと那岐から伝言。一回連絡が欲しいんだってさ』

「那岐が？ 解ったわ……今からかける」

『イタリアは午前四時ぐらい何だけど……』

「起きているわよ。アイツ」

那岐と言う名を聞いてルシエラはすぐに予定を決める。イタリアにいたときの協力者であるが、イタリアと日本の時差を考えると昼の日本に対してイタリアは夜と朝の間ぐらいだ。季節からしてまだ夜である。

『補佐がしやすくなったということだけは伝えたかった。伝えることは終わり。これからおれ、病院に行くから、部長さんに逢いに行くんだ。入院中だつて。花を買いに行かないと駄目らしくて』

「日本だと鉢植えは持って行っちゃ駄目よ。シクラメンや赤いバラも駄目。白い花はかすみ草ぐらいなら他と混ぜればいいし、小菊も駄目。本とかが良いわね」

『了解。本は適当に買ってくる』

細かいことをルシエラは言うがこれは忍足医院で聞いたことだ。鉢植えだと根付くという意味があり、縁起が悪く、シクラメンも死や苦を連想するし、赤いバラは血を連想するから駄目であり、白い花は淋しげで入院患者の気を滅入らせ、小菊は仏花であり、外国では不幸の象徴だ。通話を終える。

「……ルシエラちゃんは世間話とかせえへんな……どうして学校に通うことになったとか聞かんのか」

「アイツの雇い主がそう言ったから」

「経緯とかあるやん」

「……職業病ね……最低限のことしか言わないというか、世間話もするときはするんだけど」

裏社会には様々な事情を抱えた者達が居るし、細かい経緯などは聞くときと聞かないときがある。ディオの雇い主についてルシエラは少しは知っているのいつもの気まぐれだろうと言う感じだったのだが、

白石からしてみれば会話が乾燥しすぎていたらしい。

ルシエラは通話を終えた携帯電話から登録してある番号を呼びました。

「那岐つて……?」

「デューと同じ結社の出身なんだけど、細々としたことをさせるのに借りてるのよ」



耳に携帯電話を押し当て、ルシエラは出るまで待つ。出なかったら出なかったでまたかけ直すだけだ。

イタリアは午前四時を過ぎた頃だ。反応は期待していなかったが、コール音が途切れた。

『お前、時差って言うものを知ってるか？ これから寝ようとしていたのに平然とかけてくる』

「知っているわよ。これから寝るなら寝る時間を少し伸ばしなさい。電話かけろって言ったからかけたのよ」

白石が聞いたのは若い声だ。非常に不機嫌そうである。自分と同じ年か、もしくは少しだけ上のような声だった。

少年の声である。彼が那岐だろうと白石は思った。

『最後の電話が事情の説明に金振り込んでくれてって用件だけだし』

「……蔵ノ介にも言われたわ。会話が世間話がないとか」

『する気になつたら出来るけどしないときはとことんしないからね……しばらくは日本に滞在するんだろう』

「私が帰ったら帰ったで不味いし、今、攻められたりしたら勝てないわよ」

『情報攪乱はしておいてるからばれることはほぼ無いけど油断はしないで。蛇足だろうけど』

「心配してくれてるの?」

『僕以外のみんながね』

ルシエラは電話越しにおかしそうに笑っていた。那岐が心配していないと言っていることを聞いて嬉しそうにしている。

「考えたいこともあるから……そっちはどう?」

『出来そうな依頼はノイにやって貰ってるけど……君の悪名、凄まじいからね。消えたら消えたで騒ぎになってる』

「悪名だなんて」

『……解つてて笑うな。依頼者が偽ってたりしたら殺すし、やるなら徹底的だし』

(ゴルゴ13……ゴルゴ13や……)

白石の脳裏には日本有数の最長漫画が浮かんでいた。笑いながら話すルシエラよりも、ネタの方が浮かんでしまったのは、逃避なのか、白石が大阪人なのかは不明だ。

『コネとか使うに使うし、今まで色々と殺しておいて良かったね』

「貸しとかも作りまくったけど、この界限、人情よりも義理が大きいんだから……シチリア系は別だけだ」

『資金の問題は無い。情報屋としての基盤もあるし、ジンガレットの基盤も足せばやっていける』

「……電気代が酷いなよね……アンタのネット代とか、やって貰うと助かるから良いんだけど……連絡系統は？」

世間話を二人はしていた。日本語でだ。イタリア語ではないのはルシエラが日本語も使えるからだろうか。

『連絡だけど……ディオにタブレット端末を調達して貰って君の所に送って貰う。あると便利だし、表向きの連絡は、エメールを出すよ』

「タブレット、板？」

『ノートパソコンにしておく』

速攻で那岐は答えを変えてきた。まるで答えが通じなかったのですぐさま別の意味が通じるものにしたような……実際、そうなのだろう。

「みんなは元気？」

『元気だよ。セナやキヨウも、トートやノイも……声、聞かせられるときには聞かせてあげて』

「イタリアにいる癖にみんな日本語使うんだから」

『だって日本人ばかりだし……何かあれば連絡はする。僕は寝る』

「おやすみなさい。那岐」

会話が終わり、ルシエラは通話をまた終えた。

「那岐って日本人？」

「直江那岐、日本人よ。コンピューター関係とか情報に強い。戦闘力はないんだけど、私が居るから問題無かったわ」

那岐についてルシエラは簡潔に教えてくれた。ルシエラは借りたと言っているが補佐をさせるために借りたようだ。

ルシエラは食事に戻っている。

「仲間、居ったんやな」

「……仲間と呼ぶべきかは不明ね。同胞と呼ぶなら他の剣王だけど、成り行きで一緒に居るくらいだから」

おにぎりをルシエラは一つ食べきっていた。成り行きと言っがどのような成り行きでそうなったのか、

那岐は借りているようだが、白石はルシエラに対しては知らないことばかりである。

守秘義務とかもあるだろうし、聞いたところで教えてくれ無さそうだが、一つだけ教えてくれそうなおことがあった。

それは。

「ルシエラちゃん、機械、そんなに好きやないんか？ コンピューターとか苦手？」

「……好きじゃないだけよ」

（苦手なんか……）

ルシエラはコンビニおにぎりを白石の顔面に投げつけた。白石は額に三角おにぎりの角が当たる。

聞かれたくないことばかりのようだが、どうやらこのことも聞かれたくないことの一つだったようだ。

【F.i.n】

コンビニおにぎり 後編（後書き）

終わりのパターンが毎度同じみたいな感じですが裏社会の人間とか  
違うんじゃないかとか、想いながらもそう言う反応見ていたらあん  
まり変わらないとか

白石も想っているとかいないとか……別のパターン今度考えよう。

千歳がこれで出るはずだったのに出なかったので次回で

千歳編とかもう少し終わったらディオの経緯とかも書くはずす

でんせん 前編(前書き)

午後の部、千歳登場ですが熊本弁はアバウトすぎです。  
あれは千歳弁になるんだろうか

## でんせん 前編

【でんせん】

千歳真鶴にとって、千歳千里というのは一日違いの年上の従兄であり、対等の立場で接してきた親戚でもあり、

放っておけない者でもあった。大阪駅の前で彼女は腕時計で時刻を確認する。

背の高い私服姿の二人は人混みの中でも目立つ方であった。

「千里。そろそろ行かないと、私も新幹線があるし」

「大坂城とか見学できたし良かったと」

「熊本城の時は飛駿とミュキも居たわね」

熊本城には真鶴の弟の飛駿と千歳の妹であるミュキと行った。去年の秋頃の話だ。

あれから半年が経ち、千歳も真鶴も熊本を出て、それぞれ、大阪と東京で活動しようとしている。

真鶴は速めに東京に着くはずだったが、千歳と共に新幹線に乗ったのが悪かった。

千歳とは大阪で別れるはずだったのに時間があるのだと言われて大阪を観光してしまったのだ。予定がずれたので、東京の方に電話をしたりしてから、大坂城へと行っていた。

「飛駿は以外と城好きやったし、ミュキも楽しそうだったと」

「今度、二人も大坂城に連れてきましょう。千里、しっかり行くの



よ。道草しちゃ駄目だから」

弟は以外と城が好きだったし、ミユキも外で行動するのは好きなのだ。

「そこまで釘さんでも、ちゃんと行くったい……真鶴」

「私は東京に着いたら連絡するから」

新幹線の時間を確認し、真鶴は大阪駅内へと行こうとする。予定通りに行かないというのは真鶴は余り好きではなかった。

「真鶴。元気で」

「貴方もね」

呼びかけられてから真鶴は軽く言っと大阪駅内へと行く。一人残された千歳は頭を掻いてから、のんびりと憶えた地図通りにこれから一年間住むことになる四天王寺中の寮に向かった。

千歳が四天王寺の寮に向かっている頃、千歳が来るはずの駅前では忍足謙也、財前光、金色小春、一氏ユウジが待っていた。

「ここで待つとれば来るんっすよね」

「ルートのには間違いないわよ」

「さすがやで小春！」

「千歳が来たら歓迎して、寮に連れてって、白石達と合流やな」

謙也はあらかじめ、監督である渡邊オサム達と千歳のことを話しかけていた。

オサムは午後は競馬に再挑戦しに行くらしいので、自分達だけでやらなければならなかった。

「歓迎用の布とか作った方が良かったかな？」

「いらんっすわ……ユウジ先輩がつくつとらんの、珍しい」

「ルシエラを笑わせるための方に比重が行っていたからよね」

四天宝寺はお祭り好きである。財前は千歳を迎えるための立て札でも作っているかと想っていたらしいが、立て札も何も無い。

「何せ、千歳についてはあらかじめ聞いたが、ルシエラについては唐突やからな。珍しいやん、イタリア人」

「謙也クン。謙也クンの家にホームステイしてるけど、家だとどんな感じなの？」

千歳はまだ来ない。ユウジや小春の話題はルシエラの方に向いていた。千歳の転入については三月の中頃から聞いていた。

いつ来るかまでが解らなかったただけだ。ルシエラはと言うと、予告も無しに現れたのだ。

話題になるのも無理はない。

「どんな感じ……箸の使い方は上手かったで。外人やとは思えんぐらいに器用に食うとった」

謙也はルシエラとの生活を想い出していた。

箸は東南アジア圏の道具であり、ヨーロッパではまず使われない。ヨーロッパでも日本食ブームはあるようだが、食べるにしても、フォークやナイフを使いそうではあった。

ルシエラは箸を器用に使い食事をしていた。魚の骨だって取っていた。

「お嬢様、さすがや……」

「何でもかんでもお嬢様で解決するんはどうかと想いますけど」

「他には何かある？」

「漫画とか本とか新聞好きやな。ジヨジヨを読んどったし、他にも何でも読んどるし、頭ええわ。英語教えて貰た」

新聞は毎日チェックしているらしく、良く読んでいた。本も急いで読むときと、ゆっくり読むときがあったがどっちにしろ、好きらしい。ペースが違うことについて聞くと、速読は情報が入るが、情報として文を入れるので情感はないらしく、情感を感じたいときはゆっくり読むらしい。

謙也は英語は得意な方だが難しい問題があったときにルシエラに教わった。

「英語か……イタリア語とどう違うんやろ」

「聞いてみたら、文法とか違うとか、アイツはどっちも同じぐらい

に使えるらしいで。筆記体で正解書いて、ブロック体書いてとか頼んだり。国語とかも得意や！ 国語も教わった」

「筆記体とか使えるって外人やな！」

「……そこ、驚く点じゃ…… 国語をルシエラに教わるっておかしいっすわ」

英語とイタリア語はヨーロッパ圏の言葉なので勉強する気になれば憶えられるにしろ、日本語とイタリア語や英語では根本的に違うところがある。財前に言われ謙也は昨日、弟である忍足翔太に似たようなことを言われたことを思い出した。

兄ちゃん、ルシエラさんに国語教わるって……。

弟が呆れていたのを兄は回想した。

「ルシエラは勉強が出来るってことで、その他にも、エピソードはないの？」

「エピソード言うても、生活してそんなに日も経つとらんし、イグアナを可愛がったとかぐらいで……」

「着替えを覗いちゃったとか無いの？」

「そんなベタなエピソードを謙也さんが経験……」

小春が言うと謙也が無言になった。財前、小春、ユウジが謙也に視線を送る。

「……し、しとらんで！？ 着替えは覗いとらん！ 風呂なら覗いてもうたけど…… 事故やで！？ ユーシと電話終わって、シャワー

浴びようと風呂場行ったらアイツ、ぼんやりシャワー浴びとって、振り向いてばけーで俺が悲鳴あげたわ！」

「互いに裸だったの……」

「服着てシャワー浴びるほどボケや無いで。ルシエラ。誰も居らんと想てシャワー浴びる気でおったんや」

「つまり謙也も服脱いどったんやな……」

財前が携帯電話を取りだして操作を始めていた。一気に喋った謙也は小春とユウジに問い詰められている。

「脱衣場に鍵かけとらんのやで！？ アイツに聞いたら、鍵をかけてると危ないって、かけとらん方が危ないわ！！」

「ルシエラちゃんの反応はどうだったの……？」

「俺の方が逃げたから……」

数日前の夜だった。シャワーを浴びようとした謙也はルシエラがシャワーを浴びていたことに気がつかなかった。

彼女はずっとシャワーを浴びていて、謙也が来ても反応が鈍く、謙也の方が逃げてしまった。

ルシエラは後で考え事をしていたので、とだけ言っていたが、今度また同じ事があるとまた心臓に悪いので、シャワーを浴びるときは互いに言っておくようになど決めごとをしておいた。

「外国やと、水の違いとか香水の発達とかで風呂は毎日入らんからシャワーばっからしいっすわ。入るときもたまにあるらしいけど」

「物知りやな。財前」

「友人情報で。日本の習慣の方が珍しいって、水が安いとか……」

「慣れてもらわなアカンな」

謙也かは財前から情報を貰った。風呂に毎日のように入るという習慣は日本の習慣であり、ヨーロッパなどではシャワーですませてしまう。外国も風呂に入ることはあるが少ない。

「一つ屋根の下で暮らすんだからもつとハプニングがあっても良いと想うんだけど、一緒に布団で寝ちゃったりとか！」

「まだ始まったばかりやで。小春……ホームステイは始まったばかりや！」

「騒ぎ立てられても困るで!？」

「先輩方! あれ……」

小春とユウジのからかいのネタになっている謙也であるが、そのからかいても財前の声で止まる。

財前の視線の先には背の高い、少しだぼつとした白い長袖を着た青年が歩いていった。

謙也は彼が現れたことに心中で感謝しつつ、彼の名を呼んだ。

「千歳     !!     こつちやで!!」

ルシエラ・ガートルード・ジンガレットィは始めて四天宝寺の寮を見た。

「……蔵ノ介……これはあばら屋というものじゃないかしら？」

「寮なんや。これでも、寮なんや」

四天宝寺中の近くにある木造二階建ての建物が、四天宝寺寮だった。ルシエラが白石蔵ノ介に聞いてしまうのも無理はなく、寮は崩れかけそうな窓やドアに崩れている窓やドアがあった。側には自転車が何台か停まっている。

建物は横に長い。ルシエラはあらかじめ白石から貰っていたパンフレットを速攻で読んでみた。

”スポーツやお笑いやお笑いを真剣に学びたい方、歓迎です。その他、四天宝寺に通いたい方が遠いという方も歓迎”と書かれていた。

「お笑いが二回ほど書かれていたりしてるわね……一般的思考だとスポーツの方が大事じゃなくて？」

「四天宝寺やからな。もう数年頑張れば建築されて百年ぐらいになるらしいんや」

「華月を作るぐらいなら、この寮を改築した方が良いんじゃないかしら」

庭らしき場所には立派な畑が出来ていたし、物干竿には布団が何枚か干されていた。良く分からないオブジェも置かれている。混沌とした空間だ。

「二人とも」

「師範。師範はここに……住んでいるのね」

ルシエラと白石を迎えたのは石田銀だ。銀は両手を合わせる。

「修行に良い。小石川はんは寮の掃除をしとる。入寮者よりも、部活やお笑いやたまに勉強で使う者の方が多い」

「勉強がたまになのね」

建物は日本家屋である。

パンフレット内には食事は自炊で、寮の代金も書かれていたが非常に安い。性別や国籍不問と書かれている。

年齢は一応は中学生までであったが、事情があれば中学生以上でも良いと書かれている辺り非常に大雑把だ。

「千歳はんの荷物は宅配便で届いとった。部屋まで運んではあるんや」

「私達は何をすればいいのかしら」

「掃除とかやな、少し寮も崩れかけとって」

「少しじゃないと想うの」

ルシエラは笑顔を浮かべた。

掃除をしろと言われたのでまずはルシエラと白石は寮の中に入ることにする。玄関は広く、ルシエラと白石は靴を脱ぎ、寮の中へと入る。歩いてみると、食堂らしき場所が見えた。



らしき場所とルシエラが判断したのは食堂の看板は食堂と大きな板で墨字で書かれていて扉の側についているのに、扉そのものはなく、部屋の中には広々としていて、何故かドラムセットやギターが置いてあり、食べ物を食べる道具がないからだ。

「そこ、食堂の機能が停止して久しくてな。寮生は台所で自炊して適当な場所で食っとるんや」

「……食堂の看板、外しなさい……自炊なの？」

「自炊やな。誰かが纏めて作ったもんをみんなで食うたりもするが」

白石の解説にルシエラは冷静に言う。彼女は寮についても知識しか知らないがこれはおんぼろすぎるだろうとは感じていた。

イタリアにあるセーフハウスや拠点として使っていた屋敷もそこまでのボロさではない。

歩いていくと談話室というのもあった。

談話室を覗いてみるとソファや椅子があり、大きな画面の液晶テレビが置かれていて、DVDプレイヤー兼ビデオデッキが繋がっていた。棚にはずらりとお笑いのDVDや映画のDVDが揃っている。

一階には他にもライオンの口からお湯が出る風呂場があったり、ゲーム部屋と呼ばれているゲームが置かれている部屋などもあるらしい。

階段を案内されて二階に上ってみるが、階段が今にも抜け落ちそうである。

二階の廊下も狭かった。そこそこの広さは昔はあったようだが、置かれたものが廊下の左右に並んでいて、廊下の幅を狭くしていた。

「小石川」

「白石に師範、ルシエラも、掃除やけど、進まんなあ」

足下に水を入れた金属製のバケツを置き、白色の雑巾で窓を拭いていたのは四天宝寺テニス部副部長の小石川健二郎だ。

「前に一回、卒業生が出た時に掃除したんやろ？」

「この寮は広い。掃除が追いつかん……古いしな」

「捨てられそうなもんは俺も捨てるべきやと想うんやが、どれがゴミでどれが物なんか不明でな」

「……確かに、広いわね」

小石川が廊下の側の荷物に目をやる。ルシエラが床を踏みしめながら呟いた。

「まずは掃除からやな。ゴミ捨てるはその次や」

白石がやるべき事に順位をつける。掃除を優先して、掃除をしなからゴミを見分けて捨てることにした。

「まずは道具を揃えな。壊れやすい所もあるから皆、気をつけて欲しい」

「寮を建て直すのが先決じゃないかしら……」

寮生である銀が言う。ルシエラは銀に寮についても少し聞きたかったが聞いたら聴いたで、この寮を速く建て直せと言う

気持ちが一層強くなりそうだったので聴くのは止めておいた。や

るべきことは掃除だからだ。

寮は北寮、中寮、南寮の三棟に別れている。

上空から寮を眺めてみればフォークの先端のようになってるのが四天宝寺の寮だ。

「ここはボロいけどネット環境もあるんやで」

白石とルシエラは北寮の方を担当することになった。銀と小石川は先に一階を片付けることにしたらしい。

金属のバケツに水をくんで雑巾を入れて持って行く白石の隣を水モップを持っているルシエラが歩いていった。

「使っていない部屋を掃除すればいいのよね」

「何処が使われとるんかとかもざっばらしいし……北棟に千歳の部屋を取るとか聞いたな」

「千歳さん、どんな人なのかしら」

「俺と謙也はダブルスで対決したことがあるけど、かなり苦戦したな……この部屋か」

柱に千歳千里の部屋と白い半紙に炭で書かれていた張り紙がしてある。

千歳の部屋は何もなかった。日当たりは良い。硝子窓があり、白い壁の壁紙が剥がれかけている。

畳は畳と何とか解る程度だ。

荷物である段ボールなどが隅の方に片付けられている。

「……何も無いわね。寮の存在を先に知っていても……ここには住

みたくないわ」

ルシエラはモップを柱に立てかける。白石はバケツを部屋に運んだ。

「女の子にはこういうところ、きついやろうな」

「昔なら別で、今はね……さっき、ダブルスで対決したって言うけど、西日本大会よね」

昔なら、とルシエラは言う。昔というのは復讐屋をしていた頃よりも、もっと前、一番最初の組織に居た頃だ。

「西日本大会とか知つとるんか」

「財前から話は聞いたわ。……テニスは立海つてところが、一番強いのか？」

「強いで。四天王寺がストレート負けした話はさっきしたけど、去年の大会の準優勝は牧ノ藤って言う兵庫の学校やったんや。立海はウチの方が勝つのに苦労したとか言うとならしい。こっちとしては複雑やな……俺はあの時、試合せんかったし」

白石は去年の全国大会、立海との試合はしなかった。出来なかったとも言ふ。白石に出番が回ってくる前にストレート負けしたのだ。

「兵庫は……大阪の近くのコーナー……ね」

「……こむーね？」

「そつちでいう市町村……イタリアの場合、歴史が歴史だから」

「……パスタ？」

「イタリアをパスタで解決しないで!？」

イタリアの歴史とか言われても白石は知らないし、ルシエラもそのことは解っている。

コムーネはイタリアの自治都市を表している言葉であり、今は市町村を表す言葉だ。大きな市も小さな村も全て、コムーネになる。

「日本とイタリアやと、かなり違うやろう。滞在するとか不安とかないんか」

「無いと言えば嘘になるけど、イタリアに行く時点で危険なのよ」  
ルシエラの戦闘能力はかなり落ちてしまっている。今の状態では抱えたものを守りながら戦うなんてことは無理な話だ。これならば日本に居た方がマシなのである。

「そう言うのじゃ無くて、忍足家の生活とか、慣れへんことはあるか？」

白石に聞かれてルシエラはこのところの生活を回想してみる。

「生活は……シャワーを浴びていたら謙也が風呂場に入ってきて大慌てで出てきたりとか、何で鍵かけんねん! って」

「……それは、俺も謙也と同じ立場ならそう言うわ。かけられるなら、鍵かけようや!」

「鍵かけた状態でシャワーを浴びて刺客とか来ると危険なのよ。逃げられないし」

ホテルの部屋に滞在しているときはホテルの部屋に鍵はかけるがシャワー室などは鍵があつたとしても鍵はかけない。

能力で追い払うことも可能なときはあるが、出来ないときだつてある。逃げ道は確保しておくのが常だ。

「謙也が危険になるから風呂場では鍵かけるんや。これは雇い主からの頼みやで」

「蔵ノ介……そこまで頼まれたら聞くけど……そこまで頼むことなの……？」

「頼むことなんや。ルシエラちゃんも一般人の常識とか憶え……イタリアやつたら一人暮らしやつたんか？」

「ジンガレットイのそれなりに大きな屋敷で那岐や他と暮らしてたわよ」

ジンガレットイはルシエラがかつてやつた依頼で依頼料として貰つた貴族としての家名や土地や屋敷のことだ。

イタリアの貴族というのは形式上のものではあるが、生活をしていくためには十二分に役に立つものである。

「同居しとつたんか」

「いつの間にか、ね……抱えられないのは別のところにやつたりしたけど……良い天気ね」

ルシエラは息を吐く。

那岐にしろ、裏社会には何らかの事情を抱えて居るものばかりだ。そつでなければ裏社会で生活なんてしていないだろうが……彼等の生活は成り立つのだろうかとルシエラは考える。今更ながらに気がついたが、ルシエラが屋敷では家事や料理をしていた。

千歳の部屋になる場所は日当たりが良かった。午後の太陽が、部屋の中に差し込む。

「これから桜とか咲いたりな。四月になったら入学式があつて、学校生活も始まるで。ルシエラちゃんは初めてやな」

「貴方は、最後になるんだっけ？ 中学校は三年生だから」

ルシエラが話を聞きながら両足を伸ばして座り、白壁に寄りかかる。壁に体を預けた。その時だった。

「そや。悔いの残らんようにせんと、ルシエラちゃん!？」

白壁がルシエラが預けた体重により粉々に砕けた。

崩れた壁にルシエラの体は引つ張られるようにして倒れる。ルシエラは無言だった。

「……領域操作能力で寮を調べておくべきだったかしら……」

「領域操作能力とか能力はそんなに使たらあか……そんなんも出来るんか」

「出来るわよ。能力は残つてた」

小さいがはっきりとした声でルシエラは言う。領域操作能力は、因子を物に埋め込んで操作するほかにも一定の領域を操ることが出来る能力だ。領域と認識した場所を調べることが容易い。

しかし調べてみても結果が変わらないような気がして、この寮を建て直すべきだということは変わらない気がして、調べるのは止めた。

「壁が……ルシエラちゃんの体重で壊れた言うことは俺が寄っかかっても壊れたな」

「このまま壊して部屋を二つ繋げておいたらどうかしら、広いわよ」

ルシエラは軽く起き上がる。髪の毛が白い壁の粉塗れになっていた。ジャージも汚れている。

「ルシエラちゃん……動きが軽……」

「体術の応用ね」

狂気の血の能力とは関係無く、ルシエラは体術や剣術も使える。モップではなく必要になってしまったのは、壁であった瓦礫を取り除くための道具だった。

「剣とか体術とか、出来るんやな。銃とかも使えるんか？」

「使えるけどライフルとか、私よりも上手いのが二人居るし。疲れるから運動は余り好きじゃないけど」

体術にしても素手による近接格闘ならばルシエラ以上に上手いのが二人居る。一通りのことは習わされたのだ。



「好きやないんか……運動……」

「戦うのは好きじゃないのよ……疲れるし」

「……運動って戦闘のことか？」

「そうだけど」

「疲れるから運動と言う名の戦闘は嫌いなだけであり、戦わなければいけないときは戦うし、容赦はしない。」

「遠距離や戦う前から毒を入れておいたり領域操作で相手を潰しておくのが好みではあるが、そうも言っていられないときもある。」

「訓練と言う名の運動は欠かしていないが、スポーツとしての運動は余りというか殆どしない。」

「仕方が解らないというのがあったし、今までずっと運動という意味のスポーツをすると言う気持ちも無かったのだ。」

「テニスとか、セパタクローとか、運動もしてみようや。テニスは……ラケットとか買いに行こう」

「セパタクロー……あれは面倒そうね。やるなら、身長が欲しくなるわ……ラケットは選ぶの、手伝ってね」

「スポーツが運動と教えるようにしながら白石が微笑しながら言う。セパタクローは部活でしているのを見た。」

「ルシエラは外に立てかけてあったモツプを持って来た。」

「モツプ、どないするんや？」

「壁の残りを砕こうと想って。向こうの部屋、入居者居ないんでしよう」

「居らんとは想うで……部屋がホコリだらけやし。そか。壁を修理しようにもそうしたら寮全体修理になるしな……」

隣の部屋は掃除が適当であつた。空き部屋だつたのだろう。白い壁はルシエラが寄りかかつたところは砕けているが、まだ残っている。寮を修理するならば建て直した方が速いぐらいだ。

「モップの石突きで突けば壊せるだろうから」

「石突き……柄や無いんか」

ルシエラは白石の言葉を聞いて、彼の方を向く。モップを彼の前に出した。

「これを槍に見立ると、穂先がここ、口金、柄舌、柄、石突き。地面に突き立てる部分で流派によってはここも攻撃に使用する」

「……石突言うんか……知らんかったで」

簡単にルシエラは槍の部分について説明をしておく。

槍で言う柄の反対側の先端、地面に立てる部分が石突きとなる。ルシエラがモップで槍の技を軽くやって、壁でも壊してみようかとしたとき、部屋に誰かが入ってきた。

「白石部長、ルシエラ……何しとるんっすか？」

「ここが俺の部屋、にしては壁が……」

「財前、と……」

モップを持ったままでルシエラは気配がする方を見た。

そこには財前と、ルシエラが見たことがない青年が居た。身長が高い。ルシエラが知っている四天王寺の面々で、一番身長が高いのは銀だったが、銀よりも大きい。

「ルシエラ。コイツがこの部屋の主になる千歳千里や。千歳、今、部屋をモップで拡張中やからな！」

「……白石部長……意味が分からないんですけど」

「……モップで拡張……」

「貴方が千歳さん？ 私は……ルシエラ・ガートルード・ジンガレツティと言っただけど……」

ルシエラからモップを奪った白石がルシエラがやるうとしていたことを言う。しかし状況を知らない財前や千歳にとっては、白石が妙な存在に映った。

ルシエラは自己紹介をしようとしたが、するべきか悩んだ。

千歳は大阪という地域は九州とはノリが違うのだと実感させられていた。

一年間、大阪で過ごすことを選んだのは自分だ。自分ではあるが寮にて早々、寮の壁をモップで破壊されそうになるとは想っていなかった。

「寮の壁壊したら、ただでさえ崩れかけそうな寮が余計に危ないやろう。白石」

「……壊そう、提案したのはルシエラやで」

「お嬢様のルシエラがそう言うの解るわけないでしょう。止めるのが部長の役目じゃ……」

談話室で簡易な自己紹介が行われた後、小石川と財前が白石を注意していた。

千歳は談話室へと移動していた。

大きいソファーには白石が座り、その側には千歳が、小石川は側で立っていたし、ユウジや謙也、

財前は一人がけのソファーに座っている。自分を迎えてくれたのは西日本大会の時に逢った面々であり、寮にも案内された。古びた寮であった。財前に部屋の案内を任せて謙也やユウジ、小春は寮にいないはずのテニス部の者達を呼びに言っていた。どんな部屋かと少し楽しみにしていたら、

自室になるはずの部屋は壁が壁ではなく残骸となりかけていた。

「寮の建て直しは今年中にやらんと危ないやろ……四天宝寺華月とか食い倒れビルとか建てるモンは建てたから寮の方やろうな」

そう言ったのは謙也だ。今年中とは言うが千歳は一年は寮に住まないといけない。

「小春曰く、寮は来年には立て直しするらしいけど」

「地震が来たら終わりやで」

「せやから、建物を潰して新しいのになるな」

金色はルシエラの髪の毛を洗うのを手伝いに行き、居ない。財前がルシエラからモップを取り上げてから、一氏や金色も来たのだ。事情が話されて、まずは談話室に行くことになり、髪の毛やジャージが汚れたルシエラは金色に言われ、汚れを落とすに行ったのだ。

「俺は一年で寮を出るから……一年は耐えんと」

「一年ぐらいなら持つ……とは想うわ。この建物」

千歳の声に応えるように少女の声が聞こえた。

白っぽかった髪は金色だけになっている。紫色の瞳をした四天宝寺中男子テニス部のジャージを着たルシエラが戻ってきた。

髪の毛の水分はしっかりと取ったようだが、まだ濡れている。

「お湯を出して貰って髪の毛だけ洗ったわ。ジャージは予備のジャージを着て貰ったんだけど」

「小春さん、ありがとう」

「ルシエラは髪の毛が綺麗なのよね」

「みんな、揃ったことやし、これからのことなんやけど……」

小春とルシエラが来たことにより、白石が話し出す。

「千歳さんの部屋はあそこじゃ無くて別の部屋にするのね」

「それが良いっすわ。部屋はまだまだ余っとるし」

「俺もそれが良いったい」

「部屋は千歳はんに選んで貰うべきやろうな」

部屋は自分で選ぶことにした。それが出来るようになったのも壁が壊れたせいだ。財前の言葉に千歳は同意する。

銀も賛成していた。ルシエラも白石も部屋を買えるという思考が無かったようだ。

他の事を話そうとしていると、千歳が持っている携帯電話が鳴った。ディスプレイには千歳家とある。

「電話……もしもし？」

『千兄さん。無事に大阪には着いてるんだ』

声の主は千歳飛駿、千歳の従弟であり真鶴の弟だ。

「寮にも着いたと。部屋は壁が壊されて、別の部屋を選ぶところったい」

『……ボロいっばいからね。家賃安すぎだし、姉さんとか危ないんじゃないとか言っていたけど住めるなら良いで、決定したのは、千兄さんだから』

確かにこの寮を選んだのは自分だ。自分ではあるのだが……複雑である。飛駿が壊されたという言葉には触れなかったことを従兄は長年の付き合いで理解した。

「ミユキは？」

『おばさんたちのところ、これからオレも行く。送った物は全部届いてるか確認して必要なものは通帳に金が入ってるから、現地調達で』

「お前、真鶴みたい」

『心配なんだよ。家具とかどうでもよく何処か行きそうだし』

千歳には放浪癖があるが、寮の惨事を見てからは放浪癖は収まっていた。まずは自分の部屋を何とかしないと危険である。

「……飛駿、お前は寮の部屋に入ってみたら寮の壁が壊れていて金髪の外人がモップ持って壊れかけた部屋の壁にトドメをさそうとして、側のテニス部部长が拡張中や！ とか笑顔で言う状況に遭遇したらどういう反応を……」

『俺は何も聞かなかった。何もなかったって言うておく。またかける』

嫌な予感がしたのか飛駿は会話をすぐに終えてしまっていた。余り喋らない飛駿だが千歳とではまだ長く会話する。

あの従弟は危機的状況はすぐに察して逃げるか対応するかのどちらかをするが、逃げるを洗濯したらしい。

「ごめんなさいね。千歳さん、広い部屋にして壁は壊してしまった方が良くって……」

「部屋が広すぎても使うの困るやろ。千歳は確かに背は大きいけど

な

「百九十センチは超えてるわね……羨ましい……身長、私も身長は十センチは欲しくて」

「うちは身長が高くなりやすいと。ルシエラも、成長期に入ったら伸びるったい」

謙也がルシエラを咎めている。お嬢様だから日本語が上手いとあらかじめ説明を受けていたが、本当に上手かった。

「さっきのは誰や？」

「弟みたいな奴が電話かけてきて、すぐにどっか行くとか心配されとった」

白石に聞かれて、千歳は答える。飛駿は従弟だ。千歳には妹が一人しかいないが、すぐ近所に住んでいる従妹弟として、真鶴と飛駿が居る。

「今は行かんのでしょう」

「行かんったい」

と言うか、行けない。

「部屋選びはすぐにすませるか。必要なもんもはよ買わんと」

「謙也はせっかちね」



「急いだ方がええわ。ルシエラ、お前は休んどれよ。力が無いし壁とか壊されたら……」

「あれは寄り掛かったら壊れたのよ。貴方が寄り掛かっても壊れたわよ」

ルシエラは謙也に訴えている。ルシエラと謙也では謙也の方が体重が重い。

「蔵リンも休んでた方が良いわよ。千歳クン。蔵リンはいい人なんだけどたまにハメが外れるから」

「そや。四天宝寺はこれぐらいで引いとつたらアカンで」

「これも修行と想えばええ」

「俺としては引けるといふ感情を大事にして欲しいっすわ」

小春と一氏が、銀や財前が言う。いきなりの寮の洗礼だったが、彼等は悪い人物ではないし、この雰囲気は、前に居た獅子楽中よりもいいかもしれない。

「白石もルシエラも気にせんと……でも休んどって欲しいし……矛盾しとるったい」

千歳は苦笑半分、笑い半分で告げた。着いていけないときもありそうだが、悪くは無さそうだった。

【続く】

でんせん 前編（後書き）

ルシエラの言った自分よりも銃が得意な奴と近接が得意な奴は全員別です。

寮のモデルは吉田寮で。

何とか今年中には千歳が出せた……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7295v/>

---

そら色ワルツ

2011年12月17日02時45分発行